

タイ調査研究の 48 年

村嶋英治

Recollections of my Thai studies (1974–2022)

Eiji Murashima

1974年に大学を卒業と同時に特殊法人アジア経済研究所（新宿区市ヶ谷本村町42）の研究職員に就職して以来、2022年3月末に早稲田大学を定年退職するまで、途中2回転職したが、48年間弱、齢満71歳間近まで、愉快地に東南アジア大陸部地域研究を続けることができた。私の研究は、道半ばであり、未だ利用していない収集済み資料も手許に相当数あるので、今後は無所属研究者として研究を継続するつもりであるが、定年退職という、またとはない機会であるので、私の48年間の調査研究を中心に回顧しておきたい。

大学4年生の1974年初めに特殊法人アジア経済研究所の研究職員追加募集があり、試験の結果採用された。ここから、今日まで継続する私のタイ研究が始まるのであるが、農業機械・化学肥料・農薬による農業以前の「最後の百姓」¹を経験した、思い出の多い私の小、中学校時代からまず始めたい。

私は1951年5月3日に福岡県糟屋郡篠栗町大字篠栗の自宅で百姓家の長男として出生した。JRの博多駅から篠栗駅までの走行距離は、12.1キロに過ぎない。篠栗から博多へ、歩いても健脚なら2時間余で到着する。中学高校時代の私は博多から篠栗まで何度も歩いて帰ったことがある。この近さと交通の便の良さにより、今日の篠栗はマンションが林立する福岡市のベッドタウンと化してしまっただが、私の少年時代である1960年代の後半までは、静かな農山村で、春だけは「南無大師遍照金剛」と唱えながら篠栗新四国八十八箇所霊場（私の家は八十四番札所、現在では私と弟が管理している）を巡るお遍路さんの多い土地であった。この周辺は、石炭の産地であるが、篠栗での採掘は1950年代で終わっていた。我が家の畑の中や周辺には、古い時代に石炭採掘のために掘られた竪坑の跡が無数に残っていた。山肌を削った断崖には、赤土の中に、石炭の薄い層が露出していた。4-5歳の頃の記憶では、我が家の山の畑に、坑木で固めた炭鉱の坑道の入り口が2箇所あった。私は、坑道の中に入ろうとして、危ないと何度か叱られた。

篠栗は、南北及び東側の3面を500-600メートルの山で囲まれ、南北の間を多々良川の上・中流である金出（かないで）川が真西に流れ、川の両岸に水田が広がっている。

日本が敗れて第2次世界大戦が終わり、進駐軍が博多（この地の人の博多は福岡市を意味する）に上陸する直前には、髪を切り、顔に木炭を塗った博多の若い女性達が多数篠栗の山中に逃げ込んだと

¹ 私の「最後の百姓」としての経験は、村嶋英治「36年目のタイ地域研究」（寺田貴編『アジア学のすすめ、第1巻 アジア政治・経済論』早稲田大学アジア研究機構叢書、弘文堂、2010年、86-107頁所収）でも少々書いている。

いう。防衛研究所図書室の資料に、このような現象は博多だけのことであり、多分元寇の記憶によるものであろうと書かれていたのを読んだことがある。

福岡藩藩儒貝原益軒を中心に編纂された『筑前國續風土記』（1688年着手 1709年完成）は篠栗村について

此村むかしは南の山際に有て、民屋こかしこに在しを、慶長年中 長政公の家臣母里浄甫君命をうけ、所々の民家を今の地に移し集て駅家とす。福岡へ三里二十町あり。此川には深淵多く、鱒〔ハヤ〕多し。糟屋川の水上なり。宇美河内、須恵河内、山田河内よりも川流れ、多々良川に入れども、此川を本流とす。萩尾より流れ出る谷に、藤淵とて、ちいさき深き淵あり。おし鳥住む（貝原益軒編伊東尾四朗校訂『筑前國續風土記』、文献出版刊、2001年、401頁）、と記している。

また、『日本歴史地名体系第41巻 福岡県の地名』は「篠栗町」の項に次のように書いている。

慶長年中（1596-1615）黒田長政の命で篠栗街道に宿場が設けられ、飯塚方面から八木山峠を下った最初の宿場とされた。これが金出〔正しくは金川か〕宿（笹栗駅）で筑前21宿の一つ。…明治22年（1889）の町村制施行により篠栗村と勢門村が成立。昭和2年（1927）篠栗村が町制施行、同30年勢門村は篠栗町に合併した。明治37年石炭搬送を目的に吉塚駅と篠栗駅を結ぶ九州鉄道篠栗線が開通。昭和43年篠栗駅から桂川駅まで延長して筑豊本線と接続。…町域では江戸時代から農民による石炭採掘が行われていた。篠栗新四国霊場は天保6年（1835）尼僧慈忍が篠栗に立寄ったのが始まりで、現在では年間参拝者100万人を超えるといわれる。日本三大新四国霊場の一つとして重要な観光資源となっている（『日本歴史地名体系第41巻 福岡県の地名』、平凡社、2004年、459頁）。

以上からも分かるように、篠栗は農林業だけではなく、福岡と飯塚の間の篠栗街道の宿駅、篠栗新四国八十八箇所霊場の巡礼地、石炭の産出地でもあった。我が先祖も、篠栗のこのような経済社会文化環境のどの面にも関係して生きてきた。

小学校時代までの遊び

篠栗の山川、田畑、それに谷を堰き止めた溜池は、我々悪僧（わるそう、博多弁で元気な男の子の意）たちの恰好の遊び場であった。小学生の私達は、ここで昆虫、魚、鳥、木の実などを採り、溜池に筏を浮かべ、川で泳ぎ、川岸の笹藪の中や山中に「スミカ」を作ったり、蔓を使ってターザンごっこをした。

これらの楽しい遊びや農作業の手伝のために、私は小学校時代の昼間は、学校の授業と雨の日を除けば、殆どを野外で過ごした。昼間に家の中でゲームをしたり、テレビを見たり、漫画を読んだり、あるいは勉強した記憶は殆どない。

山や畑の中で採って食べた木の実や果物には、麦刈り頃には、ゆすら、ぐみ、木いちご、野いちご、桑の実。梅雨頃には、ヤマモモ、びわ、ハタンキョウ、アンズ。秋口には、アケビ、柿、山ナシ、山ブドウ、栗。冬は、金柑子（きんこうじ）など。

3歳ごろの幼児期の虫取りの記憶の始めは、父に連れられての蛭狩りである。我が家から300メートルほど北に離れた金出川（大川）は、今日でも5-6月は蛭が乱舞しているが、麦刈りや菜種の収穫

のころ（5月下旬）、ヒラクチ（マムシ）の目も蛍のように光っているから間違うなど注意されながら農道を歩き大川の川原に至ると笹を切って、笹の葉で蛍を捕らえた。少し大きくなると昼間に大川沿いの笹や草の葉の裏に無数に留まっている蛍を捕らえた。川の小石の間には蛍の幼虫もいる。小学校に上がる前から、近所の子供達とお宮やお大師様（八十四番札所）、小学校などでセミを取った。ハエ取り紙の粘着物を竹竿の先に塗って、高い木の幹に止まっているセミの羽に当てるようにして捕らえた。この取り方でチイチイ（ニイニイ）ゼミ、アブラゼミ、ワシワシ（クマゼミ）は簡単に捕まるが、ツクツクボウシ、ヒグラシは機敏でなかなか捕らない。ニイニイゼミが鳴き出すのは夏休みが始まる7月20日頃、アブラやクマゼミは7月末にならないと出てこない。東京に来て、毎年セミの鳴き初めを気にしているが、温暖化とともに1-2週間早くなったのではないだろうか。夏の終わりには、南瓜畑でコオロギどり。コオロギは、雑草を引いて山積みにしたものの中にくらでもいた。秋から冬の初めは、ウメの木などから垂れ下がってくる蓑虫（ミノムシ）の袋を剥いで遊んだ。

小学生になると捕虫網をもってチョウやトンボを追いかけ、更に3-4年生くらいになると夏休みの昼下がりに1時間近くも歩いて山中のクヌギ林に至り、幹や根に集まったクワガタ（時には大クワガタ、平クワガタもいた）、ミヤマクワガタ、水牛、カブト虫などを採った。これらの昆虫は、お盆頃には合計百匹以上になり、大きな数個の缶箱（釘で空気穴を開け、餌の砂糖水を入れていた）の中で一晩中ガチャガチャと動いていた。昨年朝日新聞（2021年5月23日デジタル版）とアエラ（2021年12月27日、35-36頁）で、納得し難い記事を読んだ。埼玉県的小学6年生が、夜行性であるカブト虫が昼間に活動していることを「発見」という趣旨であった。これはニュースにするほどの新発見ではないことは、昼間にもカブト虫を沢山捕らえていた私のみならず、多くの昆虫少年たちも同意してくれることだろう。

鳥は、まず煉瓦ワナでのスズメ獲り、屋根の瓦をはいでスズメの巣探しから始まって、春先のヒバリの巣探しである。

3月末頃の陽気になると、青々と成長し始めた麦畑や蓮華畑の上に、ピークパーチクさえずりながら垂直に上昇するヒバリが現れる。さえずり声を聞くと、私達はヒバリが飛び立った近くの田んぼの中を丁寧に探したが、見つかるのはネズミの巣ばかりで、一度としてヒバリの巣を見つけることはできなかった。

小学校の国語の教科書にブッポウソウと鳴く鳥の話があったので、その声を聞いて見たいと山裾を歩き回ったが、聞こえるのは「チットコイ、チョトコイ」というコジュケイの声ばかり。しかし、6月末頃、梅雨時の霧に覆われた山中には、カッコウの声が響いた。

未だに興奮を覚えるのは、罠を使ったメジロ獲りである。

篠栗小学校の飼育班の1年上級の郡嶋さんとともに、罠を使ってメジロ獲りをしたのは4、5年生の時である。罠は高音（たかね）を張ることができる上等のメジロでなければならない。2メートルほどの竹竿の先端に罠の入った竹カゴを吊るし、竹竿に何本か残した枝にトリモチを塗り、椿の花も飾って、罠と野性のメジロの鳴き競争が始まるのを待つ。鳴き競争で負けた野性のメジロは罠のカゴ近くまでおびき寄せられ、他に留まる枝もないので、トリモチを塗ってある竹の細い枝に留まった瞬間、動けなくなり、足が枝に接着したまま、体はくるとひっくり返り、宙づりとなる。近くで身を潜めていた私たちは、急いで飛び出して、捕獲する。折角トリモチにひっかかっても、バタバタと暴

れて逃げ出すメジロもいるから急を要するのである。

私は捕らえたメジロ2羽を大切に1羽ずつ竹カゴに入れて飼っていた。練り餌の他に、時々なけなしの小遣いである5円を投じてミカンを1個だけ買い、二つに切ってカゴの上に置いてやった。一羽は餌をやる時逃げられ、もう一羽は野良猫にカゴを破られ逃げ出した。

トリモチを用いた悠長な捕獲方法に飽きた我々は、罟の前にかすみ網を張って、近づく小鳥を一網打尽にしようとしたこともある。

メジロの捕獲は今日では違法となってしまったが、1960年頃には、多くの家々の軒先で鶯やメジロを公然と飼っていた。

我が家の敷地の真ん中を比較的大きな用水路が流れ、家の表側は旧来の篠栗街道に面し、裏側は農道だが、その両方の道路と並行して水路が流れている。即ち、家の中を1本、家の外縁に沿って2本の水路が流れている。これらの水路での魚取り遊びは、3歳くらいから私の日課であった。田植が終わり7月を過ぎる頃には、田んぼの溝には湧くように小鮒が多数出現した。小学生になると、金出川(大川)に入って、魚すくい(小鮒、シマドジョウ、キンネンドジョウ、四ツ目(オヤニラミ)、ドンボ、カモツカ、稀にギュギュウ(アカザ)など)や、ミミズ、蜂の幼虫(アシナガバチの巣を棒でつつき落として採取)、アザミ虫、川石の下の川虫などを餌にして釣り(釣れるのはオイカワ、カワムツ)を楽しんだ。獲れた魚は、みな鶏のエサになった。

大川の本流に注ぐ金出側の支流は、水が澄んでおり、ミズスマシやアメンボが水面を泳ぎ、30-40センチの川底の藻の中にザルを入れれば、タガメ、ゲンゴロウ、水トンボなどがとれた。時には厄介者の大きなアカバラ(イモリ)も入ってきた。この小川の堤防の上では、小学5-6年生の夏休み明けには、級友達と何日間も暗くなるまで小鮒釣りに興じた。この川に来れば、毎回、川の上に突き出した小枝の間を往復するカワセミの姿を見ることができた。

庄の池では、皮を剥いたトノサマガエル(土色のイボガエルはダメ)を餌にしてザリガニ釣りをした。ザリガニはいくらでも釣れたが、小さい茶色のアメリカザリガニの子供が中心で、アッカンと呼んで珍重した大きく赤いザリガニは少なかった。餌にする蛙は池に行く途中の小川に沢山いて、容易に捕まえることができた。ザリガニは稲作の害になるので、持ち帰ることはしなかった。

篠栗の町中から4キロほど上流に上った山中(内住)にある同級生の古屋君の家にも、しばしば遊びに行った。川ではヌルヌルした油バヤ(タカハヤ)が入れ食い状態で釣れ、2時間足らずでバケツ一杯になった。鎌で刈れるほどズクボウ(ツクシ)が立つと古屋君が言うので、見に行くと、確かに一面ズクボウの野原だった。

しかし、1970年代以降の護岸工事のため、我々が魚釣りや水泳をした金出川の淵は失われてしまった。

小学校2年生から毎夏休み、母は3人のこどもを近くの若杉山に植物採集に連れていった。山王から荒田を経て若杉山に登り、若杉楽園から降りてくる場合と逆のコースを取る場合もあったが、いずれにしても山頂付近で、冷やしたトコロテンを食べるのが楽しみであった。若杉山から荒田に下る山道の、小さな水溜まりのなかには、小型のサンショウウオが何匹も棲んでいた。

篠栗はタケノコの産地でもある。3月末から4月初めに自家の竹の子山で孟宗竹を掘った。6月の梅雨時になると山中でハチク竹、青竹のタケノコを取った。掘るのではなく、長く伸びたタケノコを

折り取るか鎌で刈り取った。4月の春先には母と共にツブキ（ツバ）を取った。

植物採集をしたり、野草を掘ってきて家の中に花壇を作って楽しんだり、山の中で遊び回ったり、祖父の林業の手伝いでしばしば山に入ったので、篠栗の植物相は、私の眼に焼き付いている。私はどの地を旅行しても、その地の植物相が篠栗の植物相とどの程度同じかを無意識に比較している。2007年1月に、南京郊外の紫金山の中山陵を訪問した時、その雑木林の下の植物相が、篠栗のそれと瓜二つに思えて驚いたこともある。

山仕事

1955年の早春、私は4歳になる直前に流行性腎盂炎（この病名が正しいかどうかは疑問）に罹り九大病院に1ヶ月ほど入院した。臉が腫れ、尿に蛋白質が混じた。患者の子供の集合写真が残っているので、当時流行したものであろうか。帰りはハイヤー（タクシーをこう言った）に乗せられて帰ってきた。これが私の乗用車初乗りである。九大病院から退院した日、祖父から髪を伸ばしているから病気になるのだと言われて、坊主頭にされることになった。仏間でそういう話になったが、丁度その時仏間の畳の上で、ノミが私の身長以上、即ち1メートル以上も飛び上がったことを鮮明に覚えている。当時仏間と言わず、座敷、仲居などの畳の縁にはノミが潜んでおり、睡眠中に刺されることは珍しくなかった。ノミとの共住生活は、小学2年生ころには終わった。どうしてノミがいなくなったのだらうと長らく不思議だった。兎に角私はこの時から大学1年まで坊主頭を続けた。

1956年（5歳）の夏の間、自宅の座敷に前年と同じ病で寝込んだ。父はスイカを每晚買ってきて菓だと言って無理矢理食べさせた。

1957年（6歳）になる頃には不思議と元気になった。6歳になる直前の春、我が家の苗代田から、我が家の裏を走る国道201号線（現在は県道607号に格下げ）を走る車を数えて見た。随分長い時間だったが、トラックが2台しか通らなかった。これが、私の記憶している最初のリサーチである。

我が家には山林が5町歩ほどあり、現在は私と弟で共有しているが、篠栗小学校に上がる前に祖父に連れられて、日ノ浦の山に杉の植林にのぼった。家から2キロほどの距離に過ぎないが、坂道を上るのは本当に苦しかった。

戦後の復興期でかつ材木輸入の自由化以前であったので建築用材木は高値で売れた。祖父は熱心に林業に励んでいた。

30-40年成長した杉や檜を伐採して運び出した後、次に苗木を植林することになるが、植林の季節は冬から早春である。植林する前には、伐採した木の枝や葉を枯らし、その後冬から春先に火を付けて燃やした。油分を含む杉や檜の枯れ葉はメリメリと燃え上がり、湿気の多い枝からはモクモクと白煙、黒煙が上がる。このような山焼きは、山々でしばしば行われていた。しかし、火の管理が悪いと山火事になる。祖父は火を逃して山火事になることがないように、注意深く「向かひ火」を放つことを幾度となく教えてくれた。燃やす範囲を限定して、中心部で火を付けるとともに、外縁部でも「向かひ火」を付けて、中心方向に火を送り、それ以上外には燃え広がらないようにするのである。

山焼き後、苗を植林したが、祖父は植え付けた苗木の間の地味のよい所を選んで、アライモ（里芋）の種芋を、ドンダロス若しくは唐米袋と当時称したジュート袋で運び、植え付けた。秋には美味しいアライモが収穫できた。これは、苗木が大きくなって陽当たりが悪くなるまで数年間続けた。山焼き

後の芋栽培は、焼き畑農業の名残なのであろうか。

数ヶ所の山で楽しい山焼きを経験した小学校低学年の私は、友達と大川の川原の枯れススキや葎に火を付けて、向かひ火で止めた。川原近くまで家が建て込んでしまった今日ならば、消防車が駆け付けて放火事件にされてしまいそうだが、当時は家一軒なく、方々の山や田畑で煙が上がっていた時代であったから、気にとめる大人はいなかった。

植林が終わった後の山仕事は、まず夏の暑い時期に大鎌で下草を刈る「くろぎり」。篠栗の冬は日本海側の気候で、積雪も少なくない。積もった雪の重みで倒れる若い杉や檜が続出した場合は、雪の降りしき中、倒木を起こして荒縄で支えた。ある程度大きくなると間伐、更に梯子を掛け命綱も使って下の方の枝を打つ枝打ちがある。祖父は亡くなる数年前まで、午前中は山仕事に出て、間伐した材木や雑木を担って帰宅した。これらは風呂を焚く薪（たきもん）となった。私もしばしば祖父のお供で山に入り、老後は同じような生活を送るつもりでいた。

祖父は杉や檜は30年もすれば伐採でき、子孫は纏まった収入を得ることができると楽しみにしていた。しかし、安い外材が無制限に輸入されるようになり、伐採して売ろうにも売上は伐採に要するコスト分にもならなくなった。

5年ほど前、私が6歳の時に祖父とともに植えた杉を見に、久し振りに山に入った。かつてどこの山中にも、上から下に走る数条の真っ直ぐな溝があり、これが道の役割も果たしていた。これらの溝は「胴引き牛」(こって牛とも言う)に伐採した木材を引かせて麓に降ろした跡である。胴引き牛とは、山から木材を引き降ろすために使った、去勢をしていない巨大な黒い牡牛で、そのサイズは、普通の農耕牛に比して背丈は1.5倍、胴は2倍くらいの長さがあった。乳牛の種牛も大きさは、同様のサイズだが、ひよろひよろしていて、筋肉の量が全く異なる。30年ぶりくらいに入った山中には、かつての溝は完全に消えて道はなく、谷川の岩石の上を歩くしかなかった。行き着いた場所には60年を経て巨木となった杉が林立していたが、その下は猪の遊び場と化していた。篠栗の山野で遊び回ったこども時代の私は、一度として猪や鹿に出会ったことはなかった。たまに会うのはウサギ、少し深山に入れば木の梢を移動する猿の群れ程度であった。しかし、今日では我が家から僅か500メートル足らずの山裾の畑も猪や鹿の天下になったと言う。こども達が外遊びをし、農家が牛馬のえさに草を刈り、あるいは林業が生きていたならば、このような惨状にはならなかったであろう。

百姓仕事

私の先祖は、多分篠栗村の草分けの一つで、我が家は篠栗の宿駅（金川町）のかつての中心部と思われる場所にある（現在篠栗の中心は遙かに西よりに移っているが）。我が家と篠栗街道（往還と呼んだ）を挟んだ右手筋向かいに、我が家の本家（ほんや）があった。この本家から18世紀の半ばに我が家が分かれ、私は9代目になる。本家の村嶋伴三郎（1821-1889）は、明治7年12月20日に篠栗郵便役所の郵便取扱役（篠栗の初代郵便局長）に任命され、自宅に郵便局を開いている。

西南地域史研究会編（代表秀村選三九州大学経済学部教授）『西南地域史研究第二輯』（1978年11月10日発行）によれば、「福岡県における郵便の開設は、明治四年十二月五日（太陽暦、翌五年一月十四日）大阪より長崎に至る線路が延長されたときにはじまる。設置されたのは、当時、長崎街道と呼ばれる通りにあった宿駅、豊前国小倉、筑前国黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家のいわゆる筑前六

宿のうちの五箇所と小倉の合計六箇所である」(同書409頁)。

明治7年8月に福岡県は県内の郵便路線を増設する達を出し、増設後は県庁への届け物は、民間の飛脚ではなく公設の郵便だけに依るべきことを命じた。この時、既存の10箇所に加え新たに27箇所が増設された。その27箇所の一つに「笹栗」(篠栗)がある(福岡県立図書館蔵『福岡県史稿 十九(駅通之二)』93頁)。また、博多・笹栗間の往復の距離経費を記した項に、引受人として「村島伴三郎」の名が書き込まれている(同111頁)。27箇所の取扱所は明治7年12月20日に開業(同117頁)となり、この時村島伴三郎は「郵便取扱人申候辞令」、「同手当辞令」、「郵便切手売下免許鑑札」などを与えられている(同124頁)。また、郵政省編『郵政百年史資料 第二十四卷(郵政職員関係資料)』(吉川弘文堂、1971年)に「郵便取扱役姓名録(明治十四年)」が掲載されており、その551頁に筑前国糟屋郡の6名の一人として、「篠栗 四等 村島伴三郎」の名がある。

また、私の曾祖父の村嶋馬吉は、明治末年に福岡貯蓄銀行(1916年に福岡銀行と改称)篠栗代理店を自宅に開いた。馬吉は糟屋郡会議員などにも選出されたが、比較的若くして亡くなった。

本家の村嶋伴三郎は、墓に自伝の碑文を残しており、祖先について「其先出於近江源氏佐々木支族隆為庶人 移居於周防山口世以農為業 及彦五郎貞俊生有才幹通兵法以武勇著 毛利氏召編兵籍 筑紫之役従小早川隆景有戦功増禄至八百五十石遂仕於名島 及秀秋之時愧事暗主託病辞禄退居於高田村寛文年間以六十九才歿」と記している。この真偽を検証できる資料は見当たらないが、ある程度の事実を伝えているのではないと思われる。その理由は「村嶋」、「村島」の苗字は関西に多いこと、及び我が先祖は、江戸時代にも「村嶋(村島)」姓を使用していたことが明白であるからである。我が家の墓には、「安政二年三月十五日村嶋利七の女浪」、「村嶋利七 行年五十 万延元年申年七月十五日」、「村嶋利三郎 慶應貳年寅正月九日行年八十五」などと記された江戸末の墓石が残っている。「しま」の漢字にはこだわりがなく「島」「嶋」「嶋」の3種が使われている。

日本人全てが苗字(姓)を公称できるようになったのは、和暦明治3年9月19日(西暦1870年10月13日)に太政官が出した布告第608号「自今平民苗氏被差許候事」(自今平民は苗氏を差し許されそうろうこと)である(内閣官報局『法令全書 明治三年』、359頁)。続いて、明治8年2月13日(1875年2月13日)に太政官布告第22号が出され、日本人全てに苗字(姓)を持つことを義務付けた(内閣官報局『法令全書 明治八年』、18頁)。上記明治初年の2布告を以て、昔の教科書には日本人の平民に苗字ができたのは、明治になってからであると教えていたように記憶するが、これは事実ではない。柳田国男も江戸時代の農民にも苗字の私称が多かったことを書いている(柳田国男「家名小考」、『家閑談』鎌倉書房、1946年、165頁)。

私が2022年1月10日に閲覧したネット上の「日本姓氏語源辞典」サイトによれば、「村嶋」姓が多い県は関西(奈良大阪三重の三県)と九州(福岡熊本二県)であり、市区町村別では「村嶋」姓の戸数が全国で最も多い自治体は福岡県糟屋郡篠栗町であり、更に小地域分布順位でも篠栗町大字篠栗が一位である。大字篠栗の村嶋とは私の一族のことである。一方、「村嶋」ではなく「村島」が多い県は、同じく「日本姓氏語源辞典」サイトによれば大阪、奈良、熊本、三重などの県であり、福岡県は多くはない。

この分布は「ネットの電話帳」サイトにおける、全国の電話帳に登録した「村嶋」、「村島」姓の都道府県別苗字分布や市区町村別苗字分布とも一致している。

これから篠栗の村嶋の先祖は、江戸以前に村嶋（村島）の発祥の地である関西を離れて、江戸の初めに篠栗に落ち着いたのではないかと考えられる。大字篠栗の村嶋姓は、互いに昔は親戚だったと言っているが、どのような関係かが判るのは江戸末以降の親戚だけである。弱小の苗字であり、多分記録もない「村嶋」姓の江戸以前の由緒は分かるはずもない。

さて、篠栗に住み着いた我が先祖の生業は、百姓である。私の高祖父村嶋利八郎（1846-1924）、曾祖父馬吉（1874-1925）、祖父辰美（1898-1988）の三代は、田畑5町歩余、山林5町歩を所有し、所謂豪農の端くれであった。福岡県庁小作掛が調査作成した「耕地三町歩以上所有者名簿（昭和三年）」によれば、篠栗町下町の「村嶋辰美」は、職業農業、所有地は、田2町5反（うち自作地1町4反）畑2町6反（うち自作地2反）合計5町1反であり、小作人の戸数は7戸である（渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧（福岡編2）』日本図書センター、1999年、17頁）。

竹内則三郎編『福岡県糟屋郡宗像郡富豪家一覧表（明治三十一年編纂）』（福岡県名誉発表会、明治31年7月発行、国会図書館デジタルコレクションからダウンロードできる）という書籍が出版されていることを最近知った。タイトルの富豪家とは大袈裟過ぎて当を得ていない。明治22年2月制定の衆議院議員選挙法第6条、第8条は、衆議院議員選挙の被選挙権・選挙権の有権者を15円以上の直接国税納税者のみに限ったが、本書は各町村役場が公表している有権者である成人男性の氏名と納税額を集めて印刷したものに過ぎない。同書の43頁掲載の篠栗村の村嶋利八郎は私の高祖父であるが、地租44円を徴税され、同書37頁の香椎村長谷（ながたん）の長長右衛門（1856-1928）は私の曾祖父の一人であるが地租70円・所得税7円1銭を徴税され、同書6頁の大川村江辻の西村和平（1845-1918）は私の高祖父の一人であるが地租28円を徴税されている。これらから見て、私の父方の明治から戦前の先祖の殆どは、豪農に類するものだったと思われる。同じ糟屋郡内とは言え、村を越えて豪農同士で親族関係を結んでおり、どういう経緯があったのかを知りたいが、今となっては知る由もない。

私の父利雄（1929-2019）が、戦後旧制福岡中学を卒業して百姓を継いだ時は、耕作面積は水田1町歩に過ぎない専業農家であった。稲作収入は限られているので、麦やカラシ（アブラナ）の裏作は勿論、野菜作り、養豚、肥育牛、自家で生産した糯米を使った正月前の餅搗き請負など、様々に収入の途を求めた。

私が手伝いをするようになったのは、小学校1年生の冬からである。1958年4月に篠栗小学校に入学したが、その年の大晦日の日に、父は親戚からオートバイで帰宅する途中、溝に突っ込んで意識不明の重体になり春近くまで病院に入院した。母は父の付添で不在。祖父祖母と3人の子供となり、私は祖父の指示で、リヤカーを引いて山に焚き付け用の杉の葉を取りに行ったり、豚の餌のおからを豆腐屋に取りに行った。

以後、私は体が大きくなるにつれて農作業の殆どを経験した。未だ耕耘機、田植機、ハーベスターなどの農業機械はなく、牛馬で田を鋤き起こし、苗代で苗を育てて人力で田植をし、人力で田の草取りをし、人力で刈り入れをする時代である。化学肥料は存在したが、家畜の糞尿と藁で作った堆肥が重視され、長年の堆肥で田の表面30センチくらいは厚くて軟らかい黒土で覆われていた。小学校低学年時には田植後の7月半ばに農薬のホリドールが撒布され、2週間ほど危険だとして川遊びが禁止されたが、除草剤が田の草取りに代わって使用されるようになったのは、私が10歳を過ぎたころである。

8月の炎天下で行う田の草取りは、猛烈な太陽の下、日除けと背中などを刺すブトやアブなどの虫除けのためにも長袖の厚手の作業服を着て、堆肥で作られ、深くぬかる水田の中を、一步一步、田車を押して歩く作業で、農作業の中でも、最も体力を消耗した。普通は昼寝などしない大人たちは、この作業の時だけは、昼食後1時間くらいは板張りの上で死んだように昼寝して午後の作業に出ている。田の草取りは私が成長する前に除草剤が使われるようになり、その後は、稲より伸びが早く茎の毛の立ち具合からも、簡単に見分けがつくヒエを引くだけとなった。お蔭で私は田の草取りだけは経験できなかった。

私が田を牛で鋤いたのは小学校を卒業した年の春で、犁は持立（もったて）である。しかし習熟する前に、翌年からは耕耘機が導入されたので、牛馬を使うことはなくなった。

農耕用の牛馬は大切にされていた。夏は畔草などを飼料としたが、冬は大きなハミ切り庖丁で藁や大根などを切り、煮た裸麦などを混ぜた桶で食べさせた。私は、鉄の歯のブラシで、牛馬の胴体をこすってやる世話をした。時には血を吸って10円玉ほどにも脹れたダニが見つかった。取ってやってダニを踏みつけると真っ赤な血が飛び出した。気持ちよくなった牛馬は、もっとやれと言わんばかりに体ごと地面上に横になった。牛馬は、博労（ぼくろう）さんが数年毎に取り替えにきた。耕耘機が入って牛馬がいなくなると堆肥も作らなくなった。堆肥で作られた、田圃の表土の30センチくらいは、ふかふかした黒土であったが、堆肥を入れず化学肥料だけになった田圃の土は、固い砂土に変化した。中学2年の時、我が家の堆肥舎の一つが、私の勉強部屋に改造された。

小学校1-2年生の時は、学級花園の肥料にするために、クラスの児童全員が担任の田熊先生に連れられて竹で編んだザルをもって町中の路上を歩き馬糞を集めた。運動会の徒競走では、馬の糞を踏んでいると速く走れ、牛の糞を踏むと遅くなるというので運動会の前日には面白半分に友達と馬の糞を踏んだ。それほど家畜の糞が路上にころがっていた。

裏作の麦は、販売用の小麦と自家用（麦飯用）の裸麦の二種を栽培した。裸麦は1反程度しか作らず、大部分は小麦を植えた。当時冬に裸麦を作れるほどの温暖な地域の日本の百姓家の殆どは貧富を問わず裸麦を作り、麦飯を食べていた筈である。戦後間もなく国会で「貧乏人は麦を食え」と発言した大臣がいたそうだが、当時の日本の農家の多くはこの大臣の無知蒙昧さに呆れたにちがいない。

私が小学校6年生になった1963年は、春先から長雨で麦に実が全く入らず収量はなかった。麦も稲も稔ると穂先は頭を垂れるが、この年の麦の穂先は茎同様に、ピンと天を指していた。父は刈り取ることなく、火を付けて焼いた。昔であれば、凶作飢饉であろう。

1963年（昭和38年）春の福岡県の麦作が、如何に凶作であったかは、農林水産省経済局統計情報部『農林水産累年統計 福岡県』（1980年）の44-45頁の統計に明白に示されている。小麦について見ると、10アール（1反）当の平均収量が、1962年が281キロ、1964年が211キロなのに比して、1963年は僅か15キロに過ぎない。1962年の5パーセントの収穫しかなかったのである。カラシ（アブラナ）とよんでいた菜種も凶作で1963年の福岡県の菜種の10アール当たり収量は前年の27パーセントに過ぎなかった（同上65頁）。

毎年5月末、枯れかけたカラシの茎を刈って数日間干した後、一箇所に集めて竹製の竿の先に付けた回転板で叩いて種をはじき出して、菜種を取った。そのあとは、茎や殻を一箇所に山積して、夕刻に火を着けた。油分が含まれているので燃えさかり、多数の昆虫が火の中に飛び込んで来た。

1963年の大凶作を契機に父は小麦の裏作を止め、カラシも作らなくなった。

当時この地方の稲刈りは、10月下旬から11月の初めの間で、刈った稲は束にして稲竿に掛けて天日で乾燥させた。乾燥させた期間は、天候にもよるが20日足らずであったろう。私が小学6年生の1963年11月23日は、一家で稲竿から稲束はずして、農業用電力(200ボルト)を使う脱穀機で、この年最後の稲こぎをした。暗くなって家に帰ると、テレビのニュースが、ケネディ大統領の暗殺場面を映し出していた。籾は藁製の吠(かます)に入れて、乾燥させながら保存し、12月初めの小春日和の日に、白摺(うっすり)業者に頼んで「白摺(うっすり)」した。昔は本当の土白²で摺って、モミガラを取り除き玄米にしたのであるが、既に機械による白摺に変わっていた。ただし、「白摺(うっすり)」という語は昔のままに使われていた。玄米を白米にする工程も既に機械に代わっていたが、「米搗き(こめつき)」という語が今日迄昔のままに使われている。

白摺で得た玄米は、唐箕(とうみ)で土や小石、青米、割れ米などを除いて吠(かます)に4斗分(1俵)を入れて、供出した。供出は、1954年度までのことで以後は予約売渡制に変わったそうだが依然「供出」と言われていた。2006-7年に中国を訪問した際、タイ華僑商人陳守明の潮州の屋敷や海南島の宋嘉澍の屋敷を見学したが、ともに家の片隅に唐箕が保存されていた。唐箕という名であるから、中国にあって当然なのだが、懐かしかった。

白摺で出たモミガラは山積にして、火を入れて白い灰になる前に消した。炭化した黒いモミガラを、春に苗代を作る時に、種籾の上に被せた。苗代を作る春先は、未だ寒いので黒いモミガラで太陽熱の保温を高め、種籾の発芽を促したのである。

私の篠栗中学校時代は、福岡県は社会党県政が続き、日教組の力も強かった。3年間クラス替えも担任換えもなかった。3年間担任であったT先生は、できない子をできる子が教えて全員理解できるようにするという方針で、1クラス、50名前後の生徒を6人組に分け、机も6人分を組み合わせさせて授業を受けさせた。当時は、習熟度別編成などはない時代である。掛け算も理解できない生徒に幾ら教えても効果は期待できないのであるが、女の子の中には熱心に教える人もいた。私の机は、一番黒板から遠い班のかつ黒板が一番見えにくい場所が定位置であった。勉強がよくできるというのが理由であった。このように一番できない生徒に合わせたような授業は、つまらなかった。教科書を読んでくれば判る程度の授業なので、本当は授業に出る必要もなかった。あまりにつまらない授業なので中学3年の時は、6月20日頃の田植の時期には、手伝を理由に休んだ。苗代で苗を作り、人力で田植をする農法の最後の時代である。田植をするのは、この辺りで「筑後(ちっこー)さん」と言っていた筑後地方からの出稼ぎの女性集団や、母や祖母など女性ばかりである。田植え時の男の仕事は、田植をする人一人分毎に田植の線が曲がらないように両方の畔から二人がかりで縄(椰子紐で作られていた)を張ったり、苗床で引き抜いて束にした苗束を運搬して、田植に便利な間隔で、田圃の中に投げ込むことであった。田植自体は三日ほどで終わる。

高校生になると田植機械が入り、苗代作りは不要となり、田植は機械運転者一人だけの作業に代

² 私の子供の時には、土白を見る機会はなかったが、在タイしていた1982年にJICAの専門家の上田克巳氏もってきたタイ語資料の翻訳を手伝った際に、タイの土白の写真を多数見せてもらった。この翻訳は、『タイ国主要穀類の収穫後処理実態調査』(国際協力事業団、農開技JR 83-45 1983年6月)として出版された。

わった。

私は、農山村生活と百姓仕事や山仕事が大変気に入っており、中学を卒業する1967年頃までは農家の長男として当然百姓を継ぐものと思い、何等疑うことはなかった。しかし、その前後の高度成長のなかで、農村から牛馬は消え、化学肥料・農薬・農業機械の導入により、農作業は大幅に軽減された。同時に、農業所得は相対的に低下した。福岡市から10数キロしか離れていない篠栗は、次第に福岡のベッドタウン化して農地はアパートに変わっていった。様々な工夫で農業所得を上げようとしてきた父も、私の高校時代には、農業に見切りを付け、造園業と貸家業に転じた。

小中高校時代

小学校に上がる前後には、祖父母が博多の呉服町の大丸デパート横の大博劇場に「しばや」（芝居）を見に行くのによく付いていった。何の台詞を言っているのか皆目判らず、退屈なこと夥しいが、回転焼きに釣られたのである。祖父は徴兵時代の兵隊仲間の家を訪ねて長々と話すことが多かったが、連れられていった私にも、年寄りたちの会話は楽しかった。そのお蔭で、私は古い世代の博多弁を話すようになった。祖父は、仏具などの買物にも連れていった。これらの買物の際は必ず「勉強してつかーさい」と小切った。買物で小切るのは、博多では当然のことだったが、東京で小切ると買わなくてよいと追いつ返されたこともある。しかし、タイは博多以上に小切る文化なので、古本を買うときなどに、その駆け引きを楽しんだ。私の育った環境では、食事では誰かお金のある人や年長者がおごるのが普通であった。タイも全く同じである。東京では、私が某大学を退職する時に、1年以上前の食事代を請求したシニアの元同僚がいた。彼らの頭は完全割り勘制で固まっているのであろう。

6歳の頃、祖父母とともに杖立温泉に泊まりに行ったが、ここで初めて水洗便所を経験した。頭上のタンクから垂れた紐を引いて水を流すと勢よく水が飛び出してきた。水が止まらないので、慌てて紐を引いて止めようとするが水流は増すばかりだった。一回紐を引いて放置すれば水は自然に止まることを知らなかったのである。祖父に連れられて、博多の封切り映画館で「赤穂浪士」や「蒙古来襲」などの映画も見た。

その頃までは、福岡の西鉄の天神駅のガード下には、傷痍軍人たちがアコーディオンを演奏して、物乞いをしていた。大人達が「お非人さん」とよんでいた乞食が時々自宅玄関で、食べ物物をせがんだ。篠栗と博多の間の国道上を走るバスの頭上スレスレに板付基地に昇降する米軍のB29爆撃機などの巨機が飛んでいた。

小学校時代には、私の小さな机が、母のミシンと背中合わせに廊下の隅にあったが、ここは単にランドセル置き場で、この机に座って勉強した記憶はない。宿題は学校で終わらせていたからである。

小学校4-5年生のギャングエイジには、所謂ガキ大将で、授業の休み時間に私が階下のトイレに立つと5-6人の級友がゾロゾロとついてきて、仕切りのない男子トイレで一斉に連れションをしていた。この地方の子供の喧嘩の始まりは、まず双方が「きさーん（貴様）、のぼせるな」とドスの利いた声で怒鳴り合うのが決まりであった。今日の大国の口撃などに比せば何とも上品な口上ではないか。

5-6年生時には小学校の小さな図書室（一教室のスペースに、四方の壁に沿って二-三段に本を並べたに過ぎない）から借りだした本を秋の夜長に蒲団の中で読んだ。図書室の本の数は少なく、読み尽くしてしまったが、気に入ったもの（トムソーヤーなど）は何度も読んだ。そのため近視になって

両親からは叱られた。

山の畑に一人で行って、鍬や鎌で柿の木の下の雑草（カズラなど）を切ったり、根を掘り出したりもした。このように一人、孤独に仕事をするのも悪くなかった。その時の爽快さは、研究者になって一人で仕事している時にも味わった。

中学1年の秋、早朝野菜市場に野菜を運ぶ父に朝4時に起こしてもらうことにした。そのうちに毎朝4時に起き、夜10時に就寝することが日課となり、中学1年の後半から大学受験まで5年余この日課を続けた。中2になる春休みに堆肥舎が変じて、私の勉強部屋になった。私の勉強部屋に近い中庭（おつぼという）では、米の山から湿った風が吹き始め、雨が近くなると雨蛙が一斉に鳴きはじめる。夜は、裏の水田から蛙の鳴き声が大音響で響いた。この勉強部屋の前の広場で、私は風呂焚きのために、まさか薪割をして英気を養った。夏の暑い日は、敷地の中を流れる用水からバケツで水を汲んで庭一面に撒布して涼気を求め、夜は網戸に来るカベコ（ヤモリ）を友とした。冬の寒い日は足先だけは電気足温器で温め、窓を開けて眠気を払った。この日課を続けるうちに、机に向かうと雑念は一切生じず、直ちに集中できるようになったのは不思議である。

中学では、柔道の部活に加わった。技の指導者がいなかったのも、ただ力任せのどつくみあいであったが、準備運動として毎日氏神様のお宮の120段の石段を10往復し、兎跳び、腕立て伏せをしたお蔭で、身体は頑丈になった。お宮の石段の昇降は高校時代の3年間も毎日続けた。

中学2年の年末、生徒会長の選挙に立候補した。全校生1,000人以上の前で、私は全て博多弁で選挙演説を行った。博多弁が受けたのか930票という圧倒的な得票を得た。次点の徳重雅史君は副会長となって二人で生徒会を運営した。生徒会長に選出され、就任する前、2年生が終わる直前の、1966年3月初旬の未だ寒い日、どんな不満があったのか、不良少年と化していた3-4名から校舎の裏のゴミ焼き場近く呼び出された。彼等が隣の粕屋中学校の生徒と、自転車のチェーンをもって闘ったと自慢していたのをその前に聞いたことがあった。この日も、彼等は自転車のチェーンをもって待っていた。もし、この鉄製のチェーンでしばかれると顔や頭に大怪我をすることは見えている。私は一人で、跣足（当時冬の寒い時でも恰好をつけて教室でも廊下でも、上履きを履かず跣足のままであった）のまま、念のため護身用の武器になりそうなものをもって、コンクリート製の踏み台を歩いて、彼等と対峙した。今は手の付けられない不良と化した相手側リーダーのN君も、小学校時代は長らく一緒に仲良く遊んだ友人である。結局にらみ合いだけで、別れた。N君は、成人して刑事事件を起こして入獄したのち、若くして病死した。このにらみ合いから半世紀も経ったのち、中学時代の学友が話すには、あのにらみ合いの時、多く生徒が木造校舎2階の教室の窓から、成り行きを見守っていたという。私は校舎を背にして相手と対峙していたこともあって、校舎からみんなが見ていたことは記憶になかったが、今考えればみんなの目があったので、双方のにらみ合いで終わったのかもしれない。

身の安全を考えると、到底賢明とはいえない無鉄砲な行動だが、挑まれて逃げたり黙って引き下がったりしなかったことが、その後、彼等から文句を付けられることもなく、誰も恐れることもなく自由に行動できた理由だと思う。しかし、このような事件(?)があっても、教員から注意を受けることは全くなかった。大人たちが責任回避のためにか、過保護となった今日のような時代であれば、私自身も不良生徒扱いを受けたであろう。

食欲旺盛で何でも食べたことが原因か、中学3年の正月過ぎから腹痛があったが、原因不明のまま放置した。手足の爪の付け根が大きく凹み、吐き気もして食事がすすまなくなった。そのまま、久留米高専と県立福岡高等学校（福高）を受験して合格した。当時は高専の方が福高より難易度が高かった。高校入試が終わったのち、近所の町医者に診てもらったが診断できず、市内の名のある胃腸病院に行くも診断できず、その数日後余りに状態が悪くなったので、父が佐田外科（現佐田病院）に連れていき、直ぐに手術となった。午後いっぱいかかる大手術となり、その内に麻酔が切れてきて、開腹した腹の中でピンセットか何かで破裂した盲腸の破片を拾い出しており、それが腸に当たる度に大変痛かった。盲腸炎から腹膜炎をおこしており、もう少し遅れば命に関わるどのことであった。佐田外科の医師の的確な判断がなければ、本当に死ぬところであった。有名な胃腸病院とはいえ、名前だけに過ぎず力量はないことが、よく判った。この経験のためか、私は医者言うことや医者が処方した薬を、今日に到る迄余り信用していない。お蔭で71歳近く迄薬漬けにされることなく生きている。佐田外科には1ヶ月余り、4月半ばまで入院し、自宅で休養したのち、5月の連休明けから福高に通った。当初は、病後で歩くのは大変だということで、大事をとって、歩行距離が短いバス通学を2ヶ月ほど行った。

千代町からバスに乗り、四軒屋を過ぎた辺から篠栗までは、原町などの町中を除けば、左右に田畑が広がっていた。1967年6月、この年はプリンスメロンが豊作貧乏で、収穫されることなく田圃の中に放置されていた。わが家でも売れないプリンスメロンを豚のエサとしていた。バスの車窓から左右の田畑をみていた私は、異変に気が付いた。田畑の所々にははずの牛馬がおらず、農村の風景が一変していたのである。それが生じたのは、2-3年前のことかも知れないが、私はこの時初めて、農村から家畜がいなくなったという異変を明白に認識したのである。

両親の頭には、私を獣医にして百姓を兼業させるという考えもあった。農村の獣医の仕事は、子豚の去勢をしたり、子牛の鼻に鼻ぐりを通したりなど、私にも馴染みのものである。しかし、農村から家畜がいなくなるとは、獣医になる計画も現実味が薄くなった。私は百姓仕事が好きであったし、百姓家の生活にも満足していた。篠栗は地震も災害もなく日本一住みやすいと祖父は常々語っていた。私は、別に家を出て何かになりたいという強い志望もなかったので、時代が変わらなければ郷里で百姓をした筈である。

1967年の5月連休明けから福高に登校し、6月半ばには柔道部に入ったが、病後で体力が失われて力が出ない上、上級生が面白半分にはじめ技をかけ、“落とされて”意識を失った。道場で意識が回復した後、この上級生には怒りを覚えた。しかし、反撃しようにも病後の体では力がでない。まだ腹部の大きな手術痕がズキズキ痛んでいた。7月初めには、柔道部を辞めた。8月初めには徳重君と祖母山傾山縦走をしたが、歩くスピードが遅いと温厚な徳重君からも怒られるほど体力が落ちていた。この後、1年生の秋頃、応援団に2ヶ月ほど加わった。福高では、毎週月曜日朝に朝礼があり、校長先生の訓話を聞き、応援団長が壇上に上がり、団員も生徒の列の前に横に並んで、校旗を振りながら、蛮声で応援歌を歌った。応援団は、放課後に練習を行っていた。既に秋なので、3年生は受験準備のため応援団を引退し、2年生の今里滋（九大及び同志社大教授）さんが団長であった。応援団も数ヶ月で辞めたが、この経験があったので、3年生の体育祭で黄色組の応援団長に立候補した。

応援団を辞めて勉強専念、寸暇を惜しんでガリ勉を始めた。夜十時に就寝し、朝四時に起きるとい

う六時間睡眠を大学受験まで続けた。

福高の教室は休日でもカギがかかっておらず、自由に入室して自習することができた。休日にはラジオを持って福高に行き、校舎に入って時々ラジオニュースを聞きながら勉強した。1968年3月31日夜（米時間）ジョンソン大統領が行ったベトナム戦争政策大転換の演説を、日本時間の4月1日（高校は未だ春休中）の昼間に聞いた。

勤勉性プラス少々の集中力と記憶力で、成績は向上し、2年生の3月（1969年）には、今東大を受験させてくれれば合格できるのではないかとさえ思うほどに実力がついた。研究社の英和中辞典は、真っ黒、紙がボロボロになるほどに使いこんだ。英語は数学、社会とともに得意科目で、試験では殆んど満点を取ることができた。2年生の時には、天神の丸善で購入した原書のポケットブック、オーウェルの『アニマル・ファーム』、『1984年』などは、意味を殆ど理解できるようになった。『怒りの葡萄』、『ライ麦畑でつかまえて』などの小説にも挑戦したが、歯が立たず読み通すことはできなかった。もし、当時現在のように用例多数で検索も容易な、ウェブ上の辞書や電子辞書があれば、相当なところまで行けたのではないと思うが。但し、スピーキングやヒアリングの機会は全くなかった。当時でも福岡市内でもネイティブによる英語講習が行われていたものと思うが、田舎者の私にはそのような塾を探すことなど全く思い及ばなかった。オーウェルの『1984年』を読んだ1968年秋には、16年後に果してそのような世界になるだろうかと思いをもちた。しかし、実際に1984年になった時は、共産主義体制は崩壊に向かっていて、同書が話題になることもなかった。その30年後には、ハイテクの進歩で『1984年』以上の管理体制が現実になるとは、誰も思わなかったであろう。

数学（他の教科も）は、中学生時代と同様に新学期が始まる1週間前に、新しい教科書を読み終わり理解できていたので、教科書に沿った授業なら聴講する必要はなかった。そこで先生には申し訳ないが授業中は大学の入試問題集を解いていた。不思議なもので、これを1年くらいやると、問題を読んだだけで、直ちに解答方法が頭に浮かぶようになった。大学入試の数学の問題に、いくつかのパターンがあるのかは知らないが、それほど多いものではないようだ。お蔭で東大入試の数学の問題でも8割は直ぐに解けるレベルに達した。従来パターンから外れ、解法をすぐには思いつかない少数の問題は、最後にゆっくり時間をかけて考えた。

国語の現代文、特に文学作品の解釈は、本当に答えは一つなのだろうかと思われるものが多く、よい点数を取ることは至難であった。そこで、古文、漢文に力を注ぐこととし、ちょうどその頃全巻が揃った岩波書店の『日本古典文学大系』（全100巻）をセットで購入してもらい、その半分くらいは読んだ。これが、私が大学入試準備のために使った最大の出費である。万葉の長歌や鎌倉時代の草紙、江戸の文学は読んでいて楽しかった。

社会科（地歴）は私の得意科目である。大学入試に日本史と世界史を選んだ私は、つまらない授業を抜け出して高校の図書室で、2-3の出版社の世界史全集、日本史全集を、最初から最後まで読みながらノートを作った。

ガリ勉の甲斐あってか、3年生の1969年7月頃に実施された旺文社主催昭和44年度第2回大学入試模擬試験の国立文科系型で、英語98点、国語76点、数学100点の成績で、3科目の合計点で国立文科系型受験者6万4576人中第2位となり表彰の楯をもらった。これ以上よい成績をとるのは難しいと思ったので全国模試を受けたのは、この一回だけである。東京に出て来てから、東京出身の学生た

ちにこの成績を自慢したら、東京では東大受験者は駿台模試をうけ、旺文社模試などは受験しないとニベもなかった。しかし、当時の福岡の高校では、全国模試は旺文社のものだけしか行っていなかったのだから仕方がない。校内模試でも3年の半ばからはダントツのトップを続けることができた。

このように独学独習で相当の成績を挙げることができた経験から、大学受験のために予備校に行ったり、学費の高い私立学校に入学したりすることは、全く時間と金銭の無駄であるばかりではなく、独習して身につけるといふ自己啓発のまたとないチャンスを失うことになる、と思っている。

ところで、福高時代は、ガリ勉だけに専念したわけでもない。2年生末の生徒会長選挙には立候補しなかったものの、立候補した西田藤二君に頼まれて後援会長となり応援演説を、これまた博多弁で行った。対立候補は松本龍君であった。大した票差ではなかったが、西田君が生徒会長に当選した。西田君は九大法学部を卒業後、若年で福岡市議に当選し、1996年と2000年の二回、福岡一区で自民党から衆議院選に立候補したが、国会議員三代目の世襲政治家である上記の松本龍君（2010年民主党菅内閣の環境大臣、2011年復興担当大臣）に敗れた。また、私は福高3年時には各クラスの代表委員会議の議長を務めた。当時大学紛争が高校にも及びつつあったが、それを議長として防止することには成功した。しかし私が卒業した翌年は、福高は大荒れになったようだ。この年に福高に入学した私の弟は、当初の成績はよかったのだが、この運動に投じてしまった。

また、3年の夏休み明けの運動会では、Bグループ（黄色組）応援団長を務めた。福高は一学年10クラス、1クラス50人で計500人、3学年合計1,500人の生徒数があったが、運動会ではこれをA、B、C、Dの4組に分けて応援競争をする慣行であった。

大学時代

1970年2月某日午後4時過ぎ、夜行の特急寝台列車「あさかぜ」で博多駅を発ち上京した。翌朝、列車のカーテンを開けると、青い空を背景に、雪をかぶった富士山を目にした。人生初めての東京であったから、富士山を見たのも初めてである。親戚の家に世話になって東大文科一類の一次、二次試験を受け、合格を確信して帰宅した。文一を選んだのは、単に当時の国立文系では難易度が最も高かったからであった。福岡に帰って入学のため再上京するまでの間は、父の造園業の手伝いをしていった。合格発表の日は、父の造園の仕事の手伝いで、二日市方面で土方仕事をした。穴掘りや力任せに庭石や植木を運ぶ仕事である。帰りは長い渋滞に巻き込まれて車が進まず、ラジオでは盛んにボーリングを中継していた。受験勉強に没頭していた数年のうちに、モータリゼーションが急速に進んだのである。私は久し振りに娑婆に戻った今浦島の感を覚えた。

上京して駒場の教養学部内であった、生活費の安い駒場寮に入った。寮費は月500円、安い定食は昼飯夕飯ともに30円であった。

駒場の授業は、ひどくつまらないものが多かった。教員の手抜きか力量不足か、学生の熱意不足か、多分これらのどれもが原因であったと思われる。

大学の授業は、研究がどうして面白いのか、どうして重要なのか、課題に答えを出すためにどのような調査研究方法があるのか、調査の結果はどうであったかななどを、教師が自らの調査研究の経験をもとに、自らの言葉で語るべきなのである。それは自分の研究論文の発表に似ているが、他人の研究を取り上げてよい。概説や入門などと称する教科書的な内容は、大学の教養レベルであっても、最小限

でよい。私の30余年の大学教員生活で、このような授業ができたとは言わないが、大学の教員の授業は、その教員が真剣に行っている研究を中心に語り、学生の興味を引き出すべきだと思っている。

当時駒場の学内は、未だ学生運動が盛んで、中央の銀杏並木通りでは、一人でマイクを使った演説をしている新入生が何人かいた。駒場寮中寮の入り口の自動販売機の前では過激派の内ゲバで死者がでる騒ぎもあった。

授業は面白くないし、何よりも受験勉強の制約から解放されたことがあって、様々なことに関心が向いた。

当時駒場の学内でしばしば開かれていた講演会や演説会を覗いた。某政党の青年組織の活動家であったクラスメート（後に名のある経営学者となった）は、私がしばしば彼等の講演会に見学に来るので、誤解したものと見えて、メンバーになれと勧誘した。話しを聞くために駒場寮内の一室にあるという事務所に共に向かう途中、彼に君の家では活動について両親は何とも言わないのか、と尋ねてみると、両親ともに学校の教員で党员であるという答えであった。事務所では、「偽名」云々という話しになり、私は郑重にお断りした。

東大の仏教青年会が開催した梅原猛氏（1925-2019）の日本文化に関する講演会には、大きな教室に7-8人しか聞き手が集まらなかった。講師も大いに腐って、話しながら主催者にぶつぶつと文句を言い続けた。当時の学生は彼のテーマに関心をもっていなかったことに加え、彼の名声が高まる以前の時期であったからであろう。

寮の机の前で聴いたテレビ、ラジオの農業講座、産業講座などの実学講座は、大学の授業より遙かに面白く、ためにもなった。地形や景観を見るために都内を歩いた。東京中心部で次々に住宅用のマンションが建設されていた時期であり、代々木では建設途中で倒れた某大手建設会社のマンション建設現場も見た。駒場の運動場に沿って建設されたマンションを覗きに行ったが、家族用が400万円程度の値段であった。その後にオイルショックに伴う大インフレが来た。

我が家では、『日本農業新聞』を定期購読しており、中学、高校時代の私は熱心な読者であった。記事の中には米価闘争に関するものも多かった。毎年6月頃全国の農民が東京で開く米価要求集会上に、大学一、二年生の時に見学に行き、農民の立場で福岡県からの農協団体と一緒に座り込んだ。このような環境と関心とから、私が最初に書いた論文のテーマはタイの農民運動（『アジア経済』21巻2号、1980年2月）となった。

駒場寮にはアルバイトの募集が多かった。寮生には真面目な者が多いので、インチキはやらないだろうと思われていたのかもしれない。電話でアルバイトの募集が来ると事務室が館内放送で周知し、希望者は事務室に駆け付けた。事務室には門野ミツエという小母さんがいて、寮生を温かく激励しながら世話をしてくれた。日比谷公園内の市政会館内にあった世論調査会社、中央調査社のアルバイトで、家々を面接訪問した。私は原宿周辺が割当られた。対象者に会わないと仕事にならないので、対象者が自宅に帰宅する時間帯である夜8時頃に訪問した。当時の原宿は今日の賑わいはなく、閑静な住宅街であった。

当時マスコミは2020-22年時のコロナ同様に公害問題で騒いでいた。私は、真夏の炎天下で小舟によって東京湾のヘドロ調査（海底に容器を降ろしてヘドロを集める仕事）のアルバイトをした。帰省する途中には、富士市にヘドロ公害を見るために立ち寄った。工学部の助手（後に地方大学の教授

になった)で公害研究者だという人が、講演会で何回か公害のために奇形児の数が異常に増加しているという話をした。私は気になって、彼の研究室を尋ねて具体的な数字を質問したが、答えはなかった。その後の歴史が、彼の話が正しかったかどうかを実証している。夏には光化学スモッグ警報がしばしば出され、落葉の時期ではないのにケヤキの葉は黄変して落葉した。東京に出てきても駒場の運動場をほぼ毎日走っていた私は、空気の悪さに辟易して、遂に止めてしまった。

入学時の国立大学の授業料は1ヶ月1,000円、一年間で1万2,000円であったが、それが月額3,000円に値上げになるというので、1972年冬に駒場の学生自治会が長期の反対ストをした。長期間授業はなく、従って法学部への進学も4月ではなく6月になってしまった。

スト休みになって、私は、三重県の地方旅館に泊まり込んで電気小売店を訪問して面接調査をするアルバイトに出た。社会人リーダーの下に3名ほどの学生アルバイトが同一旅館に泊まって、リーダーの指示する電器店を尋ねてアンケートに答えてもらい回収するアルバイトである。春先の鈴鹿山地の山影を見ながら、四日市周辺の町を歩いた。10日足らずで終わって、3万円ほどのペイを貰って、夕暮れの町を歩いていると、車で近寄ってきた男が、呉服屋に卸しにもってきた商品だが、数を間違えて剩ってしまった、安く売るので買わないか、と言ってくる。生地を見る眼もないし、夕暮れでよく見えなかったこともあって、1万円で2着背広を買ってしまった。旅館に持ち帰って明るい所で見ると、目が粗く雑なものであった。実際にズボンを穿いてみると、摩擦する股の部分から2-3日で破れ始めた。オレオレ詐欺の先祖みたいな商売だと思われる。その後数年間で2回ほど、同じ様な口上で物を売りかけられたが、さすがに2回目はカモにならずにすんだ。

駒場寮では、寮生に外部生も加わってしばしば徹夜マージャンに凝っていたが、外部生の中には後に鳥取県知事や総務大臣になった岡山出身の片山善博氏などもいた。

1972年の葉桜になったころ、私は駒場寮で同室だった1年下の山岸千秋君らに送られて駒場寮から本郷の向ヶ丘寮に移った。駒場寮は1996年に廃止されたそうだが、向ヶ丘寮も2004年に解体され、現在は寮と農学部を隔てた石壁のみが残っている。在寮時は、この石壁にかけられた梯子を上って農学部に入り、法学部等の授業や総合図書館に通っていた。向ヶ丘寮は木造二階建て1棟に食堂と風呂場という小規模のもので、6畳の二人部屋であった。駒場寮時代に続いて、天理教の信者である小椋伊太郎君と当初は同室した。根津に移ってきた農学部の小堀基二君(2022年1月1日逝去、満72歳)の下宿にもよく遊びに行った。

1970年代の前半は、公明党と共産党が競いながら国会議席数を増大させていた時代である。公明党は、創価学会を基礎としているが、創価学会とはどのような団体なのか、本だけの知識ではなく、実際の創価学会が知りたくなった。好都合にも向ヶ丘寮の風呂焚きや掃除を担当していたAさんが、創価学会の会員であることが判ったので、彼に頼んで会合につれて行ってもらった。根津の商店街の小さな食堂の二階が、定例集会所であった。そこでは10数名が集まって、テーブルに吹き込んだ会長の講話や信仰のお蔭で成功した人の成功談を聞いた後、それぞれが自分の信仰談を話した。話しの多くはこの信仰をもったことで、収入が増え生活がよくなったという趣旨であった。この会合には数回出させてもらったが、寮の食事担当のOさんから思わぬ誤解を受けることになった。Oさんは、一見豪快な性格で寮生の誰とも仲良く親切な人であったが、Aさんとは仲が悪く、私はAさんと親しくしていると誤解して、よそよそしい態度に変わった。

バンコクでもタイ人の創価学会や世界救世教の末端の集會に参加したり本部を訪ねたりしたが、日本での経験は彼等の理解のために大変役立つ。

法学部に進学しても、自らのリサーチについて情熱的に語り、学生をワクワクさせるような授業は殆どなく、つまらないものが多かった。なかでも、必修の「政治学」の授業は、長年学術論文などは書いたことがないような教授が、自著の薄い岩波新書だけをテキストにして講義をしていた。「国際法」の教授も似たようなもので、どうしてこのような人達が、「権威ある」はずの法学部の教授なのかと、学生の分際ながら疑問に感じざるを得なかった。今日ではスコパスやグーグル・スカラーで検索すれば、研究者の大体の評価は分かる。日本人なら科研費データベースや CiNii で検索すればよい。私は授業では、学生が報告する論文の著者のプロフィールを、上記のようなデータを用いて必ず紹介してもらった。但し、そのようなことが十分に可能になったのは 2010 年代のことである。

法学部の授業ではおもしろみを覚えるものが僅かなので、最大限他学部聴講をして、経済学部、文学部の授業を聞いた。

経済学部でアジア経済研究所（以後、アジ研）出身の高橋彰先生（1932-2008）の「経済地理」（内容はフィリピンの小作制度など）の授業を聞いたことが、アジ研を知る最初の機会となり、アジ研に就職する契機となった。高橋先生には、それ以後もお世話になった。先生は座談の名手で録音して置きたいような話しを何度も伺った。1998-99 年頃には、帝国書院の顧問会のメンバーに加えて頂き、1 年余顧問会に出席して地理・歴史教科書の内容にコメントするだけで不相応な謝金を頂き、研究費として使わせて頂いた。

文学部の特殊講義では社会学者秋元律郎（1931-2004）早大教授からアメリカにおける地域権力構造に関する、ダールやハンターの論争を聞いた。1973 年夏にアメリカに行った時には、Robert A. Dahl, *Who governs?: democracy and power in an American city* 1961, Floyd Hunter, *Community power structure* 1953 のペーパーバックを買ってきた。また、ジェラルド・カーチス『代議士の誕生：日本保守党の選挙運動』（サイマル出版会、1971 年）などの研究方法にも魅力を感じた。1980 年 6 月にタイの地方選挙調査を実施したが、その時にはこれらの研究書が頭にあった。

法学部は、卒業論文もなく、そのためか在学中を通して所属するゼミもなかった。演習は開講されていたが、学期毎の選択であり同時に二つ以上の演習をとることもできた。私は、アジア政治外交史担当の坂野正高教授（1916-1985）の演習と東洋法制史の滋賀秀三先生（1921-2008）の演習に出た。両演習ともに、大学院との合併開講であり、前者に出ている学部生は私一人であり、後者には学部学生が当初 3 人ほどいたが、最後には私だけになったように思う。

坂野教授の演習では、清末外交文書をテキストとしてまず中国語で音読した後、和訳した。毎回確実に出席したが、評価は出席点ではなく最後に何か書いてこいとのことであった。但し、どのような様式で書くのかは全く指導がなかった。短期間に何をどういう風にか書けばよいのか見当がつかず、結局単位を諦めた。アジ研に入って後、まともな論文を 4-5 本も読めば、論文のスタイルなどは簡単に理解できることが分かったが、大学 3 年後期にはそのような準備は未だなかった。但し、この演習に出たお蔭で、清末の公文書に馴染みができた。

滋賀先生の演習では、中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』（全 6 巻、岩波書店、1952-58 年）を読んだ。私は、村落間の境界、境界内の農産物を見張る看青の性格・役割についてレ

ポートを提出した。このレポートが私の最初のリサーチ成果である。このリサーチがあったお蔭で、アジ研採用面接時の質問に対して、自分の研究経験とその成果について、一通り説明することができた。滋賀先生の用意周到な指導と人柄には今でも深い感謝を覚えている。

両方の演習には、台湾大学の李鴻禧先生が出ておられた。台湾大学の憲法の若手教員で、大学院への留学生であった。李先生が、帰国するまで、1年以上に亘って、私はほぼ毎週西武池袋線の江古田駅の近くにある力行会の先生の宿舎を訪ねて中国語を学んだ。李先生は全く無償で指導をして下さった。

東大で受けた経済学関係の授業は、所謂マル経であった。

法学部の必修科目の「経済学原理」は、駒場の2年後期に開講され、経済学部の新進マル経学者I助教授が担当していた。試験答案に、優でなければ、来年再受験するので不可にしてくださいというお願いを書いて出した所、本当に不可にしてくれた。それで3年生に進学して、真面目に授業に出て再受験して、やっと優を得ることができた。I助教授の授業の最後の締めくくりは、2年生の受講時も、3年生の受講時も、「君達は学んだ歴史の法則に逆らわずに生きるように」というものであった。今時にも信じている人がいるのだという一種異様の感に打たれた。さすがに、教祖の御託宣のように聞こえて違和感を覚えた。

1973年の初秋、東大の総合図書館で偶々会った、同じ中国語(E)クラスの山本博史君(NHKに就職)が、就職はどうするのだと尋ねたので、アジ研の研究員みたいな仕事を希望していると答えた。そうすると、彼は、予備校の友人で昨年アジ研に就職した人がいると言って、田近栄治氏(のち一橋大学副学長、政府税制調査会委員)を紹介してくれた。私は市ヶ谷本村町のアジ研に田近氏を訪ねて親切なアドバイスをもらった。

それまで、私は就職活動を全くやっていなかった。若気の至りと言うべきだが、役人でも会社員でも、誰がやっても大差はないではないか、ドングリの背比べ程度が醜態競争して何になる、いくらでも代わりがいるような仕事ではなく自分にしかできないことをやりたいという思いが強かった。総じて、自分の努力が、自分に結果するようなことをしたいと思っていた。しかし、何か具体的なものがあつたわけではない。

間もなく田近氏からアジ研の研究職員追加募集の情報が届いた。

アジ研に出願願書の用紙を請求すると、アジ研の総務部から送られて来たのは何と職員の夏の家の案内であった。何のこどやらと思って再度請求して、やっと出願用紙を送ってもらい、ぎりぎりで提出期限に間に合った。アジ研事務のたるみ具合は相当なものに思われた。

今回は追加募集であるので試験科目は経済学のみで、政治学や社会学はなかった。但し、幸いなことに経済学の試験は、マル経と近経のいずれかの選択制であった。マル経の単純で明快な理論は、私の頭には入り易く、また経済史に関心があったので法学部ながら経済学部のマル経科目を多数っており、経済関係の科目は法学の科目に比して成績も良かった。そこで、マル経科目と英語のペーパーテストを受け、続いて面接試験では滋賀先生の演習での調査研究を説明して首尾よく合格できた。面接の際には、入所試験日と東大法学部の必修科目の試験日(日本政治外交史)が重なっているので、もしアジ研に採用された場合は6月に追試を受けて卒業した後に入所するということで了解も得た。結局アジ研に採用されて、1974年7月に就職することができた。全くマル経のお蔭である。2000年

代初め、早稲田大学アジア太平洋研究科に旧ソ連時代に教育を受けたロシア人の博士在学生在がいたが、彼と話して見て、我々の教養が近似していることに驚いた。但し、同じ頃指導した、旧ソ連に留学したラオス人学生には、基礎知識の共通性は感じなかった。

当時、アジ研の研究職員は主に学部卒が採用されていた。数年の勤務ののち、経済関係の若手研究員は海外派遣員としてアメリカの大学院で博士号を取得し、地域研究関係の若手研究員は海外派遣員として対象地域で調査研究をして博士論文に纏めて日本国内で博士号を取得した。彼等の多くは40歳前後までに東大、京大、一橋大など国内の有力国立大学に転出した。なお、私は博士号を得ることもなく、有力国立大学に転出することもなかったので、上記の範疇には入らない。兎に角、一時は、残った陣容でアジ研の研究や運営が維持できるだろうかと心配になるほどに、アジ研は中堅研究員が転出してなくなった。1990年代半ば頃までのアジ研は、学部卒が給料をもらいながら安定的な身分で研究に集中することができる、人材育成を兼ねた貴重な研究機関であった。

特殊法人アジア経済研究所：動向分析部から調査研究部に

アジ研には、実際は1974年4月から働き始めた。但し、大学を未だ卒業していないので、身分はアルバイトである。動向分析部に配属されて、タイ担当者がいないので、取り敢えずタイを担当してくれということになった。6月末に大学を卒業して7月からは正規の職員になったが、引き続き同じ部でタイを担当した。

三島由紀夫が自殺する前に演説した市ヶ谷本村の自衛隊のバルコニーに近い旧館5階にあった動向分析部は、新聞社や一般会社と同様に大部屋で、職員は机を並べ、向かい合わせに座っていた。これは情報交換の便と風通しのよさを狙ったものであったろう。現地から送られてくる新聞に目を通し、日誌を作成する位には大して障碍はないが、新入りが語学や既存研究を落ち着いて勉強する環境ではなかった。動向分析とは言っても、只1週間遅れで送られてくるタイの英字新聞1紙、タイ字紙カーウパーニット（入所時は当然ながら読解不能であったが）を読んで日誌を作るというものであった。出張して資料収集やヒアリング等ができるような予算もないので、内容は浅く、かつ精度にも疑問があった。中国などの大国やベトナム戦争の末期に関心が高かったベトナムなどであればいざ知らず、タイのような小国の、しかも表面的にフォローしたに過ぎない情報に、価値や需要があるとも思えなかった。その上、動向分析部の同僚の多くは学術的雰囲気は稀薄で、研究に熱心な人は数えるほどしかいなかった。研究者を志向する若者には何とも張り合いのない職場であった。この部で、私は1975、76年度版のアジア動向年報の、タイの項目を担当した。

新聞程度を読んだところで、専門家になれないことは当然であるが、新聞を読んだことが、タイ研究のよいとっかかりになったという利点はあった。当時のタイは、1973年10月14日の学生革命の直後で軍部が力を失い、学生運動、労働運動、農民運動、共産主義運動の拡大など様々な運動が生じて、社会が急変していたので、私はこれらの新変化を最初の研究課題とした。

アジ研に入った1-2年の間は、東大新聞研究所の研究生の資格ももっていた。在学中に試験を受けて得た資格である。アジ研に就職したので、新聞研を修了する必要はなくなったが、面白そうな外部講師の講義を選んで聴講した。読売新聞政治部長の渡辺恒雄氏が非常勤講師であった。彼の授業は、学生時代の共産主義運動の経験から読売新聞社内の事情、更に皇居の立地の是非問題に至るまで面白

かった。読売では正力さんがいるのでトップにはなれないが、ナーバーズには必ずなると話されたのが記憶に残っている。有志竟成を示す好例ではないだろうか。

1975年2-3月に貯まった有給休暇と残業代休を使ってタイを初訪問した。当時一番安かったエア・サヤムで往復した。この時、ESCAPの現地職員であるリエンさんに連れられて、共同通信バンコク支局長の松尾文夫氏（1933-2019）とともに、東北タイのカラシン県の森林内にあるリエンさんの故郷の村を訪問し、親類のガムナン（村長）の家に泊めてもらった。大きな木造の家々が並び、東北タイは貧しいというイメージとは異なっていた。リエンさんは、巨大なB52爆撃機が発着するサタヒップの米軍基地見学や、ノンカーイのシーチェンマイから小舟でのラオス渡航にも同行してくれた。ラオスは共産化直前であった。リエンさんはタイ籍なので通関を通過できたが、私は通関で止められてしまった。

松尾さんは、当時タイ学生運動のリーダー達や左派知識人と密接に交流しており、様々な文書ももっておられた。私のタイ語は、未だ不十分だったが、いくつかの資料を借用してコピーした。

最初のタイ訪問以来今日迄48年間のうち、1976年、1979年及びコロナで渡航できなかった2021年の3年を除く45年については毎年少なくとも1回はタイを訪問した。48年間の合計在タイ時間は13年半ほどである。

さて、私は、動向分析部においては、本格的研究はできないだろうと考えて、2年目に調査研究部への異動を試みた。まず、調査研究部長に転部希望を話したが、けんもほろろの反応であった。相談相手を間違えたことが分かったので、調査研究担当理事の笹本武治氏（1970年10月-76年6月末理事）³に直接会って訴えた。笹本理事は、温情をもって丁寧に話を聞き、2ヶ月後位には約束通り調査研究部に異動させてくれた。笹本理事の任期の終わりの時期であり、同氏が退任された後であったならば異動は簡単ではなかったかもしれない。異動の条件は経済開発分析プロジェクト・チームを兼務することであった。

調査研究部の研究員が、外部の委託プロジェクトを兼務した、多分最初の例であろう。大学の研究者の如く、上からの指示ではなく半ば独立して自らの研究テーマを追究していた調査研究部の研究スタイルを変更し、上からのプロジェクトを担当させる、最初の風穴の一つであったかも知れない。こののち、アジ研の研究は、私のような勤務スタイルに変わっていった。調査研究部のシニアの一部の人たちには、このような兼務で入ってきた私を歓迎しない人もいたようだ。

プロジェクト・チームの長は、野中耕一氏（1934-2014）であった。やり手であるが、管理するよりも部下の発意を奨励して思う存分働かせるタイプである。当時経済開発分析事業では、1976年から78年までの3年計画で「地域経済研究事業」を実施していた。この事業の一環として、タイではカセサート大学の農業経済の人々と組んで、1977年夏に北タイのチェンマイのメーテー郡、1978年夏に東北タイのチュンペー、コンケーの農村調査を各1ヶ月ほど実施した。私は両方ともに参加した。タイ側は、ワーリン・ウォンハーンチャオ（1937-2007）さん、チャノンさん（タイ商業会議所に転出）、ラチャニコンさんなどであった。メーテー郡には、チェンマイ市内のチャーンプアク（白象）ホテルに泊まって毎日30分ほどピックアップに乗って通った。農家の家に上がると、

³ アジア経済研究所『アジア経済研究所 30年の歩み』（1990年12月刊）S6頁

竹の床と壁，広葉樹のバイ・トーンタウンという大きな葉を乾燥させて葺いた屋根，部屋数は一室のみで，室内に箆笥などの家財はなく，唯ロープ一本を張ってそれに無雑作に破れ衣服を掛けているというレベルから，カギ付の頑丈な木のドアを設けた寝室がある家屋まで，貧富様々である。農耕は牛で，1960年頃までの日本の農村を見るようであった。メーテンは，旧日本軍がビルマ進攻のために建設したメーホーンゾーンに至る道路の起点である。郡内のガムナン（村長）の役所は，どこに行っても自宅を使っており，出生届けなどの公文書が木箱から無造作にはみ出していた。車が通れる道がなく山道を歩いて上ると全員がハンセン病の患者の村や，多くの人が首に大きな瘤をぶら下げている村などもあった。

分析事業の主要な業務の一つは，担当者が各国ごとの「年次経済報告書」を作成することであった。経済概況の外に，その年毎に分析チーム共通テーマを設けて各人が調査のうえ1章分を書いた。私は1977年と78年の2年について「タイ年次経済報告」を作成した。共通テーマは，1977年は肥料産業，78年は自動車産業であった。

経済報告書作成のために，タイの経済官庁やタイに援助している外国の援助機関などを訪問して経済データを収集し経済政策などをインタビューした。これによってタイの役所でどうすれば効率的にデータの収集ができるかを少し理解できた。当時はタイの役所の殆ど（例えば内務省や商務省の関連局など）はアポイントなしに飛び込み訪問をしても拒否されるようなことはなかった。誰に尋ねればよいか分からない時は，部屋のドアを開けて見廻し一番地位の高そうな人の席に向かった。入り口付近の地位の低い人と最初に話しをしたのでは，その人より高い地位の人とのコンタクトは難しくなる。タイの役所の各局は独自の図書室を有しており，これは部外者にも公開されていた。

1977年夏にタマサート大学を訪問した時は，1975年2月に訪ねた時との違いに驚いた。大学に入る門は閉ざされ，大学入構者を一人一人チェックしていた。前年に10月6日事件があったからである。

1978年夏の東北タイ調査で農家を訪問すると，豚が大きな腹を見せて寝そべっていた。野中さん曰く，「村嶋君，この豚はメスだよ。乳が沢山ついている」。私は朝夕，豚を見ながら大きくなった人間なので，オスカメスカは一瞬にして判る。「野中さん，これはオスですよ。オスにも乳はありますよ。」東大農学部農経出身の野中さんに失礼なことをしたと後悔した。野中さんには，その後もいろいろ世話になった。

家畜に関して，私の方が無知を暴露したのは，アジ研の事務からバンコクに海外調査員として派遣されていた新沢正禎さんと何かの機会に，アジ研事務所（R.S. Hotel）に近いナーンローンの競馬場（新国王によって回収され廃止された）を訪問した時である。初めて本物の競馬馬を見た私は，その脚の細さに驚いた。私が見て育った馬は，農耕馬で頑丈な脚をしていたからだ。私が，「タイの馬は，脚が細すぎますね」と言うと，新沢さんは「競馬馬はどこでもこんなものです」と教えてくれた。確かに日本の競馬馬を画像で見ると，スマートな脚だ。

1977年のタイ調査のあとはフィリピンの同じプロジェクトをルソン島南部のナガシティに見学し，1978年のタイ調査のあとはビルマを訪問しマンダレーまで飛んだ。フィリピンもビルマもこれが最初の訪問であった。

1975年始め，私が初めて訪問した当時，バンコクは未だ牧歌的で，どの路上でも，道の両側に車を駐車することができた。車は少なく，バスが我が物顔に飛ばすことができた。例えば，1980年代

初めまでは、アジ研事務所のあるラーンルアンからター・パチャンのタマサート大学まで、渋滞は一切なくバスで、数分で到着した。従って交通事故も多かった。バンコクの夜間、新聞紙を掛けられたまま路上に寝かされている事故死体を何件か眼にした。また、バンコクから車を出て、未だ農村であったランシット辺りから、北タイ、東北タイに至る道路には、殆ど数キロ毎に車に轢かれた犬の死体が放置されていた。車が猛烈に飛ばすのと野犬が車に慣れていなかったためであろう。しかし、80年代の末になると轢かれた犬は殆ど見る事がなくなった。

ターク・スコタイ・ピサヌローク間の国道を夜間に通った時は、両側の百姓家の多くには未だ電気が入っておらず、薄暗いランプが灯され、家の前では火をたいていた。その火に向かって、無数の昆虫が飛び込んでいた。正に、「飛んで火にいる夏の虫」の豪華版であった。

私がアジ研入所当初希望していた中国研究にかかわることなくタイ研究を続けることになったのは幸運であった。当時中国は入国さえも容易ではなく、訪中しての現地調査やインタビューなどは考えられなかった時代で、もし現代中国研究を本務としていたら、当たっているのか、間違っているのかも判定できないような、群盲象を撫でるが如き原始的な研究しかできず苦労した筈である。

日本で、タイ研究を専門とする有給研究職が生まれて日は浅く、研究の蓄積は質量ともに少なかった。既に大家然とした人もいないことはなかったが、精々一日の長がある程度であった。タイ研究は遮るものも、モデルもない青天井に見えた。タイ研究は、誰気兼ねなく、自分のやりたい研究ができる新天地であった。

秋天の澄み切った青空を望みながら、鍬と鎌を担いで山の畑に行くような爽快さで、今日に至るまで、タイ研究に従事できたのは、この上ない幸福である。

タイ語学習

さて、1976年調査研究部に転じた私に、件の調査研究部長は新館3階には部屋がないという理由（実際はあった筈だが）で、同じフロアの窓のない倉庫部屋を私の部屋に割り当てた。

ところで、あてがわれた倉庫部屋にもメリットはあった。気兼ねなく声を出してタイ語の学習をすることができたからである。アジ研に就職直後の1974年8月に東京外国語大学の夏期特別講習でタイ語の講習があった。講師は、松山納先生（1919-2002）、チンタナー先生であった。面倒見のよい松山先生からは、お亡くなりになるまで激励を受けた。このタイ語講習会には、ひとときよくできる印象的な学生がいた。慶応大学で言語学を学ぶ三上直光（のちに慶応大学教授）さんであった。同年の三上さんには、タイでも会う機会があり、言語について私の無智を啓かれた。

アジ研の語学研修費は僅かなものであったが、最初に講師を頼んだのは、夏のタイ語講習会で知り合った日本人女子学生に、紹介された彼女の夫であるBさんであった。彼は一橋大学大学院に学ぶ、文部省の国費留学生であった。左翼学生運動家で、タイ語を教えることに熱意はなかった。バンコクの彼の家を訪ねたことがあるが、ワット・ポーウォン近くの運河に面した長屋で、戦後海南島から移民してきた母親はタイ語が全くできなかった。彼が日本を引き上げる時、在日タイ人左派学生運動の雑誌一切を貰い受けて、今も手許にある。1973年10月学生革命前後のタイ青年たちの海外における運動を知る資料として価値があるだろう。Bさんは帰国後タマサート大学経済学部の講師に就職し、福田赳夫首相に交渉して日本政府の援助で同大学に日本研究センターを開くことに貢献したという。

彼は研究には関心がなく、日本人相手のバーを経営したりしていたが、40歳代半ばに肺がんで亡くなった。

熱意のないBさんとのタイ語学習では成果が得られなかった頃、同じく国費留学生である明治大学博士課程のタウィー・ティーラウオンセーリー氏 (ทวิ วีระวงศ์เสรี) と知り合い、私は無償で同氏がタイ語で書いた博士論文(日タイ外交関係史)を日本語に翻訳するのを手伝い、代わりに同氏は無償でタイ語を私に教えるという関係が成立した。タウィーさんは、両親が戦後タイに移住した後に、タイで生まれたのでタイ籍を得た生粋の潮州人である。無事博士号を得て帰国後タイ外務省に就職し最後は広州総領事で退職した。タウィーさんは謙虚かつ親切な人柄で、大変親しくなった。1997年1月に私は広州沙面の白天鵝ホテルにタウィーさんを訪ね、お世話になった。タウィーさんは母語の潮州語で潮州人の運転手や使用人に指示していた。これら在日タイ留学生との交流から、タイ籍とは言え、親の代にタイに移民してきた華僑の二世帯が多いことを知った。

タウィーさんとのタイ語の勉強方法は、まずタイの社会経済開発計画書など簡明快な文章から始め、ポータンの小説『タイからの手紙』などに進んだ。私がタイ語文献を予習して、意味の不明なところをタウィーさんにアジ研の倉庫部屋に来てもらって説明を受けるのである。『タイからの手紙』は1979年9月に日本語訳が出版されたが、私が読んだのはそれよりも2年前である。同書の著者ポータンは女性で、その微妙な心情描写から、私は、主人公もてっきり女性だと勘違いした。私が使った辞書は、ハース及びソー・セータブットのタイ・英辞書2冊であるが、両辞書にない語彙はタウィーさんの説明を聞いて、単語と意味を辞書の中に書き込んだので、両辞書ともに私の大学受験時の英語辞書同様に真っ黒でボロボロになった。結局、私はタイ・日辞書には全くお世話にならずタイ語を覚えた。私が当初使ったタイ・英辞書は次の2点である。

Mary R. Haas, *Thai-English Student's Dictionary*, Oxford University Press, 1964, (1975年3月の初タイ訪問時に購入した)。

So Sethaputra, *New Model Thai-English Dictionary Desk Edition*, タイワタナーパーニット社 (2回目に訪タイした1977年8月に購入した)。

両辞書は1980年3月末に海外派遣員として来タイするまで使い、それ以後はタイ・タイ辞書を使った。2010年代にネット上のタイ辞書が充実したのちは、それを使用している。

海外派遣員として在タイした1980-82年の在タイ時にタイ語は大体マスターできた。タイ語と中国語の文法は共通するものが多い。従来、漢字が並んだだけのような中国語の文法構造を把握するには苦労したが、タイ語をマスターした後は中国語の意味もよく分かるようになった。中国語はタイ語同様に、「てにをは」がなく変化もしないので、意味が分からない単語を読み飛ばせば、読むスピードは日本語並み、或は日本語以上になる。逆に中国人の日本語学習には克服し難い問題が残るようである。アジア太平洋研究科で指導した多数の中国人留学生が日本語で書いた修士論文には、全て添削の手助けをしたが、完璧に近い日本語を書くことができる留学生でも、「は」と「が」の使い分けは難しい。

タイ語の外にも東南アジアの言語をいくつか学習した。1976年9月20日から12月1日まで11週、延60時間、虎ノ門の国立教育会館の一室で開催された「昭和51年度東京外国語大学公開講座ベトナム語研修」(講師は同大学の竹内与之助教授、宇根祥夫助手)を受講し、受講修了証を得た。

また、私費で三鷹のアジア・アフリカ言語学院に通い、1学期間インドネシア語の講習を受けた。また、アジ研ではビルマ語の講習も受けた。1981年6月からチュラーロンコーン大学文学部でパーリ語授業を聴講させてもらった。古風な旧文学部本館1階の風通しのよい廊下が教室代わりで、受講者は4-5人であった。1987年の冬には、サートン路のアリヨン・フランセーズのフランス語講習に通い、タイ人の高校生や大学生に混じって半年間学習した。ここは発音重視で、なかなか若い人のように舌が回らず苦労した。

どの言語も短期間の学習であり、その後常時使用する機会もなかった。ただ、ベトナム語に関しては辞書さえあれば大体の意味を把握できる程度まで進んだので、2000年代に何度かベトナム語文法書を読み直して、論文（「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」『アジア太平洋討究』13号、2009年、など）でベトナム語文献を引用することができた。

タマサート大学政治学部

アジ研に就職したのは23歳過ぎ、タイに海外派遣員として派遣されたのは29歳になる直前であったので、海外派遣員としてタイに渡航する以前にアジ研で6年弱勤務したことになる。他のアジ研の派遣員より1-2年遅くなったが、6年間は無駄ではなかった。この間に、タイ語の読み書きの基礎を身につけることができ、分析チームでは1977年、78年の夏それぞれ1ヶ月以上、チェンマイとチェンペー・コーンケーンで農家家計調査に参加して、タイ地方農村の実態を把握でき、また、その時のタイ出張時に集めた資料で、私の最初の研究論文であるタイ農民運動をテーマとしたもの（「70年代におけるタイ農民運動の展開」『アジア経済』21巻2号、1980年2月）を、タイに派遣される前に発表することができた。1979年には経済協力室の安田信之氏に頼まれて、『アジア諸国の法制度』（1980年3月）のなかに、Pichet Maolanond氏と共に「タイの法制度」を書いた。

アジ研の海外派遣員は、派遣前に四ッ谷の日米会話学院で英語の試験を受けさせられた。トーフルに類するもので、私の成績は英語圏の大学で授業を受けることができるレベルと判定され、英語研修を免除された。しかし、この時、日米会話学院で、研修を受けておくべきだったと後悔した。

タイの派遣先はタマサート大学政治学部を選んだ。同学部のナロン・シンサワット先生（**ณรงค์ สิ้นสวัสดิ์**）がアジ研に客員研究員として滞在している間に親しくなったからだ。ナロン先生は、学部長に交渉して私に Visiting Professor という、破格の肩書を準備してくれていた。この実態に合わない肩書は、タイで調査するためには大変有用であった。この肩書でアーナンタサマーコム宮殿裏の国会で一年間自由にいつでも傍聴できるフリーパスの身分証明書を得た。実際に1981年の一年間は下院本会議（第一読会、第三読会）を毎回傍聴した。また、国会事務局が印刷した新しい議事録の配布を受け、印刷されないままマイクロフィルムで保存されている1943-46年時の議事録を借りだして複製することができた。当時の国会はカオ・ディン動物園（新国王が土地を回収し動物園は移転した）の対面に位置したが、傍聴を終わって正門を出て来ると、正門前のバス停で会議が終わって出て来た数名の国会議員とバスに乗り合わせることがあった。議員の殆どは高級車を乗り回していたが、当時は貧者の代表も絶滅には至っていなかった。

海外派遣の2年半は、タイ研究の基礎を作ることを基本とした。具体的には、タイ語力の向上、タイ社会各分野の基礎知識獲得、タイ語出版物の収集（とりわけ入手が難しい1950年以前の出版物）

である。

タイ語力の向上のため、朝夕にタイ語ニュースをラジオ、テレビで聴くことは無論、大学内外で殆ど毎日のように開催されていた様々な講演会、演説会、街頭の政治集会を見学した。1980年は、1976年10月6日事件で徹底的に弾圧された学生運動が復活してきた時期で、大学構内でも、殆ど毎日何らかの演説会、講演会が開かれていた。また路上の労働団体等のデモや演説も少なくなかった。私の見学は丁度10年前の東大の駒場寮時代と同様であった。

また、タマサート大政治学部大学院の修士1年生で私のナンローンの下宿近くに下宿していたターダー・アンスチョート君 (ชาดา อังศุโชติ) とは週に1回以上ほぼ2年半を通して映画を見た。当時はバンコクの大通り沿いに映画館があった最後の時代で、私の下宿から歩いて行ける範囲に、サパーン・ヨマラートのラーマ、サパーン・カーオのアンバサダー、パーンファーのチャロームタイ、民主記念塔近くのパラダイス、ワンプラパーのインド映画専門館などなど、数多くの映画館があった。ターダー君の映画代は私がスポンサーとなり、代わりに意味の分からないところを彼に質問した。ターダー君の実家は、サムットソククラム県のメークローン河のほとりにあり、広い椰子園を所有する土地の名家で、親族にはタノーム政権で閣僚を務めた陸軍中將もいる。彼は同じ村のガムナンのむすめ(後にスコータイタマティラート大学准教授)と結婚した。

ターダー君は、私の宗教調査にも付き合ってくれた。主にサイヤサート(マジック、精霊を使った呪術)と言われるものと、異端的仏教である。

仏教では、パトゥムターニーの広大な土地にタマカーイ派が本部を建設し始めた頃で、土地の買収をめぐる近隣の農民と対立し、夜中に新奇な御本尊が破壊されるという事件が生じた。私たちは、ニュースを聞いて、未だ本堂建設前で野外に置かれていた鼻をへし折られた痛々しい御本尊に直面した。サンティアーク派がナコンパトムに広大な本部を開くまえ、バンコク郊外に小規模なセンターを開いていたころ、その地を訪問すると、2階に天国の花が咲いているから鑑賞を請うという案内が貼られていた。何だろうと思って2階に上がると、お棺の中に腐敗しつつある遺体が置いてあった。悪臭もすごい。修行者が遺体の横に泊まるそう。ワット・ポーウォンの一室では、交通事故や殺人で亡くなった多数の遺体写真を部屋の壁一面に貼って修行している僧侶にも会った。ただ、この修行は方法を誤ると気が狂うこともあるそう。ある寺の僧侶が作ったナムモン(バケツの中の水に呪文を唱えながら蠟燭の蠟を垂らしたものを浴びれば病気が治癒すると言うので、朝早くから数十人の患者が列を作っている所も見学に行った。この当時フッパーサワンというサイヤサートの教団が、ラートブリー郊外の山中に天国の都なるものを建設して、バンコクから無料バスの送迎サービスがあるほど賑わっていた。バスに乗って彼らの「天国」に行く時、あらゆる宗教の神々の像が立っていた。この教団の指導者が、9世王は退位すべしという神のお告げを公表したばかりに、この教団は弾圧され廃止に追い込まれた。

バンコクの町の小道脇や地方都市にはカウソンの広告を出した家に出会うことがある。依頼すれば、アーチャー(先生)が憑依して、神のお告げを聞かしてくれる所である。何ヶ所かのカウソンを訪ねたが、そのうちの一人は、平日は銀行員で土日にカウソンをやっていると言う中年の男性であった。苦いパイ・プルーの葉を噛み噛みトランス状態に入るとのことだったが、トランス状態に入ったとは見えなかった。しかし、私の母の寿命を正しく占ったのは流石であった。このような文化

の存在が、1930年代の一時期、バンコクのタイ人にも大本教が広がった背景であろう（村嶋英治『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者，1888-1945』第1章参照）。また、華僑の善壇では扶乩をみた。

選挙調査・インタビュー調査

更に、ナカリン君を助手とした選挙調査や政治家インタビュー調査、それに前述の1年間の国会傍聴などによって、私のタイ語力及びタイ社会知識は向上した。

私は、調査研究の貴重な機会は逃さないように努めた。最初の機会は1980年6月の地方市長・議会選挙及び県会議員選挙であった。この選挙は1976年10月クーデター以後の最初の地方選挙である。どこかの選挙区をじっくり観察したいが、来タイ直後で未だタイ語力が十分でない。そこでタマサート大学政治学部の学生で助手をしてくれる人を探した。この時、幸運にも極めて優秀な学生と巡り会い、彼との交流は現在まで40年以上続いている。その人は、ナカリン・メークトライラット君（นครศรีธรรมราช）である。当時政治学部の3年生であった。彼の郷里近くのナコンサワンの市長・市議会選挙及び同県のムアン郡の県議会選挙を調査対象と決め、質問票をタイ語訳して同地のアノダ・ホテルに1ヶ月程滞在して、全ての立候補者にとって、質問するとともに、グループ毎の選挙キャンペーンの後を追って身近に観察した。現在は全くなくなってしまったが、当時のナコンサワン市側のチャオプラヤー河岸にはペー（水上家屋）が密集しており、ペーに住んでいる有力立候補者もいた。インタビュー調査の質問者はナカリン君で、私は横で聞いていたが、この1ヶ月のフィールド調査で私のタイ語力は飛躍的に向上した。立候補者は様々な職業の人々で、例えば新聞・書籍の流通販売業者あり、月2回発表の宝くじ当選番号を載せて月2回のみ新聞を出す記者兼編集人あり、あるいは地主ありで、選挙以外にもタイの地方経済の理解にも役立った。

選挙調査の成果の発表は、少し遅くなったが、まず日本語で『アジア経済』25巻10号（1984年10月）に発表し、続いて英訳したものを *The Developing Economies* 25巻4号（1987年12月）に発表した。

この調査は、前述したように大学時代に学んだ地域権力構造論を踏まえたものであった。この論文は、当時実態調査が殆ど存在しなかったタイの地方政治に関する研究であり、選挙報道では前から知られていた Hua Khanaen の実態を学術的な論文で書いたものとしては最初のものだと思われる。

Daniel Arghiros, *Democracy, Development and Decentralization in Provincial Thailand*, (Nordic Institute of Asian Studies, Democracy in Asia series, no. 8), Curzon Press, 2001. は、同書3頁のイントロで、当時タイの地方政治の研究が僅少な現実を村嶋の論文を引用して次のように述べている。

However, despite these changes there is a dearth of contemporary local-level studies of politics and political structures. Consequently, Murashima's comment, made in the late 1980s, that research on the subject 'remains extremely inadequate' (1987:363) is largely applicable today.

ナコンサワンでの調査の後、私はナカリン君に助手をお願いし、在タイ2年半、毎週1-2回は必ず会って食事を共にした。彼は、学生運動と共産主義関連のインタビュー、下院議員の補欠選挙見学、単人インタビュー、古い政治家やジャーナリストたちとのインタビューでも大いに助けとなった。

第1図下部の写真は、1980年10月9日にコーラートの下院議員補欠選挙を見るため、ナコンラー



第1図 セーニー元首相手書きの筆者の似顔絵と筆者を描く元首相の写真

チャシーマー県ブアヤイ郡ノーラウェーン村バーンプアで、村落における民主党の選挙キャンペーンを見学した際、ナカリン君が撮影したものである。民主党の新鋭ウィラ・ムシカボン議員が水牛を引いた農民などを前に演説する傍らのテーブルにセーニー・プラモート（1905-1997）元首相（当時民主党顧問）が座して、粗末なノートに30秒程度で次々に子供たちに似顔を書いてやり、破り取って配っていた。こういう選挙活動もあるのだ。私を目にしたセーニー氏は、君も座りたまえと座らせて、あっという間に私の似顔を書いてタイ文字でセーニーというサインを付し、タイトルは「バンザイ」がいいだろうと、ローマ字で書いてくれた。その後、某国の大使公邸で、セーニー首相に書いて貰ったという大使の似顔絵を目にしたが、その出来栄は私のものと同レベルであった。

長期在タイ2回目の1988年時に、一時帰国した際、戦中の在タイ日本軍（39軍、18方面軍）の司令官であった中村明人（1889-1966）中將の息子さんにお会いして、『ほとけの司令官、駐タイ回想録』（日本週報社、1958年）のタイ語翻訳の許可を得て、1989年にナカリン君とともに、当時の大使館近くの私のアパートでタイ語訳し1991年（2003年及び2012年再版）に出版した。その後に矢田部保吉駐タイ公使の「シャム国革命政変の回顧」（『暹羅協会会報』5号、1936年12月）を2004年にタイ語訳し、2007年（2014年、2019年重版）に出版した。この2著は、タイ近現代史の価値ある史料として、タイ人研究者にしばしば引用されている。

ナカリン君はチュラーロンコーン大学の文学部大学院で1932年立憲革命時代の政治史を研究し、2003年には日本学術振興会の論博事業の助成を得て、アジア太平洋研究科の私をアドバイザーとして博士号を取得した。彼はタマサート大学政治学部の教員に就任後、政治学部長を経て首席副学長を



第2図 村嶋・ナカリン共訳のタイ語書籍2冊

務めたのち、憲法裁判所の裁判官に転出した。このポストの待遇、権限などは学長の比ではない。彼も有志竟成の一人である。

1980年のプレーム首相の対共産党新政策で、武装闘争を止めて政府側に投降する共産ゲリラ隊員が増加していた。インタビューによって学生運動と共産主義運動を調査するには良いチャンスである。この調査結果は、「1970年代のタイ国における学生運動と共産主義」（『アジア経済』23巻12号、1982年12月）に掲載した。この論文の48-49頁に示すように21人の政治家や活動家にインタビューした。この時には農民運動についても追加調査し、一部資料も集めたが、論文を書くまでには至らなかった。この時集めた資料は、重富真一氏に提供し、彼が英文の農民運動史論文（2020年）の中で使ってくれた。

この外にもナカリン君に手配を頼んで、プレーヤー・マナワラーチャセーウィーなどの老政治家、プラサート・サップストン（元タイ共産党国会議員、民主軍人グループや公営企業労組の教祖的存在）、あるいはスパー・シリマノン、チンダー・パントゥムチンダーなどのジャーナリストなどの自宅も訪ねた。また軍人、例えば1981年4月1-3日のヤングターク・クーデターの指導者の一人プラチャク・サワーンチット（1937-2003）特別大佐を、彼のバンコクの私的拠点に訪ねた。驚いたことには、クーデター失敗後であったが、その拠点には多数の旧部下が入り出しているだけでなく、多数の若い女性たちで華やかであったことである。1980年6月にタイ・カンボジア国境で、進攻したベトナム軍と命を張って戦い「ターパヤーの英雄」と称賛された武人らしい生き様に見えた。ヤングタークのリーダーの一人チャムロン・シムアンにも別の機会に偶々出会ったのでインタビューを申し込んだが、「将来政治活動をする妨げになる」という理由ですげなく断られてしまった。

1981年末になると、私は一人でのインタビューもできるようになった。以後は、タイにおけるインタビューは、自分で連絡先（電話番号案内などで）を探し、電話して面会に行った。但し、私が65歳を過ぎると、私がインタビューしたい人は殆ど鬼籍に入ったこともあり、2015年頃を最後にタ

イ人へのインタビューは中断している。但し、2010年代はタイ関係者の日本人子孫へインタビューの機会が増えた。

1981年3月末、サコンナコンのワーリチャプーム郡役所が、コミニストに焼き討ちされたというので見学に行った。1980年以降、コミニストの投降者が増大したが、1982-3年頃までは東北タイの道路は各所に、路上に棒を渡した検問所があり、兵士が通行する車を止めて検査していた。

1978年夏に、コミニストの聖地として知られる東北タイのプーパン山地を越えたが、借りた車が古く、上り坂ではスピードが遅くなり、遂にエンストしてしまった。コミニストに、襲われるのではとひやひやした。また、その後再びプーパン山地を越えた時は、すれ違った車のエンジンがパン！と爆発音を出した。撃たれたと思い、身をすくめた。そのうちにコミニストもいなくなり、1989年5月初旬には自分で車を運転して、ピサヌロークーロムサック間の嘗ての共産党との激戦地カオコー及び共産党の拠点プー・ヒンロムカオ山頂を尋ねた。両地は既に観光地として売り出し始めていた。

さて、ワーリチャプームから戻った1981年4月1-3日にヤングタークがクーデターを起こし、バンコクを占拠した。私はカメラとテープレコーダーをもって、タイ人の記者同様に、ドゥシットの陸軍クラブ（この地も新国王になって回収されたようだ）に設けられたクーデター本部に駆け付けた。タイラット紙に掲載された写真には、同本部でスポークスマンの話を聞くタイ人記者の中に私の姿も写っていた。コーラートに逃げたプレーム首相は国王夫妻の支持を得て巻き返し、バンコクではプレーム派の空軍機が威嚇のためにクーデター本部目がけて何回も急降下してきた。クーデターの最中に、海外調査員として川上邦夫氏、海外調査員として末廣昭氏が来タイした。

ナーンローンのフラットの20年契約

バンコクの2年半は、パーンファーのナーンローン警察署（1992年5月の騒乱で焼き討ちされ移転）とナーンローン（ナコンサワン）通りを挟んで向かい側にある下宿に住んだ。この下宿からESCAP本部には歩いて7-8分の距離なので、エスキャップの外国人職員も何人か利用していた。

この下宿からアジ研のバンコク事務所があったR.S.Hotel（現Royal Princess Hotel Larn Luang）まで歩く途中のパニアン通りのワット・ケー寺の門の反対側に、1981年に5階建て100室ほどあるフラット（敷地はワット・ケー寺所有）が建設された。野中さんの勧めで、3階の一室（35平米）を10万バーツで20年の長期契約（セン、^{๒๐}ปี, 「承」の潮州語発音）して、同所で断続的ながら20年を過ごした。2000年にコンドミニアムに移るまで、バンコクにおける私の研究の拠点及び収集した資料の保管場所として大いに役立った。このフラットから私は、1990-93年の間は外務省図書室（当時は王宮前にあった）や1994年以後は国立公文書館に歩いて通った。

ワット・ケー寺では、頻繁に葬儀が行われ、真夜中過ぎまで映画やリーケー（^{ลิเก}）、中国劇ギェウ（^{เงี้ยว}, 「優」の福建語発音）などの演劇の大音響がひびき安眠を妨害されることも少なくなかった。風向きよって時には火葬の悪臭も漂ってきた。

このフラットは正にバンコクの庶民の生活の場であった。郵便物は、フラット一階入口カウンターに放置され、その日の内に回収しないと、受け取ることは難しかった。自分のものでない封書を、誰かが勝手に持っていくからである。私の部屋には、10年以上のタイ語新聞雑誌各種を積み上げていたが、白蟻に入られて2-3週の間、新聞の中身は食い尽くされてしまった。白蟻は、本よりも印

刷インクの滴る新聞紙を好むと見えて、同室に蓄えていた書籍類の被害は少なかった。後から思うと、蛍光灯の下を少数の白蟻が飛び、夜中にはムシャムシャという白蟻が新聞紙を食べる音も聞こえていた。10年ほど経たころ、フラット住人数名（その親玉は日本で働いたことがあるという女性）がフラットの出納管理者を名乗り、少額ながら管理費と水道使用料などを徴収し始めた。当初の契約では、これらの経費は無料となっていたのだが。そうこうするうちに、彼等は徴収した金を持ち逃げし、水道局への支払が滞ったので、水道局からはフラットに通じる大きな水道栓を止められてしまった。フラット住民は、隣接するお寺（ワット・ケー）に水をもらいに行くこととなった。男性の場合は僧侶の行水場で行水することもできた。私が白いパンツ一枚になって行水していると、僧侶から白いパンツは透き通るのでダメだと嚴重注意を受けた。

私の部屋にはエアコンなどは付けなかったが、どの季節でも快適に過ごすことができた。暑ければ水をかぶり扇風機で体を十分に冷やすことができるからである。当初電話料金は銀行の自動引落ができず、利用料未納のために不在中に切断されてしまい、来タイ後毎回、再開通のために、ワット・リアップの対面にある電話局に支払に行く必要があったが、いつしかその労もなくなった。次ぎに移ったコンドーもそうだったが、建築時の防水工事が不十分で水浴場の天井からは、水玉がポタポタと落ちてくるようになった。

2000年は、1997年の経済危機後の不況から未だ回復しておらず、バンコクには建設半ばのまま放置されているコンドミニウムが目立った。完成したコンドーも売れ残りが多数あった。不動産不況打開のために、タイ政府は外国人にもコンドーの区分所有権を認めた。ナカリン君は、官庁の分散で官庁街の一つになったサムセーンのラーマ6世通りソーイ30（アーリーサムパン）にコンドーを購入して移り、私にも購入を勧めた。私は100万バーツ（当時300万円程度）で40m²程度の1室を購入した。以後、ここが私のバンコクにおける研究拠点となった。

2000年にフラットからコンドーへ引っ越しをしようと、入口の雑貨店で運搬車をどこで雇えばよいかと尋ねたところ、その女店主は引っ越すのなら、フラットの権利を売れ、運搬は自分の車を使って無料でやってやると言い出した。20年契約が切れると、無権利になるものと勘違いしていたが、セン（承）契約では更新する権利が残るのだ。この権利を女店主の言い値の10万バーツで売った。10万バーツで借りた部屋を20年後に同額で売ったのである。但し、20年前の10万バーツは日本円で100万円したが、この時は30万円に下がっていた。女店主は、このフラットの10数部屋の権利を手にしており、貸家経営者でもあったのだ。別に10万バーツ以上を提示する人もでてきたが、彼は即金を準備できなかった。引っ越しとなると、話したこともないフラットの住人たちが次々に私の部屋に入ってきて、これを呉れ、あれを呉れと、木製ベッドや多数の本立て、それに紙の類いまで全て運び出していった。

国立図書館4階雑誌新聞書庫（1982-2008）

1982年5月2-3日、アジ研の海外調査員の川上夫妻とカンチャナブリーとビルマの国境にあるThree Pagodaを訪問した。当時は、現在のような道路はなく、川上さんの運転でトーンパープームからは車一台がやっと通る、今にも虎でも出てきそうな竹藪と疎林の中の道に行くこと2時間余、モン人の村であるサンクラブリーに達し、ここで一泊、翌日ジープを雇ってやっとThree Pagodaに到

着した。ここはタイとビルマの国境だが、国境らしきものは何らなく自由にビルマ側に越境できた。ビルマ側はモン人の解放区でロバに乗った兵士がいた。モン人の村では頭上に物を載せて運んでおり、20年後にカンボジアを訪問した時にはクメール人も同じ運搬方法をしていた。モン・クメールの文化的共通性であろうか。1989年4月に自分で車を運転して南タイを一人旅した際に、タイ領の幅が最も狭いプラチュアップで車をタイ側に停めて、国境のダーンシンコンをオートバイでビルマ側に入ったこともある。この道は第2次大戦期に日本軍が建設した道で、ビルマ側にはタイ側の農民が砂糖キビを植え付けていた。この悪路を使ってタイ側からカレン族の解放区へ石油などの物資が運ばれていた。武器を携えたカレン民族防衛組織（KNDO）の兵士たちにも会った。

Three Pagoda 旅行からバンコクに戻って間もない1982年5月13日に、ふの悪い（母の口癖）ことに母が高血圧に因る心臓肥大により53歳で急死した。急いで税務局でTax clearanceの手続をして翌日香港経由で福岡に帰り葬儀に間に合った。母が香椎高等女学校時代に全校生徒を代表して読んだ学徒動員の決意文が残っているが、母は同校卒業後篠栗小学校の代用教員をしている時に父と結婚した。世話好きであったためか、若い頃から父と一緒に仲人を多く務め、その実績が買われ、仲人連盟（元毎日新聞社員竹内裕氏が理事長）が1973年5月に福岡市天神の西鉄グランドホテル内にカウンセリングルームを開設した際（毎日新聞1973年4月26日東京朝刊）、カウンセラーに採用されて勤務していた。

母の葬儀から戻って、『アジア経済』用の学生運動と共産主義の原稿を完成させた後、6月頃から私は国立図書館4階の雑誌新聞書庫に月曜から金曜日まで毎日通い、昼食も惜しんで書庫内で1910年代から30年代の古い新聞を読み、筆写したり複写したりした。この間、書庫を利用する研究者は私一人であった。長年利用者がいない新聞や雑誌は厚く真っ黒なホコリに覆われ、配架もバラバラであった。利用するにはまずホコリを雑巾で拭き、系統的に並べ直す必要があった。書庫の担当職員は大変親切で、広い書庫内のどこで何をしようが全く文句を言われることもなく、またコピーしたい場合は階下のマイクロ・コピー室に自由に持ち出すことができた。この時コピーしたもののオリジナルは、現在は失われてしまったものも少なくない。後述のように、国立図書館は1983-85年に古い貴重な新聞雑誌をマイクロフィルム化したのだが、温度管理を誤ってマイクロは腐り、もともと劣化していた原紙も撮影時にバラバラにされて利用不能となったからである。私にとって残念なことは、この時には未だデジタルカメラが出現していなかったことである。

国立図書館4階の3ヶ月余に亘る作業では、母が亡くなったショック及び昼食を抜いたことで10キロほど減量し、肥満体解消にはなった。

4階の雑誌新聞室への自由な出入りは1985年ごろまで可能であった。その頃までタイに出張するたびに、この部屋で、ワチラーウット王（六世王）が論文を掲載した当時のタイ字新聞などを読んだ。これらの資料はタイの国家イデオロギー論文で使った。残念ながらこれらの新聞も最早利用不能になったようである。

当時の国立図書館には、現在のように外部の複写業者は入っておらず、3階にあったマイクロ・コピー室で図書館の職員にコピーを依頼しなければならなかった。この部屋では、古新聞のマイクロフィルム作成も行っていた。アメリカで、マイクロフィルム撮影技術の研修を受けたという腕のいい年配の技術者が責任者であった。この人から、国立図書館は予算不足でマイクロフィルムの材料を購

入する資金がない、もし私が自費でマイクロフィルムの材料を購入して持ち込めば、古新聞を撮影してマイクロフィルムにしてやる、作成したマイクロフィルムのオリジナルは国立図書館に残し、私が持ち込んだ材料の経費を公定のマイクロ複写料金で清算して私が欲しいマイクロのコピーを私に渡すという提案があった。これは私が1982年9月に帰国する頃のことである。

この提案に合意した私は、マイクロフィルム材料の買い出し、図書館への搬入、あるいは完成したマイクロの受け取りをナカリン君に依頼した。この方法で私が帰国した後も、担当技術者が退職するまで、2-3年間古新聞のマイクロフィルム化が進行した。この間に重要な古新聞の殆どがマイクロフィルム化されたと言ってよい。しかし、極めて残念なことは、この時に作成され、国立図書館に保存されていたマイクロフィルムの多くは、温度管理のミスからフィルムが溶けてしまい使用不能になったそうである。マイクロ撮影の際に、劣化した新聞原紙も綴じ目を解いてバラバラにしているので、国立図書館ではマイクロもオリジナル新聞も閲覧できなくなり、タイの貴重な文化遺産が失われたのである。何が失われたかは、国立図書館が1970年と1972年に作成した所蔵新聞雑誌リスト(Periodicals and newspapers Printed in Thailand between 1844-1934 and 1935-1971)と2008年6月のマイクロフィルム所蔵リストを対照すれば明らかである。現在では、国立図書館は雑誌新聞の所蔵リストさえも公開していない⁴。普通に考えれば、図書館の蔵書は時代とともに増大し、サービスも向上するはずであるが、タイの国立図書館は逆行している。タイは国立図書館職員の不注意により王政時代に王族が大切に保存公開した新聞雑誌類を失い、更に2000年代以降の超尊王主義(hyper royalism)の猖獗で、従来何ら問題にされることがなかった王室に関わる情報にまでカギを掛けてしまった。

私は私費でマイクロフィルムを購入したので、入手したものは厳選したものだけである。当時コーネル大学の図書館も新聞雑誌マイクロフィルムのコピーを大量に依頼していた。タイの国立図書館で失われた新聞雑誌の一部については、同大図書館にマイクロフィルムがある可能性がある。現在私だけしか持っていないと思われるタイ字新聞は、日本商人宮川岩二が1922年6月初～24年3月末に刊行した日刊紙『ヤマト』のマイクロフィルムである。これはデジタル化して2017年ごろの授業でタイ人大学院生に配布して読んだ。

なお、バンコクで発刊された華字紙のコレクション(1920年-50年代)は原紙のまま、2008年まで国立図書館に所蔵されていた。4階の新聞雑誌書庫へタイ語の新聞雑誌を読むための立ち入りが禁止されるようになって、華字紙の担当者は別人なので彼の許可で4階の新聞雑誌書庫に立ち入り華字紙の原紙を選んで、エレベーターで1階か2階の閲覧室に降ろしてもらい、筆写したり読んだりすることができた。わざわざ筆写したのは、華字紙に使われている活字は摩耗して消えかかったものもあり、直接原紙を見ないと判別できない字があるからである。特に2005年9月からの2年間、早大のサバティカルで在タイした際には、16時まで同じ敷地内にある国立公文書館で史料を読んだ後や、公文書館が休館となる日曜日には国立図書館で華字紙を筆写した。ところが2008年になって、バンコクの華僑崇聖大学が華字新聞全てを借りだしてデジタル化し、一般に公開するという話が出て来

⁴ 村嶋英治「タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史：未利用資料を中心に」『アジア太平洋討究』39号、2020年、4-5頁の注3参照。

た。4階新聞雑誌書庫の華字紙は次々に同大学に運び出されたが、私は運び出される前に、最大限の努力で必要な箇所をデジタル撮影した。デジタル撮影が許された最後の日は2008年9月7日であった。最後の日が近付くと、1コマでも多数撮影するためにデジタルカメラを持って立ったり座ったりする頻度は急上昇したので、本当に腰が立たなくなった。

華僑崇聖大学はデジタル化を完成させたが、言われたような一般公開はせず同大学に行ってみるしかなかった。国立図書館は戻ってきた華字紙の原紙は見せず、デジタル化されたものを一台のパソコン（しかも立ち見）で見せているだけである。

私は国立図書館が所蔵するタイ字新聞、華字紙の必要部分は既に原紙で読み筆写、複写、マイクロフィルムもしくはデジタル撮影で所蔵しているので、特に困ることはないが、これからタイ近現代史を研究しようとする人は、資料のアクセスに大変苦勞することであろう。公的図書館は、社会経済文化の発展とともに古い資料も追加され、サービスが向上して快適便利に利用できるようになると思われるかもしれないが、タイ国立図書館では正反対のことが生じているのである。

タイ語古本の収集（1980-2013）

最初の長期在タイ中に、急いで関連の資料を集めて博士論文を作成しようなどという考えは、当時の私の頭には毛頭生じなかった。

私は腰を落ち着けて、タイ語力及びタイの諸事情基礎知識の獲得、それに入手可能な限りのタイ語古書の収集に努めた。私のタイ調査研究のなかで、最も長期的に継続して行った仕事は、1980年から30年以上続けたタイ語古書の収集である。収集したタイ語書籍は1950年以前にタイで刊行されたものならば殆どの分野の書籍・雑誌が含まれる。1950年以前にタイで刊行された書籍・雑誌のタイトル数は限られており、その全てを集めることを目標としても、それほどスペースは取らないのである。私のタイ語コレクションを、どこかに纏めて保存公開することができれば、タイ出版史やタイ語書籍の歴史に通暁している人のなかには、これが私のタイ研究上の最大の貢献であると評価してくれる人も現れるかもしれない⁵。

私は1980年3月末にアジ研の海外派遣員として在タイして以来、2005年頃まで在タイ中の土日の殆どをタイの古本市場で過ごした。古本業に関係しているタイ人殆どと面識があり、その中の数人とは親しかった。彼らにインタビューしてバンコクの古本市場の歴史を書いてやろうと思っているうちに、殆どの人とは幽明界を異にしてしまった。

1980年代初めは、古本の主要な販売の場所は、王宮前広場（サナム・ルアン）からラーチャダム Noon 通を渡ったところにあるプラ・メー・トラニー女神像周辺に設置されていた数十の1坪足らずの古本販売の常設スタンド、土日のみ開催される王宮前広場でのサンデーマーケットであり、土日には両者の周辺の歩道上では、その週に仕入れた古本を段ボール2-3箱に入れて運び込み、路上に広げて販売する者も多かった。彼らが路上に広げる前に段ボールの中を漁って欲しい古本を確保するた

⁵ 私が収集したタイ語古書の一冊は、やっと最近になって、『アジア太平洋討究』39号、2020年の拙稿「タイ国における第2次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史：未利用資料を中心に」や同41号、2021年の拙稿「最初のタイ留学日本人織田能（生田得能）と近代化途上のタイ仏教」などで写真とともに紹介している。

め、朝早くから繰り出す常連客が数人いた。私もその一人であった。ライバルは、そのころ古書収集を始めた好事家アネーク・ナーウィカムーン君 (เอนก นาวิกมูล) で、私より2歳下の彼とは同じ本を左右から引っ張り奪い合ったこともある。アネーク君は頭にきたのか、外国人がタイの古書を買って漁っていると非難がましい記事を書いた。その外のライバルは、古書を安く仕入れて転売して生活する人が数人。彼らは私を同業者だと思い込んでおり、私は日本のどこかにタイ語古書を販売していると信じていた。日本にそのような奇特な収集家がいったり、図書館があるのなら、私は何も苦勞して私費でタイ語古書を集める苦勞をする必要はないのだが。

上記二ヶ所の外にも、中華街のサムエークの路上など数ヶ所で路上売りしている所があった。サムエークの販売は夕方、私はバスで週に2回ほど通った。

古本販売業者の中には、日本人である私はタイ人ほどには値切らないので、上客と思ってか、自宅に長年貯めている貴重な古書がある、見に来てくれと誘う者があった。彼らの家を訪ねて、貴重な古書を見つけると言い値で買った。しかし、相場より1-2割高だけのものであった。

39歳で成蹊大学助教授に転職するまで私には個人研究費は全くなかった。当時のアジ研研究員は科研に応募する資格もなかった。1980年代の在タイ中は、タイ語古本や図書を購入する研究費は1銭もなく、全て自分の懐から出した。当時古書には価値が認められておらず、販売業者は家々から1キロいくらとして古新聞紙同様に故紙として購入し、故紙としてよりも値が良さそうな物を選び分けて古本として売っていた。一冊の値段は高くても30パーツ前後に過ぎなかった。500パーツもするような高額(当時日本円1万円は最安値の時は700パーツ程度)なものも殆どなかったが、自腹で買っている私は、高額の本を買う場合には、慎重にならざるを得なかった。もし、当時毎月3万円位の図書購入費を自由に使えたら、私の古本コレクションはより充実したものとなったはずである。

今でも買わなかったことを後悔している物がある、例えば週刊カーオパーブ誌(1930年代末)の一揃いである。これはチャラット・ピクン氏の倉庫の中にあった。但し、現在京大東南アジア地域研究研究所のチャラット・コレクションには入っていない。チャラット(ジャラットと書いた方が実際の発音に近い)氏は、司法省の退職下級官吏で、古本に限らず、切手、紙幣、コイン、勲章など様々なコレクターであり販売者であった。彼は古本屋で、欲しい本があると窃かに手持の袋の中に押し込みそのまま立ち去ることで知られていた。古本屋もよく心得ていて、すぐに彼の袋を取り押さえ、盗まれそうになった本を取り出していた。そのような場面に私も数回出会ったことがある。チャラット氏は、古本を買いそうな人を自分のゴードウン(倉庫)に誘った。私も何度も見に行ったことがある。倉庫は、ショップハウス風長屋の2室分を借りたものであった。貴重な本は少なく、多くは最近の葬礼記念本で同じ本が5-6冊重複したものが多かった。京都大学東南アジア地域研究研究所が Special Collections として誇る Charas Collection (チャラット・コレクション) は、多くの人が彼の倉庫を漁った後の余り物を、相場から大幅に懸け離れた高額で購入したものである。当然貴重な本は少なく、私は京大に見に行ったが見慣れないものは2-3冊しかなかった。しかも、京大の高額購入はバンコクの古本の価額を引き上げて、私のような貧乏コレクターを困らせた。

1986年12月の『アジ研ニュース』75号に「タイ語文献と古本屋事情」というタイトルで書いたが、その頃からタイの古本事情は大きく変化した。

1980年代後半にタイで生じたレトロ趣味ブームで、古書籍にアンティークとしての付加価値が付

くようになった。経済発展で増大した富裕層の中には、居室を立派な表装を施した古書籍で飾る人がでてきたのである。お蔭でそれまで見向きもされなかったのが管理が不十分であった寺院の図書室やエーカマイにある文部省学術局の図書室などから、貴重な古書籍が多数盗み出された。盗品を買い集めて、最終需要者に高額で売りつける商人（本職はバーンランプの繊維商人）の所蔵庫を、私は見学したこともある。

同じ頃トンチャイ・リキットボンサワン氏が古本収集を開始し、高い値段で転売を始めた。彼は、大学を出て内務省に勤めたが、政治家の秘書になって辞職し、その後古本収集を始めたとのことである。彼は、私にも法外に高い値段で本を買わないかと持ち掛けて来たこともあるが、買ったことはない。私は彼より7-8年早く古本収集を始め、既にめばしい古書は所蔵していたからである。彼は、1997年頃から原本（トン・チャバップ）出版社の名で、タイ語のレア・ブックの復刻を始めた。これは価値ある仕事だが、本人の歴史知識が不十分でおかしな解説を付したものもある。

バンコク200年祭（1982年）の際、サナム・ルアンでのサンデーマーケットは廃止され、スワン・チャトゥチャックに移った。プラ・メー・トラニー周辺の古本スタンドも1983年には廃止された。古本屋はチャトゥチャックへ移動し、古本の値段がよくなると更にデパートの地下などに進出した。古本商ヒア・ガオは、プラ・メー・トラニーの古本屋スタンドからチャトゥチャックに移り、更にセントラル・ラートプラオの地下に移り、テナント賃料が高くなるとその対面のユニオン・モールの地下に移ったが、最後はテナント賃料高騰のために2013年に廃業した。ヒア・ガオ夫婦とその子供たちの古本商人とは、30年以上の付き合いであった。古本は場所を取り、それほど儲けも多いわけでない。場所代に金がかかるので、チャトゥチャックやデパートの一角を借用して営業していた常設の古本屋は、2013年前後には消えてしまった。タイの古本販売はネット販売と春秋年2回シリキットセンターで開催される図書週間祭での販売が主流になった。自分で手にとって、本や雑誌を見ながら安い値段で購入できるような場所がなくなってしまったのである。

見たこともないような古書に遭遇する機会も殆どなくなり、従来のような古本市場もなくなったので、私の古書収集は2013年ごろに終息した。新しい葬礼記念本や非売品の本などを入手したいという思いは強いのだが、それらを気軽に探すことができる場所には未だ行きついていない。

タイ人研究者は、チャティップ・ナートスパーク先生やナッタポン・チャイチン氏などの例外もあるが、概してタイの古い書籍には関心がない。タイ人の教員のなかには、急に熱心な収集家になって数年買い集め、早々と止めてしまった人にも2-3人会った。例えば、タイビルマ関係史で有名なスネート・チュティンタラーノン氏などである。

私が、タイ人の在野の研究者・収集家として尊敬しているのは、故バンチョート・イントウチャンヨン先生（บรรเจิด อินทุจันทร์ยง）である。彼は、南タイの錫開発公社に勤務しながら、チャクリー王家の人物について詳細な研究をした人で、ラーンルアンのダムロン親王旧邸であるワン・ウォラディットのダムロン図書館にも多数の蔵書を寄贈した。これまで会ったことがないような大変上品なタイ人で、本を買ってくれとパーシーチャロンの自宅に私を招いておきながら、私が選んだ本の代価を尋ねると、値段を言わず自分で決めてくれと言った。彼の家は、階下から2階まで、全てタイ語の本で埋まっていた。私が訪ねた時は、息子にタイの韻文を暗誦させていた。王朝時代にタイムスリップしたような感じがした。私はワン・ウォラディットで、所有者（ダムロン親王の子孫）とバン

チョート先生などに数回会ったが、ダムロン親王の子孫の話では、その建物には、チュラーロンコーン王とダムロン親王の遺骨が塗り込められているから売却することができないとのことであった。

戦勝記念塔近くの故サン・パタノータイの旧居で彼の蔵書を見たが、戦前戦中の雑誌のコレクションが充実していた。シーナカリン大学に入るソーイ・プラサーンミットのエーク・ウィーサクン(1897-1983)邸を訪問して、古新聞のコレクション(タイで発刊された各種新聞の創刊号のみを集めたもの)を借りだして大学内のコピー屋で複写もした。このコレクションは、現在タイ国立公文書館に寄贈されているが複写禁止である。当時、エーク氏は存命であり、ソーイ・プラサーンミットは、平家建てを主とした静かな住宅街であった。しかし、私が2回目に在タイし、シーナカリン大学脇の故ジュリン・ラムサム所有のアパートに住んだ1988年頃から高層マンションが建ち始め、今はマンション街に変わってしまった。

4世王、5世王期の貴重な一次史料を所蔵して、これらを用いて大部の歴史書を多数刊行した、ナタウット・スティソククラム氏(1919-2004、民主党国会議員)を自宅に訪ね、史料の入手方法を尋ねたところ、タマサート大学に在学しながら内閣府で働いていたが、立憲革命後に内閣府に山積みになされて放置されていた4、5世王時期の重要文書を黙って頂いてきたとのことであった。いずれシリントン王女に寄贈するとの話であったが、いまはどこにあるのだろうか。

3年間のナショナリズム研究(1983-1985)

1982年9月末に帰国後、アジ研調査研究部に復帰した。相部屋の同室者は、インドネシア農業経済研究の米倉等さん(のち東北大学教授)であった。私事に亘ることまで気兼ねなく話すことができ、実に気持ちのよい同室者であった。

1982年暮れから1984年2月まで、警察に逮捕されたタイ人女性、計10数名の通訳を頼まれた。当時は、旅行ビザで入国し、ビザが切れた後も夜の仕事を続けるタイ人女性の問題になり始めた頃で、日本の外事警察官にタイ語の通訳は未だいなかった。警察署がアジ研にタイ語通訳依頼の電話をし、私が通訳として警察署に赴いたのである。警察の取調は半日以上の長時間であるが、通訳の手当は未だ予算化されておらず署長のポケットマネーで少額の謝礼が払われた。警察の取調終了後、被疑者が調査にサインすると検察に上げられる。被疑者は法務省地下に留置され、検察の取調をうける。地下で担当官が被疑者を呼び出す時の音声は、鳥肌が立つほどに恐ろしい芸術的なものであった。江戸時代のお白州の呼びだしもかくやと思われた。警察、検察、裁判の3段階で通訳をしたお蔭で、日本の司法制度の一端に触れる貴重な経験となった。

当時も今もタイの国家イデオロギーは「民族・宗教・国王」の三位一体である。1970年代のタイ政治における国家イデオロギーの重要性を見て、私はこのイデオロギーの起源を明らかにしたいと思った。

私は丸3年間、英文で書かれたナショナリズム研究書に目を通し、欧米のみならずエジプト、ロシア、トルコなどのケース・スタディ研究も読んだ。アジ研図書館所蔵のナショナリズム関連の英文研究書の殆どに目を通したつもりだが、読んでいるうちに、日本ナショナリズム論で戦後最も著名な日本人研究者のフレームと似たものに出会った。何だ、種本はこれかと思ったが、評判高い同氏の本には、その図書は引用されていなかった。

査読におけるバトル，英文ジャーナルの査読制度の虚実と虚構（1986-2008）

アジ研が当時月刊で出していた『アジア経済』は、査読付雑誌である。アジ研の季刊英文ジャーナル *Developing Economies* もそうである。私は、この2誌に1980年代に合計4本論文を掲載し、また日本国際政治学会（1987年）、日本政治学会（1990年）、東南アジア学会（1992年）の学会誌にも論文を掲載した。大体40歳までに、私は7本の査読雑誌論文を執筆したことになる。しかし、日本の学会誌は、建前は査読だが、実質は编者からの依頼原稿であった。编者から頼まれて論文を書いたのであり、論文を投稿して査読の結果採用されたものではない。会員を辞めているので現状は知らないが、日本国際政治学会の機関誌に論文を投稿したい旨、雑誌責任者に申し出たところ、1年前に同誌に掲載されているから投稿は受け付けないと断られたこともある。

欧米の一流英文ジャーナルは、投稿者に制限はなく、厳格、公正な査読（peer review）を実施して品質保証をしている建前になっている。ジャーナルの査読は double blind 即ち、査読者も投稿者も互いに相手が誰だか分からない、peer review だから何等の報酬もない。モノグラフの査読は single blind 即ち、査読者は著者の名を知らされるが、著者は査読者が誰だか分からない。モノグラフは量が多く時間を要するので、査読者には少額ながら代価が払われる。

ところが、品質を担保するための査読制度は、実は虚構にすぎないことを、私は英文ジャーナルへの最初の投稿で、十二分に認識した。

1985年度にアジ研の Joint Research Program に手を挙げて、タイ側のパートナーをナカリン君（この年にチェンマイ大学講師に就職）に頼んだ。私の3年がかりのタイの国家イデオロギーの起源に関する論文は、JRP Series 55, *Political Thoughts of the Thai Military in Historical Perspective* のタイトルで1986年3月に刊行された報告書の第1章になった。この論文は、英語のタイプライターではなくアジ研新館3階の作業室に入ったばかりの英文ワープロを使用して作成した。1986年3月5日にアジ研のワークショップで発表した後、いくらか手を入れて連休明けの1986年5月8日に米国アジア学会（AAS）の *Journal of Asian Studies*（JAS）に投稿した。同誌が、英文アジア地域研究ジャーナルとしては最も権威あるように思われたからである。当時は e-mail はなく、全ては郵送でやり取りした。1986年5月19日付けで、投稿論文が届いたという連絡が郵送されてきた。

4ヶ月後の9月22日付けで JAS 編集者より、次の手紙が送られてきた。

After some difficulty in finding appropriate readers, we now have no less than five detailed readings of your manuscript. The conclusion they point to is that we must decline your contribution in its current form, but that we hope very much you will undertake the additional reading, recommended in the reviews, and the rewriting that now seem necessary. The third reader, as you will see, felt we should decline the article completely, but the weight of opinion is very much to see the article as one of potentially great interest to our readership.

I look forward very much to hearing from you once you have had a chance to ponder the reviews. Please let me know your reaction to the letters and what revisions you feel you want to undertake at this point. I hope in due course you will indeed resubmit the manuscript.

この手紙には、査読者名を消した5名の査読書がそのままコピーされて添付されていた。3番目の査読者以外は、どれも詳細なコメントが付されていた。5名もの多数に査読を依頼することができる

のは、米国アジア学会（AAS）という大規模な学会のジャーナルだからである。私は会員でもない上、ネイティブチェックも経てない読みづらい原稿を投稿したにも拘わらず、丁寧に査読されたことに感謝した。

さて上記の最初の3名の査読報告から、行論のため抜き書き（第3番目の査読者は全文）すると以下の通りである。

第1査読者（抜萃）

I have read the paper, “The Origin of Thai Official State Ideology—Nation and Buddhist Kingship in Thailand.” The paper breaks new ground in Thai intellectual history in exploring the way the concept of *chat* was reformulated as “nation” and linked with “state” in the development of a Thai version of “nation-state.” I find particularly interesting the discussion of how *chat* was used by King Chulalongkorn and his associates and believe the author has made a strong case for her/his argument that King Vajiravudh’s nationalism was not his creation alone but had its roots in the reign of his father. The author does, however, tend to cover in her/his presentation of the material on Vajiravudh some of the same ground as that found in Vella’s *Chaiyo! King Vajiravudh and the Development of Thai Nationalism* (1978).

The author has made very good use of Thai sources. The author also makes some interesting, if undeveloped, comments on the connection between Thai political thought and that of China and perhaps Japan. I wonder if the author could expand somewhat on the thought put forward in footnote 7?

For the above reasons, I would recommend the paper be published. I do feel, however, that some revisions are necessary. I will take these up as I noted them in reading through the paper.

... The author might take note here of theories of ethnicity with reference to the way in which Thai in the nineteenth century were rethinking *chat* with reference to “language” (*phasa*) and shared ancestry. I would point here specifically to Charles F. Keyes, “Toward a New Formulation of the Concept of Ethnic Group,” *Ethnicity* (1976), 3: 202–213 which contains consideration of how *chat* is used in contemporary Thai social science...

Finally, it would appear that the author is not a native user of English. I would suggest that she/he have the paper edited by someone who is before submitting it in the revised form to JAS.（下線は筆者）

第2査読者（抜萃）

On the positive side, I’d note the following. 1) It’s on an important and controversial subject—i.e. the dating and character of “official nationalism” when it first appears in Thailand. The author takes (if not always consistently) a rather new perspective. Existing scholarship on the subject divides into two camps: a) traditionalist conservative, arguing for continuity, i.e., that Chulalongkorn and Vajiravudh were ‘nationalist’ patriots like all Thai kings; b) liberal and left-wing, arguing for a historical ‘break,’ i.e., that Thai nationalism was a creation of Vajiravudh, and that it was a rather shady nationalism designed to shore up a shaky monarchy. The writer generally adopts the second view, but reads this sort

of self-interested nationalism back into Chulalongkorn's reign. 2) It uses an interesting variety of Thai-language sources. 3) It seems almost certainly to have been written by a Thai, and I'm all in favor of the JAS publishing more articles by Asian scholars.

On the negative side, I'd note the following: ...2) There are a number of obvious, important sources of which the author seems unaware, and which he or she should in some way or other confront. These include ... and, I feel slightly embarrassed to say, two texts of my own (the sections on Thailand in *Imagined Communities*, and the long essay "Studies of the Thai State: The State of Thai Studies.") There's no special reason why the author should agree with all or any of the above, but they should be taken into account; and if they were the text would be more convincing and sophisticated than it now is...

The most interesting parts of the article are those where the author discusses, with some nice examples, the semantics—and the semantic development—of key terms in the official state ideology, such as *chat* and *banmuang*. I'm not convinced he/she has got the analysis right, but I'm probably prejudiced on this score; nonetheless it is a significant development.

If I had to make a decision one way or the other, I'd be inclined to encourage the author, but turn down this draft. The best ground for doing this is clearly that important sources haven't been consulted and confronted. It's possible that the author really has never heard of these sources; if so, one can be optimistic that after absorbing them a new draft of this text could very well be publishable. (下線は筆者)

第3 査読者 (全文)

You asked me to read and report on an article entitled "The Origin of Thai Official State Ideology." My advice is that you should not encourage the author to expect ever to see the article in print in English.

In addition to being very poorly organized and written (so far the quality of the English is concerned) the article is analytically and methodologically shallow. In some places, the reader is not sure what the author is saying and in others we cannot be sure the author is sure what s/he is saying. The crux of the argument centers on the origins and changing meaning of the word *chat* meaning supposedly "nation" at least most recently. The evidence put forwards by the author is not convincing at least to this reader as to the changes in the meaning of that word (or to whom) in the 1880s and 1890s. The argument is too diffuse to figure out exactly what is being alleged and certainly the few quotations (in very poor translation—or worse in synoptic form) are not convincing. Neither is evidence presented to show who and how many people (a few intellectuals? a few leaders? the educated public?) might have used the word in the way the author suggests.

The other half of the argument deals amorphously with kingship and ideas of it in the time period in question. Here the author shows him or herself insufficiently familiar with the literature on the subject to be worth trusting. There has been a lot written about the Buddhist idea of the elected king but *exactly* how was the idea referred to at different points in nineteenth century Siam? I have a strong hunch that the idea though it had been around for a very long time only came to real prominence in Siam in the reign of Rama I (1782–1809) and began being stressed by King Mongkut for reasons peculiar to

him— in part perhaps as his counter argument to American missionaries who talked about Abraham Lincoln and so forth.

In general the argument presented in this piece is completely unconvincing. To add to the problems with the article, the author has not followed standard scholarly rules regarding citation of materials. And I personally would not trust the author's translated quotations from Thai. (下線は筆者)

以上から分かるように第2査読者は、投稿者にも示された文書で自らの身元を Benedict Anderson (1936-2015) であると明らかにしている。彼は一部の人には人気の高い東南アジア研究者である。私の論文に最も好意的な評価をした第1査読者は、第2査読者ほどには身元を明示していないが、Charles F. Keyes (1937-2022) のかなり特殊な論文を挙げているところから見て、カイズ自身だと思われた。彼は2001年のAASの会長である。第3査読者は、その度を失したような怒りようから見て私が論文で正面からその所説を批判した人物、David K. Wyatt (1937-2006) であると見て間違いない。彼は1993年のAAS会長である。

他の査読者は2-3頁の分量の報告なのに、第3査読者のものは僅かに半頁に過ぎず、査読者に求められる冷静さを失した、怒りと投稿者に対する侮辱が沸騰したような感情的な文章である。当時英米における19世紀のタイ史の研究者はコーネル大学のワイヤットなど極めて少数であった。ワイヤットは代表作であるタイ史 (*Thailand: a short history*, Yale University Press, 1984) の著作の中で、タイのナショナリズムの始まりを20世紀のラーマ6世時代と説いているのに対して、私の論文はそれを正面から批判し、資料を示してタイナショナリズムの起源は1880、1890年代にあることを証明したものである。上記第3査読者の唯一内容あるコメントは、1880、1890年代にはタイのナショナリズムは生じていないという反論である。これからみて、感情的に反発した第3査読者は自説が批判されたワイヤット以外には考えられない。普通に考えれば、自分に直接鋒先が向けられていない場合は、感情的になる理由はなく、心に余裕をもって他の査読者と同様に例を挙げて冷静に実のあるコメントするものであろうから。

以上から明らかなのは、double blind という査読の原則は虚構に過ぎず、査読者のなかには、公然と自分の名前を明らかにし、投稿者に自分の著作を引用すれば採用されるかのような期待を抱かせる者がいるし、あるいは、自分の著作を批判している論文の場合は採用されることがないように悪罵の限りを尽くして採用を阻止しようとする者がいるのである。査読の実情から導き出される賢明な処世術は、査読者になる可能性のある全ての人の業績を、好意的に引用した論文を書くことである。但し、この処世術を実行して書かれた論文には、どんな一流ジャーナルに採用されていても、何を言いたいのか判らないものもある。

Benedict Anderson が自ら推奨している彼の著作、*Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*, Verso, 1983 は、私も読んでいたが、評価していなかった。理由は、彼がタイについて書いている部分は、事実誤認が多いからである。彼が、*The spectre of comparisons: nationalism, Southeast Asia, and the world*, Verso, 1998 の中でタイについて書いている部分の間違ひは更に酷い。

事実を基礎とした一般化や理論的説明は、根拠となる事実に多数の間違ひがあれば、仮に一般化や理論がもっともらしく聞こえたとしても、単なる空論に過ぎず、学術上の価値はない。

私が、小さな事実の間違いを針小棒大に批判していると誤解されないように書いておくが、私が専門としているタイ近代以降の歴史に限って見ると、前掲のワイヤットの主著 *Thailand: a short history* の近代以降の部分は、平均どの頁にも1箇所以上の間違いがある。アンダーソンが上述の2著でタイ近現代史について書いている部分は、ワイヤット以上の頻度で間違いがあるのである⁶。

アメリカ人のタイ研究の質には、問題がある人も少なくない。私は、「北タイのカリスマ僧、クルーパー・シーウィチャイの1920年バンコク召喚事件の史実をめぐって」(『アジア太平洋討究』42号、2021年11月)で、Katherine A. Bowieのクルーパー・シーウィチャイに関する、*Journal of Asian Studies* Vol. 73 no. 3 (Aug. 2014) 掲載論文には、間違った事実を根拠としているために、議論に重大な誤りがあることを指摘している。Bowieは米国アジア学会(AAS)会長を2017年に務めている名のある研究者のようであるが。

さて、私は書き直して再投稿を促すJAS編集者の手紙に従い、私は査読者が挙げた著作を殆ど加えた。不本意ながら、アンダーソンのものも加えた。カイズの論文はどこにも見つからず、田辺繁治氏に頼んで入手した。しかし、英語のチェックをしてくれるような知り合いはおらず、自分で少々手を加えただけで再投稿したが、最終的に不採用となった。

どうしようかと考えていた1987年前半、幸運にも二人のアメリカ人タイ研究者が、アジ研に私を訪ねてきた。E. Bruce Reynolds氏とWilliam Swan氏である。両氏は日タイ関係史を研究しており、来訪目的はアジ研で何か共同研究ができないかという打診であった。その際、私が例の論文の話をする時、ブルースさんはさっさと編集してくれた。

両氏とは、以来長い付き合いになった。断っておくが両氏の日タイ関係研究は、前に批判したワイヤット、アンダーソン、ポウウィーとは異なり、確実な資料に基づく堅実なものである。ブルースさんは、1994年に *Thailand and Japan's Southern Advance, 1940-1945*, 2005年に *Thailand's Secret War: OSS, SOE, and the Free Thai Underground During World War II*, Cambridge University Press を刊行した。日本に留まったスワンさんは、アジ研出版物の英文編集にも関わり、私が調査費を獲得できるようになった2000年前後からは、私の論文の英訳もお願いした。

さて、ブルースさんが英語を編集してくれた私の論文は、*Journal of Southeast Asia Studies* (現在はケンブリッジ大学出版会、当時はシンガポール国立大学が編集)に投稿した。一字一句も修正を求められることなく直ちに採用され、1988年前半号(19巻1号)に掲載された。

この英文雑誌は、東南アジア地域研究の代表的雑誌だが、私以前に同誌に独立論文を掲載した日本人は二人のみである。即ち、第1巻2号(Sept. 1970)の明石陽至氏(1928年生)の戦時日本のマラヤ華僑に対する政策論文と第12巻1号(March 1981)の酒井忠夫氏(1912-2010)のマレーシア・シンガポール華僑の宗教論文のみであった。この他には、京都大学東南アジア研究センターの日本人研究者特集として、市村真一氏を編集責任者として同センターの8名の短い論文が第6巻2号(Sept. 1975)に掲載されたことがあったに過ぎない。

幸い私の論文は好評で、Nicholas Tarling ed., *The Cambridge history of Southeast Asia Volume 2*,

⁶ 一方、Chris Baker, Pasuk Phongpaichit, *A history of Thailand*, Cambridge University Press, 2005 は、事実の間違いは皆無に近い。

Cambridge University Press, 1992 p. 322 で、Benjamin Batson (1942-1996) に、“An earlier, more indigenous lineage for Thai nationalism is posited in Eiji Murashima’s somewhat iconoclastic “The Origin of Modern Official State Ideology in Thailand,” JSEAS 19, 1 (1988)”と評価された。

当時は、このレベルの論文は、今後もいくつも書くことができるだろうと思ったが、その後の30余年において、この論文以上に引用される論文は書くことができず、私にとっては代表作となった。

次に、モノグラフの査読で経験したことも書いておこう。そのうちの一つは不愉快な経験であるが、査読の倫理問題と技法との参考のために書いておきたい。

2000年に、京都大学東南アジア研究センターからモノグラフの査読を頼まれた。この研究センターの一教員がアメリカで教えていた時代の教え子の博士論文で、その論文を大変高く評価されているようであった。私は、査読を頼まれる以前に、その博士論文を読んでいたが、印象は薄く質の高い論文とは思わなかった。査読を頼まれて真剣に読んでみると、著者はタイ近代政治史の知識が不十分でとんでもない間違いが沢山あった。例えば副首相やいくつもの大臣職に就いた **นายวรรณภักดิ์** ของ **นาย** (ナーイ) が、六世王が与えたバンダーサクであることを知らず、Mr. と誤訳するなど。私は1ヶ月もの貴重な時間をかけて230以上の間違いを指摘すると共に、自著についても言及した。モノグラフの査読は、ダブルブラインドではなくシングルブラインドであるから、査読者には著者名が開示されている。査読者が自著を挙げて間違いを指摘しているのであるから、著者にも査読者が誰かは自明のことである。

修正後印刷されたモノグラフを手にすると、私が言及した私のタイ語著作『シャム華人の政治』(Kanmeuang jinsiam, *Sino-Siamese Politics: Political Movements of the Overseas Chinese in Thailand during 1924-1941*) の英訳ではないかと思われるほどに無数に、私の著書から引用していた。しかし、何故か、著者は私が査読した元の原稿にはなかった、次の一節を印刷本で加えていた。

it is a pity that this data-rich work [Eiji Murashima’s Kanmeuang jinsiam] suffers from a persistent under- and mis- conceptualization, in particular Murashima’s narrowly-conceived political categorization of the pre-war Chinese in Siam into three groups: This blinkered vision leaves no room for the lookjin communists, i.e. This leads to a paradoxical feature of his research, namely, that it is empirically cognizant of, but conceptually blind to, the lookjin communists as a group. More importantly, it thereby completely misses the crucial political development associated with the lookjin communists at that crucial juncture... (Kasian Tejapira, *Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958*, Kyoto Area Studies on Asia No. 3, Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2001, p. 225)

私のタイ語著作から多数引用したので、面子を保つ為に意趣返ししたものか、無意味な言い掛かり、野卑な悪口を並べていた。彼の言う、中国系タイ人 (lookjin) のタイ共産党への参加と抗日活動は自明のことであり、何も彼が自分の新説の如く大上段に構えるほどの価値はない。私がこの点を詳しく書いていないのは、私の著作の範囲外であるからに過ぎない。

著者は査読者に恩義を感じるところか、最後の機会を使って査読者を貶めようとしたかの如くである。著者が書き直した後印刷に入れる前に、京大側が査読者である私に再度見せてくれていれば、私は著者の不埒極まる行為を批判できたはずだが、そのような機会は与えられなかった。

私は、著者の行為は査読の約束事に対する重大な違反であると考え、京都大学東南アジア研究センターに同書の販売停止と回収を要求した。しかし、彼らの回答は、何ら問題はないというものであった。

このモノグラフ査読の苦い経験から、私は査読が丁寧過ぎたことを反省した。

著書の内容に責任があるのは、著者自身であり、査読者は何ら責任を負うものではない。故に査読者が、著者の間違いまで一々指摘してやるのは、親切過ぎるのである。

査読有りの一流地域研究誌にも、議論の根幹に関わる部分で明白に間違っただけが書かれていることもある。例えば上述した、文化人類学者 Katherine Bowie の *Journal of Asian Studies* Vol. 73, no. 3 の論文のように。査読論文だから論文は品質保証されていると考えることはできないのだ。

モノグラフの査読は、時間がかかるので、引き受け手は少ないようである。京大の査読は謝金が払われた。その後2回、Cambridge University Press などの依頼で査読を引き受けたが、京大の轍を踏まないように注意した。この権威有る英国の大学出版部でも査読者を探すことは大変らしく、好きな本何冊かを無償で差し上げるという程度の代償があった。

この他にも、私の投稿論文でも、面白い経験をした。

私が投稿した英文論文が、何ら修正を求められることもなく採用され、2005年にロンドンの SOAS 編集の *South East Asia Research*, 2006年にケンブリッジ大学出版部の *Modern Asian Studies* に掲載された。これに気をよくした私は、カンボジア共産党でポルポトに次ぐ No.2 の地位にいた Nuon Chea (1926-2019) のバンコク時代をテーマとした論文を、上記の *South East Asia Research* に投稿した。この論文の資料は、2003年8月12日にパイリンにヌオンチアを訪問して行ったインタビューと彼が1940年代にタマサート大学在学中に共産党の活動を共にしたタイ人数名とのインタビューを主としたものである。私は調査の難易度及び資料の貴重さから見て、私の調査研究の中でも最も価値のある論文の1つであると考えている。インタビュー時、ヌオンチアはタイ国境から数百メートルしか離れていないカンボジア側の竹林の中の高床式の家に、夫妻揃って孫と一緒に穏やかで幸せそうな老後を送っていた。彼が逮捕され裁判に掛けられたのは、2007年9月である。

私はまず、日本語で、「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942年-1950年)」『アジア太平洋討究』11号 (2008年10月) を書き、これを英訳して、*South East Asia Research* 誌に投稿した。編集者から返ってきた回答は、この論文のスタイルは、紀行文であり学術論文ではないので書き直すようにというものであった。Nuon Chea は、当時外部世界には謎の人物であったので、如何に彼にアプローチできたかを詳述することは、Nuon Chea に関する情報としても価値があり、更に論文の信憑性を高めることになるのだが。私は、馬鹿馬鹿しくなって返事をしなかった。よく見ると、同誌の編集者も編集委員も2005年時のメンバーではなく入れ替わっていた。私は英訳を『アジア太平洋討究』12号 (2009年3月) に掲載して終わりにした。

私の英訳論文が早稲田大学リポジトリに掲載されるや否や、私の書いたものは紀行文だという *South East Asia Research* 誌の回答と同趣旨の批判がネット上に現れた。書いた人物は、2005年に私が *South East Asia Research* 誌に掲載した論文の中で、彼の間違いを指摘した人物であった。彼は、2008年当時は *South East Asia Research* 誌の編集委員にも名を連ねていた。私には、彼が自分の間違いを指摘されたことを根に持って、編集委員の立場を利用して復讐したとしか思えなかった。

以上、英文ジャーナル、モノグラフの査読は貴重な経験であった。

名のある学者でも、査読者の立場で、自分の著作の引用を増やすためには、努力するものだとことを知った。彼等の知名度もこのような査読者の立場を利用して、雪だるま式に増大した可能性もある。また、査読者は自分の著作を批判している論文は、できるだけ採用されることがないように足を引っ張って、保身を図る。一方、賢明な投稿者は、採用されんが為に、想定される査読者の著作を好意的に最大限引用する。その結果は、論旨とは無関係な引用が増加する。欧米人の東南アジア研究の著作は、日本人研究者の英文著作に比して引用数が桁違いに多く、研究上の価値は低いと思われるものでも、意外なほどに引用数が多いのはどうしてだろうか。その一因は、利口な投稿者が、査読者になる可能性のある人の著作は、極力引用して置こうとするからではないだろうか。

このように英文の文系ジャーナルの査読は、論文の価値を客観的、公平に評価し、論文の品質を保証するという本来の目的から乖離してしまっているように見えるのは、私の僻目であろうか。文系ジャーナルの査読の欺瞞性は、一定レベル以上の研究者には認識されている筈であるから、このような制度がネット時代にいつまでも存続できるとは思われない。論文の評価は、少数の査読者（peer reviewer）ではなく、全ての peer が review する時代になるのではないだろうか。

私は2008年を最後に、英文ジャーナルへの投稿は止め、英文論文も『アジア太平洋討究』に掲載した。

アジ研の仕事として、1985年度に上記の海外共同研究に従事した他、既に獨協大学に転出していた萩原宜之氏（1925-2000、1977-1982年3月までアジ研理事）を担いで、ASEAN諸国の政治研究会を企画した。萩原氏のコネで、既に東大に転出していた加納啓良氏を始め、藤原帰一氏、田村愛理氏などにも参加をお願いできた。アジ研図書資料部の岩崎育夫氏、高橋宗生氏にも参加を依頼した。その成果は、1987年3月に萩原・村嶋編で『ASEAN諸国の政治体制』として刊行された。

2 回目の長期滞在、在タイ国日本大使館専門調査員（1987-1989）

外務省でタイを担当していた、私と同年の藤井昭彦（チェンマイ総領事で退職、満68歳で2020年7月3日逝去）さんの世話になって、在タイ大使館の専門調査員に採用された。

1987年6月に赴任した時の大使は、木内昭胤氏で、1988年半ばにはフランス大使に転じられた。次の大使は、岡崎久彦氏で半年くらい重なった。当時の大使館の幹部は、山下新太郎公使、竹中繁雄公使、浦部和好参事官らであった。バンコクの大使館には、殆ど全ての省庁から一等書記官クラスの出向者がいた。日本の各省庁職員の仕事ぶりや熱意、能力を比較するには、よい機会であった。私がいくつかの基準で分類した結果は、不思議なことに世間の評価と一致していた。

私は、大使館の屋根裏に近い3階に個室を与えられた。

2年間の在タイ専門調査員の時期は、総じて私の研究が歴史研究に向かう転機となり、研究生活上大変貴重な時間であった。

日タイ修好100年記念行事

着任間もない1987年9月26日に、日タイ修好100年記念行事が行われ、9月28日にはドゥシットターニーホテルの大広間ナパーライで日タイ100周年祝賀委員会主催の「日タイ関係の現状及び今

後の協力への道」と題したタイ語記念シンポが開催された。日本から来る予定の人がドタキャンしたとかで、私は代わりにシンポの論者に指名された。

リキット・ティーラウエーキン（1941-2016）というタマサート大学政治学部の教授（政治家に転身し1週間で終わった短命チャワリット改造内閣で副内務大臣に任じられた）も論者であった。彼は日タイ関係のおめでたいシンポで、所謂南京事件における日本軍の残虐さを滔々と述べた。海南島移民の二世で、バンコクの海南会館の顧問も務めており中国人アイデンティティが強かったので、このような発言になったのか、日タイ関係について語るだけの知識を欠いているので南京事件を話題にしたのかは知らないが、大変、場違いな話題であった。

タイ国の華僑五属（潮州、客家、広東、福建、海南）のうち、最も偏狭で闘争的なのは海南人のようである。五属の各会館の事務所を訪問して、お前たち日本人は中国で酷いことをしたと、文句を言われたのは、海南会館だけである。ある時、海南会館を訪ねると、どこかで見たような人がいる。1980年代にプラチャーゴン・タイ（タイ臣民党）という右派政党の党首サマック・ストラウエート（1935-2009）の右腕でありバンコク選出の同党国会議員であった人である。私はバンコクでサマックの選挙演説を10年近く追っかけたので、いつもサマックの横にいる、この人は見なれた存在であった。それにしても、どうして海南人の会館にいるのだろうか。実は、この人もリキット氏と同じような出身だったのだろう。

日タイ100周年記念シンポの話に戻ると、唯一の日本人論者である私は、南京事件については情報が錯綜していること、文化革命では何百万人も中国人が殺害されたのではないかとリキット氏に反論した。1970年代後半にはタイが共産化することを心配してアメリカに一時的に移民したこともある、リキット氏は文革の犠牲者が多いことは認めたが、南京事件は外国人である日本人が中国人を殺し、一方、文革は中国人の間の殺し合いに過ぎない。外国人が中国人を殺した方がもっと悪いと、訳の分からない論理を展開した。会場のタイ人から、誰が殺しても結果は同じで、死であるという道理ある介入があって議論は終わった。

私は、この学術上意味があるエピソードと所謂南京事件後のバンコク出版の抗日華字紙にも南京事件の報道がないことを、2012年11月に早大のアジア研究機構のシンポで紹介し、シンポの報告集の原稿にも書いたが、編集の過程で私の諒解を得ることもなく無断で削除されてしまった。出来上がった報告書を見て啞然とするばかりであった。早大の教旨の第一は、学問の独立であることを知らない人もいるのだ。

中国系タイ人の学者の中には、一部に過ぎないが、中国の代弁者の如き人もいる。2016年2月の訪タイ時、知り合いのS教授が、「中国は何千年の間、文明国であったから、南シナ海各地を中国人が通行したことは間違いなく、南シナ海が中国領土であることは当たり前だ」という趣旨の発言を何かのシンポで発言しているところがテレビニュースで報じられていた。

9月26日の日タイ修好100周年記念直後、日本公式訪問を中断して帰国されたタイの皇太子が日本での処遇を批判されるという大問題が生じた。私は指示を受けて、タイ人の知人（親族が王室関係の有力ポストにいる人や有力政治家の子息なども含まれる）や新聞記者に当たって情報を収集して報告書を作成した。また、任期の終わりの方では、タイの王位継承制度について報告書を作成した。

この時期は、戦後の日タイ関係史の中において、タイにおける日本のプレゼンスが最も大きかった

時期かも知れない。日本の無償文化援助により、大きなタイ文化センター（当時日本側は「タイ社会教育文化センター」と称した）がラチャダーピセーク通りに開館した。しかし、タイの一部建築家が、文化センターの建物がタイ風ではないと批判し、その中心はスメート・チュムサーイという末端王族の末裔であった。

私は、毎夕大使館の政務班（班長は山中誠氏）に顔を出すだけで、昼間は自分で車を運転してタイ国立公文書館や国立図書館（華字紙閲覧）で自分の調査に従事することができた。タイ国立公文書館を本格的に利用し始めたのは1988年からである。それ以前の1981年ごろから時々訪ねはしたが、当時は主に国立図書館の古い新聞の調査が中心であった。

この時の国立公文書館での調査は、主に1932年革命前後の政治史であった。そのうち政党政治に関する調査は、1991年3月、私のアジ研退職直前にアジ研の海外共同研究事業の一つとして出版された、*The Making of Modern Thai Political Parties* の第1章（Democracy and the Development of Political Parties in Thailand 1932-1945）となった。また、この時読んだ資料は、『ピブーン』（1996年）を執筆する際にも使用した。

前者は、タイの政党発展史に関する、初めての詳細な研究であると自負しているが、タイ人政治研究者は政党史に関心が薄く、やっと2017年になって、タマサート大学政治学部政治学科の少壮俊英プーリ・フーウォンチャローン Puli Fuwongcharoen 助教授『シャム立憲革命後の政党：無政党制の動態、発展、運命』（タイ語、タマサート大学出版会、2017年）が、先行研究レビューで最初に私の研究を取り上げて詳細に紹介している。彼は私の研究が議会外の王党派の政党結成の動き及び議会内の議員の政党法の提案という、政党結成を求める二つの動きについて、これまで利用されることがないか、殆ど利用されることがない一次史料を大量に用いた歴史研究であることを評価している（同書6頁）。しかし、まだ十分には提示されていない史実も少なくなく、かつ政党研究としての理論を欠いている（同書9-10頁）とも批判している。私としては、この論文を書くに際しては英文の政党論研究書の代表的なものには目を通し、1932年立憲革命後1945年までを no-party system という分類の例として説明しており、政党理論を欠いているとは思わないが、1991年の出版以来26年を経て、この作品にタイ人若手研究者がやっと関心をもってくれたことには感謝したい。

また、専門調査員時代に国立図書館4階所蔵の古い華字紙を読み始め、その後の華僑・華人インタビュー調査の結果も加えて、「タイ華僑の政治活動—5.30運動から日中戦争まで」（『東南アジア華僑と中国』1993年8月所収）という論文を書いた。

ラオス・ベトナム訪問

1988年3月初旬に専門調査員としてラオス、ベトナムに出張した。ラオスは13年ぶり、ベトナムは初めての訪問である。両国とも改革開放直後のこととて、停滞の中に何やら新しい動きが出始めたという時期である。ラオスの経験は『アジア太平洋討究』5号（2003年）に「ラオス社会の変貌と教育・仏教の現状」のタイトルで書いた。当時、ラオスには未だ1,000人規模のソ連の援助関係者がいたそうで、外貨商店では日本製電気製品などを購入するロシア人を目にした。2000年代にウィエンチャンの国家図書館を訪問した時には廊下に山積みされて大量のロシア語書籍が放置されていた。ハノイは町の中の長屋の2階などで小さな飯屋を始める自営業者が出てきた頃である。ハノイの

日本大使館は未だアパート住まいで、ホテルの米飯は割れ米の上、小石じゃりじゃり、ハノイからホーチミンに向かう飛行機の中で出されたパンも小石混じり、買物をすれば包み紙は1950年代の日本にもあった、灰色か薄茶色のヨレヨレとした代物であった。ハノイにはエレベーターがあるホテルは一つしかないとのことであった。ハノイでは同地の専門調査員の五島文雄さんに大変世話になり、ハノイから車でタイ族の村にも案内してもらった。

車で全国旅行

1980年代後半のタイは、近代史上最も平和な時代であった。プルーム政権下で内政上の対立も少なく、共産党ゲリラの残党は投降して、南タイのマレー系ムスリムの暴力的独立運動もなかった。ラオスやカンボジアなど近隣との国境紛争もなく、タイの全ての地域を安心して旅行することができた。私は一人で車を運転して、共産党の元根拠地の一つであったピサヌローク・ロムサック間のカオコー、プーヒンロンカオを旅行したり、ラオスと国境紛争があったピサヌローク県のロムクラオのHmong族の村、南タイ最深部の各県を訪ねた。

当時のタイには、観光案内書は未だ少なかったが全国各県の名所旧蹟を1冊に纏めたガイドブックを持って、車で全国を回った。山中にあるような全国の遺跡も殆ど全てを訪問することができた。ローイ県プーカドン近くの直線の路上では急に脇から水牛の群れが現れて車を取り囲まれ、北タイのナン県の山中の砂利道でブレーキを掛けたところ、車が半回転して谷に落ちそうになったりしたが無事に終わった。

2年間の在タイ生活後、1989年7月にアジ研に戻り、元通り地域研究部（旧調査研究部は1987年4月に地域研究部と名称変更）に配属された。当初の同室者はベトナム経済研究の竹内郁雄さん（のち東京農工大学教授）であった。彼もまた、実に気持ちのよい同室者であった。

私は、再び、萩原宜之氏と相談して、私を主査としてアジ研の1990-91年度事業としてASEAN政治研究会を復活させ、首藤もと子氏、小林正弥氏にも参加をお願いして、『ASEAN諸国の政党政治』（1993年1月）を刊行した。また、前述のように1990年にはアジ研の海外共同研究事業を企画し、*The Making of Modern Thai Political Parties*の第1章（Democracy and the Development of Political Parties in Thailand 1932-1945）を執筆した。

私は1991年3月でアジ研を辞め、成蹊大学文学部に転じた。ASEAN政治研究会は、岩崎氏が引き継ぎ、最初の官僚制の研究会のみ参加したが、その後はアジ研との関係は全くなかった。特殊法人アジア経済研究所は、1998年7月1日にジェトロに統合されて消滅した。翌年には千葉の幕張に移転したそうだが、私は、現在まで訪問する機会がない。

アジ研を辞めた時は、私は地域研究部の研究主任（管理職ポストではない）で、国際交流室のアドバイザー兼務であった。辞める前の3ヶ月間ほどは毎日、図書資料部のマイクロフィルムリーダーで手持ちのプラチャーチャート（1930年代）を紙にコピーした。

なお、ASEAN政治研究会でお世話になった藤原帰一氏の紹介で、岩波書店現代アジアの指導者シリーズで萩原宜之氏が『マハティール』、私が『ピブーン』、岩崎氏が『リーカンユ』を書くことになった。

第二次大戦期調査のため邦人生存者インタビューとアーカイブの利用開始

話は前後するが、1989年7月に2年間の専門調査員の任を終えて帰国した。帰国後、私の関心は、日タイ関係の歴史、とりわけ第2次大戦期の日タイ関係に向かった。更に、1991年4月に成蹊大学文学部に移った後は、アジ研時代のような研究上の制約がなくなったので、私の研究は完全に歴史研究にシフトした。

1990年から私は、外務省外交史料館（六本木）や防衛庁戦史室図書館（恵比寿）など、日本のアーカイブ利用を開始した。同時に第2次大戦期に在タイした軍人、情報関係者、経済人などにインタビューを開始した。戦後45年を経た時期で、終戦時に中堅であった人々の多くが未だ存命であったが、時間的にインタビューの最後のチャンスであり、私は対象者を全国に訪ねた。

アジ研に在職していた1990年2月から翌年1月までに、私がインタビューできた主な方々は次の通りである。駐タイ日本軍司令部の小西健雄大佐、富永亀太郎大佐、矢野正俊大佐、原寿雄少佐、駐タイ憲兵隊の堀井龍司中佐、岩崎禮三少佐、その他に貝沼研造、吹野憲昭などの各氏、情報関係の小田正身、逆瀬川澄夫、大場啓などの各氏、日タイ文化研究所の平等通照氏（1903-1993）、三菱商事バンコク支店長の新田義實氏（1894-1992）、タイ人ではソムワン・サラサス氏（ร.อ.สมหวัง สารสาส）、最後まで生き残った人民党員ウィラート・オーサターノン氏（พ.ต.วิลาส ไอสถานนท์）などである。これらのインタビューの成果の一部は、その後の論文で使用した。上記インタビュー調査から35年以上を経て、早稲田大学アジア太平洋研究センター研究資料シリーズ No. 7として『堀井龍司憲兵中佐手記、タイ国駐屯憲兵隊勤務（1942-45年）の想い出 付録 18 方面軍参謀原寿雄少佐手記』（2017年）、同 No. 8として『天田六郎氏遺稿「シャムの三十年」など』（2019年）を刊行した。平等通照氏のもは、『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者、1888-1945』の第13章に詳しく書いた。未だ印刷できていないものは、新田義實氏のバンコク時代の日記である。新田義實氏は仕事柄かタイの政治家、経済人との付き合いも深く、また日本の大使以下の外交官、軍人とも交流があり、タイ人、華僑などへの政治工作などを依頼されたこともある。新田日記は第2次世界大戦期の、日タイ関係を知る貴重な資料である。

タイで諜報を担当した憲兵や機関などの数人からは、タイ人と同じようにタイ語はできるが、タイに忠誠心をもっていない異民族を、如何に諜者に使ったか、タイの大臣クラスにどう食い込んだかなど、興味深い話しも聞いた。

成蹊大学文学部教養東洋史担当（1991-1997）

40歳になる1ヶ月前の1991年4月に成蹊大学文学部一般教養東洋史担当の助教授に採用された。

アジア経済研究所のベトナム研究者の木村哲三郎氏（2017年1月17日に満83歳で逝去）は、東大でフランス語の語学クラスが成蹊大学文学部教養主任の細井先生と一緒にあった。そのご縁で、細井先生が教養の東洋史専任教員を探さねばならなくなった時に、木村さんに相談し、木村さんから私に打診があったものである。私はその前から、同大学文学部の柳井道夫先生に誘われて、同大のアジア太平洋研究センターの研究会に参加していたから、柳井先生から細井先生に何かの話があったのかも知れない。

成蹊大学は中堅大学であるが、三菱系企業がしっかりした経営を行い、職員の質は高く、教員の待

遇も良かった。とりわけ、35 m² という広さの個人研究室をもつ新研究棟は魅力的であった。私は、この研究室に多数の書架を入れて貰い、当時日本で所蔵していたタイ語資料の殆どを収納することができた。成蹊大に就職した当初の文学部長は、メディア史研究の大家で、東大名誉教授内川芳美先生(1926-2004)であった。先生の寛大な庇護の下で、快適に過ごすことができた。

文学部の玉に傷は、研究をしているようには見えない古参教員の中には新入りをいじめて楽しんでいるような御仁もいたことである。アジ研の動向分析部でも同様の雰囲気を感じた。

私は文学部、経済学部、法学部の一般教養の東洋史を担当し、大声で授業をするので相当の運動量があった。あまり専門的研究をしているようには見えない専門科目の教員の中には、般教(パンキョウ)と露骨に軽んずる人もいたが、研究に専念するためには教養担当の身分は理想的であった。学生の相手をしなければならないゼミもなく出席義務のある専攻の会議もなく、授業以外は、時間の余裕があった。

1年のうち授業のない5ヶ月ほどはタイで調査することが可能であった。王宮前のタイ外務省図書室に所蔵されていた第二次大戦期及びタイ仏印紛争期の外交文書の閲覧はアジ研在職時の1990年から開始したが、成蹊大学に移って本格化し1991年から足掛け3年、正味1年を掛けて読み尽くし重要なものは64冊のノートに筆写した。なお、この文書は20年ほど前にタイの国立公文書館に移管されたが、同公文書館は今日に至る迄インデックスを完成させず、従って公開していない。

1990年代初めは、バンコクの交通渋滞が最悪であった時期で、外務省の平職員の中には、渋滞を避け、かつ外務省敷地内に駐車場を確保するために、早朝4時位には自宅を出て、6時前に外務省に到着して、車の中で食事や髭剃りをしている人が何人もいた。彼らは、仕事時間になるまで、6時過ぎから図書室で新聞を読むので、図書室も早くから開いていた。私は7時前には図書室に到着して前の日に出して貰っていた外交文書を閲覧し、16時30分の閉館時間まで読みながら筆写した。

閲覧に丸一年という長期間を要した理由は、一般利用者は複写禁止であったからだ。しかし、大使や外務副大臣を務めたコンティー・スッパモンコン(กนต์ธีร์ ศุภมงคล)などは、私が利用した期間中にも何回か図書室に現れ必要な文書を一抱えにして借り出していた。因みに、コンティーはスクムウットの一等地にコンドーを建てて貸している大地主だが、1992年3月にそのコンドーの最上階に住むコンティーにインタビューの約束をして訪問したところ、決して部屋に通さず1階の蚊が飛び回るテーブルの前で話しをして追い返された。戦中ディレックが駐日大使の時、彼はタナット・コーマンと共に書記官として東京に在勤した。タナット・コーマンにも1997年8月にインタビューしたが、30分の約束で、玄関先で話しをし、決して部屋に上げなかった。タイ人は上から下まで多くの人にインタビューをしたが、このような冷遇を受けたのは、この二人の元外交官だけである。

タイの外交文書は、細かなものまで、よく保存されているが、大国のそのように編集されて書籍として刊行されたことはない。国立公文書館所蔵のテーワウォン外相時代の1890年代(タイが独立喪失の危機に直面した時期)の文書は、薄い紙にペン書きなので、インクの部分は紙が劣化し、最初に開いた人だけは読むことができるが、この人の利用中に紙は細切れになってしまい、次の人は紙の破片の山を目にするだけとなる。近代タイの最大の危機の時代の貴重な外交文書が消えていくのは残念であるが、タイ人が外交史などに関心をもたないので仕方ない。タイ外交史の比較的信頼できる書物も、上記のコンティーの著作があるくらいである。

外交文書の中には貸し出した後、紛失したり返却されなかった文書もある筈である。例えば、私は古本屋で、戦中の外交文書原本とともにディレーク・チャイヤナム（戦中の外相、駐日大使、自由タイ）の駐日大使時代の業務日誌や *Thailand and World War II* のタイ語版（1966年）の草稿を段ボール3箱分購入したことがある。なお、ディレークの著作が自己弁解のため虚偽に満ちたものであることを、私は『アジア・太平洋戦争辞典』（吉川弘文堂、2015年）の435頁に書いている。

外務省図書室で収集した史料を用いて、私は、「日タイ同盟下の軍費交渉 1941～1944」（『東南アジア—歴史と文化—』21号、1992年）、「日タイ同盟とタイ華僑」（成蹊大学『アジア太平洋研究』13号、1996年）、「タイの歴史記述における記念顕彰本的性格」（『上智アジア学』17号、2000年）などを書いた。最後のものは“The Commemorative Character of Thai Historiography: The 1942-43 Thai Military Campaign in the Shan States Depicted as a Story of National Salvation and the Restoration of Thai Independence”のタイトルで英訳して、*Modern Asian Studies* に投稿して Vol. 40, no. 4 (2006) に掲載された。

タマサート大学政治学部国際関係学科の新進気鋭の講師ピーラ・チャローンワッタヌクンは、この論文を次のように評価している。

In 1942, the Thai army crossed the border into Burma. From the outset, Thailand's decision to join the war stemmed from Japanese pressure. Nevertheless, brilliant research by Eiji Murashima (2006), a prominent historian, contradicts the general belief that Thailand was forced by Japan to conduct a military campaign in Burma. In fact, according to Murashima, Japan was reluctant to assign Thailand's military operations, and the Burma campaign was an effort by Thai policy-makers who inexorably pushed forward an agenda to participate in the war. Although Thailand pushed forward the declaration of war against the Allied powers and cooperated as a Japanese ally, the Thai government later turned against Japan in *less than a year* of the alliance.

Thailand's wartime diplomacy and its subsequent survival from the severe punishments of the Second World War were viewed as a genius diplomatic masterpiece. The case study is often invoked to argue that bending with the tide in order to survive is a wise strategy. The flexible foreign policy approach fails to explain how policy choices and preferences were selected from aligning with and breaking from Japan. If the Japanese pressure and changing international structure factored in this case, why did the Thai formally align with the Japanese and why did the Thai leaders declare war on the British and Americans? And, as Murashima (2006) reveals, why did the Thais deliberately undertake the military campaign against Japan's wishes? How could a flexible foreign policy approach make sense of such choices? (Peera Charoenvattananukul, *Ontological Security and Status-Seeking: Thailand's Proactive Behaviours During the Second World War*, Routledge, 2020, p. 7)

1991年から2年間、アジ研の先輩である友杉孝先生（東大教授、1932年生）が、日本学術振興会のバンコク事務所長をしておられた。時々事務所を訪問して友杉先生から、バンコク都市調査や中国製陶器収集のお話をうかがった。また、帰国された後、沖縄での科研の会議にも招待して頂いた。

専門調査員として在タイした時に、タイの国立公文書館で収集した資料、タイの国立図書館で閲覧

し筆写した華字紙の記事、及び専門調査員の任期を終えて後、タイに数回調査に行った時に抗日活動に参加した華僑（特に劉茂雲氏など）とのインタビューを利用して、前述の「タイ華僑の政治活動—5.30 運動から日中戦争まで」（1993 年 8 月）を書いた。この論文は、初めて日本語ワープロ（一太郎）を使って書いた最初の論文である。

前述のように英語のワープロは、JAS に投稿した原稿を書くために 1986 年初めには使用した。未だ紙製の大きな 5 インチ FD で、保存量は限られていたが、いくらでも書直しができるので、タイプライターに比し大変便利であった。1987 年には同室の米倉さんに連れられて日本語ワープロを購入したが、画面に表示されるのは僅か 1 行だけであり、実用にはならなかった。1989 年 7 月に専門調査員を終えて間もなく、やっと画面で数行は読むことができるワープロが生まれた。ワープロは書直しが簡単であるばかりか、他のファイルからのコピーができ、書いた場所を忘れても、検索機能により直ぐに探し出すことができる。

それ以前は、手書しか方法はなかった。私は高校・大学受験時代に、右手の中指に大きな筆ダコができ、大学に入った後は小さくなったが、アジ研に入って書くことが増加すると再び大きくなった。鉛筆の持ち方が悪いのか、人差し指にも力が入り過ぎて、一日に 400 字詰め原稿用紙 20 枚も書けば鉛筆を押し当てる指の部位が痛くてなり、スムーズには書けなくなる。原稿の清書では一日最大 25 枚が限度であった。40 歳を過ぎると、大量の原稿を手書きすることは、相当の身体的苦痛を伴う。それ故、大著を次々に出す人には、執筆の物理的労力だけでも大変な畏敬を覚えたものである。自分の指ではあんなに大量の字を書くことはできない、と。そこに丁度、運良くワープロが実用化された。

ワープロを使うパソコンには当初容量に限りがあり、大きなファイルはいくつかに分けて保存しなければならなかったが、そのうちに大容量でも一つのファイルとして保存可能になった。かつ、簡単にファイル内の検索やファイル間の移動ができるようになり、ファイルの中に記録した資料などを探し出すのが極めて容易になった。

もし、ワープロが実用化されなかったら、私の研究の生産性は 40 代以降大幅に落ちたはずである。ワープロの出現により執筆の効率は、極めて向上し、時間が大幅に節約できただけでなく、加齢による記憶力の低下を補うことができた。更には、ネット検索が充実した 2010 年代には、従来のカタログ検索では決して行き着けなかった資料が、瞬時に見つかるようになった。これらによって、私の研究者生命は飛躍的にのびた。71 歳近い現在も、研究論文を執筆できるのは、ワープロ、パソコン及びネットのお蔭である。なお、メールは成蹊大学にいた 1996 年に、一部の教員がメールアドレスをもって使い始めたことを知ったが、自分で実際にメールを使うようになったのは、1997 年に早大に移ってからで、早大は総ての教員にアドレスを与え、パソコンも貸与していた。

大和銀行（現りそな銀行）アジア・オセアニア財団の研究助成を得て 1992 年 9 月と 93 年 7 月にイギリスの公文書館（当時は PRO）及び 1993 年 8 月に 1ヶ月以上アメリカの公文書館で資料収集も実施した。ロンドンの Kew Gardens の公文書館は、2017 年夏にも半月ほど再訪したが、名称は The National Archives と変更されていた。嘗ては部屋の間のドアは、手押しで重かったが、全て自動ドアに変わっていた。資料の請求はネット利用に変わり事前に請求しておけば到着時には専用 Box に準備されている。自分でデジタル撮影することが中心となり、嘗てのような紙コピーを頼む人はいない。

ワシントンのアーカイブの従業員の大半は黒人である。私が1973年夏にグレイハウンドバスの15日間周遊券で全米一周をした時、バスの中で横に座った人（多くは学生か黒人）に、積極的に話しかけて英語の発音をなおしてもらった。この時、黒人は皆親切で気持ちよくいろいろ教えてくれた。その経験から私は黒人に親近感をもっていた。ところが20年後の1993年8月にワシントンのアーカイブを訪問した時は、黒人たちのアジア人に対する態度は違っていた。1992年4-5月のロサンゼルス暴動もその現れかもしれない。アーカイブでは20個まで大きなボックスを一度に出してくれ、もし資料がdeclassifiedされたものならば自分で複写をすることができる。複写時間は、一人当たり一回30分であった。時間を計るのは黒人女性の職員であった。この人は、20分を過ぎたばかりの時にもう時間切れだと言って、私を追い払った。それが何回も続いたので、この職員は明らかに私にイヤガラセをしていると考え、その上司に差別的扱いを受けていると訴え、是正させた。別の黒人女性職員は、なかなか資料を出してこなかった。これにも何か悪意が感じられた。この時アーカイブで収集したものは、1941年開戦時の米・タイ関係及び自由タイに関する資料である。これらの資料も未だ利用されないまま、私の部屋に眠っている。

1993年9月12日にワシントンからロンドンに戻り、7月のPRO調査でも泊めてもらったSOAS留学中の南原真氏（のち東京経済大学教授）宅に泊り、翌日バンコクに発ったが、14日早朝飛行機の窓から一時間近く雄大なヒマラヤが見えた。

1994年1月には、ラオスのルアン・プラバーンを初めて訪問した。この頃はラオスの旅行は、ウィエンチャンの政府公認旅行会社を通じての旅行しかなかった。ルアン・プラバーンの市中は平家の木造家屋が殆どで、その多くは閉まったままで人が住んでいるようにも見えない寂れようである。それでも朝には七輪で飯を炊く煙が処々に上った。観光都市化以前の時期であった。

1994年3月半ばにチェンラーイのメーサーイよりビルマ側のターキーレックに入り、ここにバスポートを預けて、4日間有効のEntry Permitを貰い、ピックアップを雇い一車線しかない狭い道をMuang Len, Muang Phayakを経て7時間をかけてチェントウン（Kengtung）に到着した。雲南に通じる道路が建設中で到る処に削られた赤い山肌が曝されていたが未だ開通した箇所はなかった。狭い道では、雲南からビルマ、タイに貨物を運ぶ大型トラックにしばしばすれ違い、長い時間退避せざるを得なかった。タイ側からは、バンコクの仏具屋で売っている真鍮製の降魔像がピックアップで雲南側に運ばれていた。文革で仏像を破壊されてしまった西双版纳の寺院に、バンコクから来た仏像が代わりに安置されていることを、翌年西双版纳を訪問して確認した。チェントウンは、宵の口しか電気がなく、新月の夜中は漆黒の暗闇となった。

1995年3月17日-22日にはバンコクから昆明に飛び、西双版纳の景洪（チェンホン）を訪問した。私の初めての中国訪問である。この時にはバンコクで刊行された昆明、西双版纳のタイ語ガイドブックを利用した。中国でも既に国内観光ブームが生じているようで、予定表にない臨時便が次々に出発していた。この時は、外国人旅行者は公認のエージェントを通さなければ、旅行できなかった。

雲南省のもう一つのタイ族居住地である、同省最西端で盆地の中央をサルウィン河が流れる騰越を訪問したのは、2018年7月半ばになってからである。同地の盈江新城出身の、タイ族土司刀安仁調査のためである。刀安仁の孫娘が経営する宿で、タイ族の納豆を食べさせてもらった。

前述のように1997年1月には広州にタウィーさんを訪ねた。この時、香港も初めてゆっくり見学

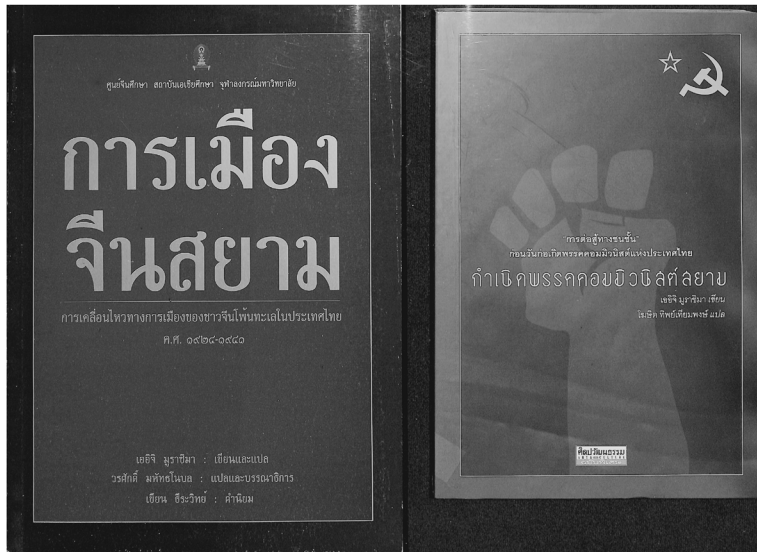
した。2001年4月初旬、初めて北京を訪問した。名所旧蹟（雍和宮など）の神仏像は文革で破壊され、代わりにプラスチックやゴム製のちゃちな模造品が据えられていた。市内のムスリム地区を訪ねると、再開発のため取り壊し中であった。

さて、1993年に「タイ華僑の政治活動—5.30運動から日中戦争まで」論文出版後も、私は在タイ華僑インタビューを継続した。1992年から94年にかけて、インタビューした人は、劉茂雲、陳英謹（成烟景）、藍東海、陳藝、黃志華、潘子明、林謙、林僧、吳鶴川（ชวัน อุรุโสภณ）、陳天賜、馮學仁、邱美勤、余軍英、ウドム・シースワンなどであるが、劉茂雲氏には10回以上会って、戦前戦後のタイの華僑社会について様々に学んだ。また後に述べる中国に帰った華僑共産黨員歐陽惠氏との北京、バンコクでのインタビューも劉茂雲氏の紹介で可能になった。

1993年日本語版に上記のインタビュー情報を加えた新版を、1995年11月に成蹊大学の私の研究室で、ウォラサック・マハタノーボン氏（Worasak Mahatthanobon, วรศักดิ์ มหัทธโนบล）と共にタイ語訳して、『シャム華人の政治』（1996年）としてチュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センターの研究叢書第1号として刊行した。（この点は、本誌掲載のウォラサック氏の回想「タイ国における中国研究：先導的タイ人研究者の回想」を参照）。

『シャム華人の政治』は、戦前までのタイ華僑の政治運動を国民党と共産党に分けて書いており、幸い今日に至るまでタイ研究者の華僑研究の基本書となっている。例えば、2020年にハーバード燕京研究所の、アジアの言語で書かれた近刊書を紹介する New Frontiers in Asian Scholarship サイトで同研究所客員研究員のマヒドン大学チュラーラック・プルムパンヤー講師が、私のもう一つのタイ語研究書『シャム共産党の生成』を紹介してくれた書き出し部分で次のように述べている。

One of the most prominent Thai studies scholars in international academia is Murashima Eiji from Waseda University. To understand overseas Chinese in Siam during World War II, one of



第3図 村嶋のタイ語著作2冊

Murashima's works, *Sino-Siamese Politics: Political Movements of the Overseas Chinese in Thailand during 1924-1941* (in Thai), is a must-read for researchers and students alike.

1996年春夏には成蹊大学の快適な研究室で『ピブーン』（岩波、1996年10月17日刊行）を執筆した。私の最初の単著であり、枚数も多いので執筆に半年を要した。疲れた時は、緑多い成蹊大構内と周辺を散歩した。『ピブーン』の資料の一つは、古本屋で収集した、1932年立憲革命関係者の葬礼記念本である。

成蹊大学で知り合い、今日まで交流がある研究者は、法学部のロシア研究者富田武さんである。成蹊大学正門前の食堂に18時過ぎに食事に行くと、時々富田さんも来ておられた。早大に移って、コミンテルンにおけるシャム共産党関係の資料を探しているとき、ロシア語とロシア資料に通曉されている島田顕さんを、富田さんに紹介してもらった。

テレビ出演

私が初めてテレビに出演したのは、成蹊大学に移った年の1991年9月18日である。NHK教育テレビ放送の「現代ジャーナル・シリーズ、アジアからの発言チャティップ・ナートスパー（タイ・農村経済学）」の聞き手として、である。ディレクターから大学教授らしく、もっと自然に質問ができないのかと注文を付けられた。チャティップ・ナートスパー先生 (ฉัตรทิพย์ นาถสุภา, 1941年生) は、チュラーロンコーン大学経済学部名誉教授で、タイの農村コミュニティ論、コミュニティ文化論、インドのアーホームや中国のタイ族研究などで名がある。専門調査員として在タイして以来、今日まで私が最も頻繁に私邸を訪問しているタイ人である。

1992年5月に、前年のクーデターでチャートチャーイ民選政権を倒した陸軍司令官のスチンダーが首相に選出されたことに反発する国民の抗議集会が盛り上がった。軍部の弾圧により多くの死者が出たが、最後は国王の調停で収拾した。この時は、私は次のように日本テレビを除く東京のテレビ局5局に出演する機会があった。

5月18日（月）22時、テレビ朝日ニュース・ステーション（司会、久米宏、小宮悦子）

5月21日（木）22時、テレビ朝日ニュース・ステーション

5月21日（木）23時、テレビ東京サテライト（司会、小池百合子）

5月23日（土）10時-11時半、フジテレビ Week

5月24日（日）9-10時、NHK 政治討論会（外務省谷野アジア局長らと）

5月24日（日）18時-19時、TBS 報道特集（司会、蟹瀬誠一）

5月25日（月）22時、テレビ朝日ニュース・ステーションで、同日16-17時にVTRを撮ったもの放送

テレビをあまり見ていない私は、朝日テレビのニュース・ステーションに初めて出た時、小宮悦子氏の顔も判らなかつた。彼女を、コピー取りのアルバイトの人だと誤解して、ご機嫌を損じたかもしれない。この時は、何を話すかを打合せしたのち、急に話す内容が不安になり、話す予定をメモにした。しかし、このような準備は却って口調を固くして、ニュースを読むような感じになり、自然にしゃべっているようには見えないことが分かった。

出演者を、最も At Home にすることがうまかつたのは、テレビ東京のワールドビジネスサテライ

トのメインキャスターの小池百合子氏であった（コメンテーターは立教大学教授の斎藤精一郎氏）。この特別な才能によって彼女はその後政治家として成功したのかもしれない。テレビ撮影では本当に眩しい、強い照明が顔に当てられる。ふと横を見ると、小池さんの顔一面に小皺が浮き立っていた。

逆に不満を覚えたのは、TBS。少々テレビ出演にも慣れて、他の局でやる事前打合せがないので、放送前にどういう主旨で話せばよいのでしょうかと尋ねてみた。その番組の担当者は、「ははは、この人、何をしゃべればいいのか聞いている」と嗤った。無礼千万である。フリーハンドでしゃべってくれと答えればよい所を、このような対応である。この若い人は何か思い間違いしているのではないか。世間とズレたテレビ人の高慢さを実感した。

1986年のフィリピンの黄色の革命以後の一時期、テレビのアジア報道では所謂専門家が出演してコメントするスタイルが普通になった。フィリピンのニワカ専門家だが、落語がうまい人が出て、評判がよかった。また、1992年のタイ報道でも、学術的に見てはどうかかなと思う、にやけた表情の人が、受けがよかった。

注意してテレビの出演者を観察して見ると、日常生活の中ならば気持ち悪いと感じるくらいに作り笑いをしていることがわかる。テレビには、寧ろ、にやけ顔の人が最適なのかもしれない。テレビで、コメンテーターとして話すことができる時間は最大限でも数分にすぎないので話しの内容よりも、スマイル、声、話し方などが重要なようだった。

また、1992年のタイの5月事件時には、全ての全国紙にコメント等で私の名前が出た。未だインターネットはない時代であったが、ファックスでのやりとりが可能であり、電話で話したことを基に記者が原稿案を作り、ファックスで内容を確認し合った。

1992年の6月にテレビに出たためか、1992年秋の経済学部、法学部の東洋史の授業は、学生の受講者が800人にも増え、答案読みに苦労した。

早大アジア太平洋研究科（1997-2022）

1996年初夏、鹿児島大学で開催された東南アジア史学会の研究大会で、後藤乾一先生にお会いした際、早大に新設されるアジア太平洋研究センター・大学院アジア太平洋研究科に移ることを勧められた。その冬、早大のアジア太平洋研究センター創立委員会の前で、一応自己紹介と研究紹介を行った。成蹊大学では、1997年4月から1年間のサバティカルが決まっていたので、何ら迷惑を掛けることなく退職できた。

ところが、早大のアジア太平洋研究センターの設立手続は、学内にあった反対のために遅れ、設立は1997年7月1日にずれ込んだ。7月になって、4月に溯って早大教授採用の辞令をもらった。当初、アジア太平洋研究科で教える専任教員の所属はアジア太平洋研究センターであり、センターの教授会で人事等も決まった。当初のセンター長は、旧システム科学研究所の所長が続投していた。当時早大執行部は教員定年を65歳にすることを提案し、教員の反対で取り下げた時であったが、ある日の教授会で、この所長は教員に向かい、この職場は激職だから65歳まで生き延びる人はいないだろうという趣旨の発言をした。ここまで言われて黙っていることはないだろうと思って、私は、その場で所長に抗議したが、後に続く教員はおらず、中には所長の肩をもつ人さえいた。頼りにならないこと夥しい。しかし、会議後に国際関係の教員数人がよく言ったとソバを奢ってくれた。

アジア太平洋研究科は、国際関係専攻と国際経営専攻の2専攻からなり、国際関係専攻は旧社会科学研究所、国際経営専攻は旧システム科学研究所を母体としていた。後者の方が教員定員数は多かったが、序列は国際関係、国際経営の順であり、博士課程まで開設できたのも国際関係専攻のみであった。しかし、センターを牛耳っていたのは国際経営の何人かの教員であった。これらの人達は、序列が国際関係の後に来るのが不満なようで、ある日会議資料も含めて、全ての順序を、国際経営を前、国際関係は後に置き換えた。当時国際関係の専攻主任であった私は、強く抗議して元に戻させた。彼等は、その頃早大本部が奨励し始めた科研費獲得には重要性を与えず、常々国際関係の教員も企業からの研究費や助成金を獲得してくるよう迫った。ビジネスと無関係の研究をしている者は大いに面食らった。一方では、私が中心になって作った論文博士規則を利用して、年2回の博論提出日には必ず1-2名の国際経営専攻の博士号を持たない教員に論文を提出させて博士号を与えることに余念がなかった。経営の教員が国際関係の博士号をもらって、どのような箔が付くのかは疑問だったが。最終的に国際経営は2007年に、アジア太平洋研究科から飛び出して行った。センター創立から10年経った時である。

私は、早大就職時、成蹊大に置いていた資料（段ボール200余）を旧社会科学研究所に運び込んだら、段ボールを積んだだけで部屋が一杯になってしまった。やむを得ず自宅近くのマンションの一室を借りて収納した。以上のような研究室事情や国際経営からの圧力などで、当初は早大の良さが余り見えなかった。

定年が近くなった今では、早大の良さがよくわかる。何と言っても70歳定年がよい。私の65歳からの5年間は充実してよく仕事ができ、それに大規模大学は、いろいろな点で余裕がある。アジア太平洋研究科のある19号館の立地は、早大の中で最も中央図書館に近く、常時図書館を利用した私には大変好都合であった。早大図書館は、関東大震災で被害に遭っていないこともあって、古い雑誌、書籍が比較的良好に保存されており、新聞などのマイクロフィルムの所蔵も多い。それに、何よりも2014年頃にILLのサービスが格段に充実した。アジア太平洋研究科には、多様な国から来た留学生がおり、彼らの支援を受けることで私の研究は、幅が広がった。いくつかの研究は、アジア太平洋研究科だから可能になった。

早大に移籍した後も、私の調査研究は、インタビュー調査とアーカイブでの文献調査である。

1997年に成蹊大から早大に移ったが、1998年4月にアジア太平洋研究科修士課程が発足するまでの1年間は、授業負担がなかった。この間、それまでにタイ国立公文書館で収集した資料と手持ちの1940-50年代のタイ国会議事録を主な資料として、「1940年代におけるタイの植民地体制脱却化とインドシナの独立運動」（1998年）を執筆した。

1998年8月前半の2週間、川島真（のち東大教授）さんの案内で台湾の国民党の党史委員会及び私のゼミの台湾人学生徐さんの案内で、国史館で資料収集をした。

当時の国史館は、それまでに私が利用したタイ、日本、アメリカ、イギリスの公文書館に比して最も寛大で、請求した資料は自分で複写機の前に立って実質上無制限にコピーすることができた。2週間通っただけで、1930-1950年代の中泰関係のめばしいものの殆どを複写することができた。当時の国史館利用者の大部分は、中国大陸からの来訪者であった。5年ほど前、私が博士論文を指導した中国人学生が、国史館を訪問した所、中国大陸の人間は利用できないと断られたそうである。台湾での

収集資料をも使って、1941年で終わっている『シャム華人の政治』（1996年）の対象期間を戦中戦後の混乱期まで拡大するつもりであったが、その後他の調査に時間を取られて、今日まで利用できていない。

1998年5月末頃からは、仏教を研究する若手研究者たちと共に、タイのみならず、ラオス、カンボジア、ベトナムでも宗教調査に従事した。その成果の一部は、「タイにおける華僑・華人問題」（『アジア太平洋討究』4号、2002年3月）に利用した。この論文は、2022年2月26日現在のdownload数は早稲田大学リポジトリ（2017年1月以降）が9,049回、リサーチマップ（2021年6月以降）1170回で、合計1万回を超えており、私の著作中のdownload数のトップである。長期に亘った宗教調査は、拙著『南北仏教の出会い』執筆でも役立った。

2003年8月には、私のゼミのカンボジア人留学生ベキニーさんの案内で、プノンペンからメコン河を定期船で遡上し、カンボジア北部のラーオ人居住州ストゥントレンを訪問し、戻ってパイリンにヌオンチアを訪ね、更に東北タイのスリンのクメール系住民の調査を実施した。この調査結果は、「ナショナル化に呑み込まれるエスニシティ：クメール人とは誰か」（『アジア太平洋討究』6号、2004年6月）に書いた。

2004年3月には、ハノイで、タイからベトナム帰った越僑調査をした後、バスでフエからラオバオ・デーサワンのベトナム・ラオス国境を経てサワンナケートに至り、メコン河を渡ってムクダハーンに入った。

2003年8月に東北タイで越僑（在タイベトナム人）調査を行ったが、更に2004年8月に同僚の白石昌也さんとウドン、サコンナコン、ナコンパノムでの越僑調査を行った。2011年8月には、このグループに故笹川秀夫氏も加わり、プノンペンからシアヌークビル、ココンを経てチャンタブリーに出た。

劉茂雲氏は、その後もバンコクを訪問する度に訪ねていたが、1939年に一緒に延安を目指してバンコクを発った、北京に住む欧陽恵氏を紹介してもらった。2004年5月アジア太平洋研究センターの助手であった鄭成さんに通訳をお願いし、北京で欧陽恵氏にインタビューを実施し、さらに同年8月にバンコクで同じく鄭成さんに通訳を頼んで欧陽恵氏に詳細なインタビューを実施した。私は、2005年9月からのサバティカル期間に、バンコクの国立図書館で華字紙を読んで欧陽恵さんの回想と一致するかどうかを確かめ、一方鄭成さんは一人で欧陽恵氏の戦後についてインタビューを重ねた。私は更に2006-07年には、延安などを訪問し、欧陽恵氏の足跡を追い、遅くなったが2012年末に鄭成さんと共著で『中国に帰ったタイ華僑共産党員：欧陽恵氏のバンコク、延安、大連、吉林、北京での経験』（早稲田大学アジア太平洋研究センター、リサーチ・シリーズ No.1）を刊行した。この研究完成には8年をかけた。私は、1930年代にバンコクで刊行された多数の華字紙のシャム共産党関連記事を全て読み尽くして本書に引用した。本書は、東南アジアの華僑共産党員で1930年代後半に延安の中国共産党に投じ、中国共産党の延安整風、反右派闘争、文革を経験しながら、自己の信念を貫いた欧陽恵氏が自らの活動と経験を詳細に語った伝記であり、他に類書はないと思うので、研究資料上の貢献は少なくないと考えているが、どうしてか日本人中国研究者及び東南アジア研究者の関心は惹かないようで早稲田大学リポジトリのdownload数は極端に少ない。

日本語のタイ研究は、専門的にやればやるほど、読者は殆どいない。評価も批判もなく、反響がな

い。この種のもは、英語かタイ語で書くべきものであろう。

2年間のサバティカルと成果

2005年9月から2年間は、早大のサバティカル期間で、主にバンコクで、国立公文書館・国立図書館での文献調査及びインタビュー調査を継続した。これ以後2016年9月までの10余年は、タイ国立公文書館の全ての利用者（タイ人及び外人）中、私は同館を最も頻繁且つ長時間利用した人間だと思ふ。国立公文書館は、8時30分開館16時閉館で月末を除き土曜日も開館する。国立公文書館の閉館後、直ちに同一敷地内の国立図書館に移り、バンコクで刊行された華字紙を閲覧筆写した。国立図書館は当初土日も含め毎日19時30分閉館（但し19時頃には追い出される）だったが2008年正月から平日18時30分閉館、土日は17時閉館に短縮された。国立図書館はプルーム枢密院議長の官舎があるシーサオ・テーウェートにあり、当時の国会にも近いため、2006年ごろからタクシン派及び反タクシン派のデモで賑やかだった。デモのため突如閉館になることもあった。

前述のように2008年9月7日を最後に国立図書館での華字紙デジタルカメラ撮影ができなくなった後は、私は国立公文書館が16時に閉館した後、ター・パチャンのタマサート大学図書館に移動し、同館地下3階に所蔵の古いタイ官報中、私が原本を所蔵していない巻を閲覧筆写した。16時過ぎは、学校や役所の終わる時間でタクシーはなかなかつかまらないが、どうにか空車を拾ってタマサート大に駆け付け19時30分までノートに書き写した。現在ではタイ官報は全てネットに上げられている。筆写や複写をするなど私は無駄なことをしたように思われるかも知れないが、幸いにそうではない。何故なら、タイ官報のサイト検索は、実際は存在する人名、組織名、事項などのヒット率が極めて低く、何年何月何日の号を指定してダウンロードすることもできない。サイト内に存在するにも拘わらずヒット率が低い日本のアジア歴史資料センターサイト以下である（アジア歴史資料センターは、崩し字を正しく読めないアルバイト大学院生に見出しを作成させたために索引語に正しく反映されていないという初歩的問題もあるが）。1945年までのタイ官報の閲覧筆写は、タマサート大学図書館に欠けている号は、再び国立図書館に戻っておこない2015年3月17日に終了した。

2005年9月以来の国立公文書館の利用時には、朝食は近くのスワンドゥシット大学の学生食堂で摂った。まず朝、タクシーでスコタイ通の国内治安維持本部近くで下車し、スワンドゥシット大学まで歩き学生食堂で食事をして、また歩いて、左手にドゥシット宮殿の外壁が日々高くなるのを見ながら、国立公文書館に開館の8時30分前に到着するという日課を繰り返した。この食堂には、1980年過ぎにプラ・メー・トラニーの古本スタンドで古本売りをしていたので私を覚えているという50歳過ぎの、人のいい小母さんが働いていて、私が毎朝注文するカイ・パロには、必ず他の人より豚肉を2-3切れ多く入れてくれた。この食堂で朝昼兼用の食事をして、夕食は果物だけというのが、私の食事の日課であった。

サバティカル中は、短期間ながら2005年9月22日から1週間、及び翌年11月14日から3日間はシンガポール国立大学（NUS）図書館の中文図書室、2005年11月2日から5日間は香港大学図書館で華僑関係の文献調査を行った。NUSではPaul H. Kratoska教授、西崎義則氏などに会った。香港大学図書館には、中国各地の多数の雑誌が集められており、これらを自由にかつ安く複写することができて、中国研究の楽園のように見えたが、2020年以降は変化があったのだろうか。

同じくサバティカル中の2006年7月20日-7月28日は潮州、梅州、広州などを訪問し、2006年12月30日-2007年1月4日は上海、南京訪問。2007年1月17日-1月31日は西安、延安、重慶、武漢、南昌、井崗山、瑞金を訪問した。川面は氷結し長いツララが下がる厳冬の延安から畑に唐（とう）の豆（ソラマメ）の紫の花が咲き、緑したたる高菜が繁る江西の瑞金までを旅した。2007年3月23日-30日は、タイと同じ気候の海南島、それに桂林を訪ね、中国共産党史の史蹟を訪ねた。

サバティカル期間前後を通して、タイで多数のタイ共産党関係者にもインタビューを実施した。

その中に、私が屢々教えを請い、タイ研究の師として特に尊敬している人もいる。

その一人は、スポット・ダートラクーン先生（สุพจน์ ดำนตรระกูล, 1923-2009, 中国名陳廷宣, 海南人三世）である。スポットさんには、立憲革命に参加した人民黨員やその遺族が毎年6月24日の革命記念日にバーンケーンのワット・プラシーマハタートで実施している慰霊祭で、多分1982年に初めて会った。8世王殺害の実行犯という濡れ衣を着せられ長らく中国に亡命し、1976年に29年ぶりに帰国したワチャラチャイ・チャイシティウエート海軍大尉を紹介してもらったのは1989年である。2004年には、タイ人最初のシャム共産党中央委員サワット・ピウカーオの息子を紹介してもらった。70歳くらいまで氏の顔は闘士の如く脂ぎっていたが、次第に穏やかな容貌に変わった。最後はガンに侵されたが、如何にガンと共生するかの本を出版後2年ほどで他界された。

もう一人の師は、チャオ・ポンピチット先生（ชาวี พงษ์พิชิต, 劉源泓, 1924-2012, 広東人二世）である。1941年にタイ共産党に入党した氏は、党中央で様々な活動に従事し、最後は1991年に中国から帰国した。氏に最初にインタビューしたのは、『シャム華人の政治』を出版したのちの1996年である。氏はチュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センターに所属していたので、同センターで、年に1-2回インタビューを重ねた。2011年には、ガンで入院されたノーンケムの病院や自宅でもお会いした。氏は最後までタイ共産党の戦後史を長女に口述されていた。その草稿は私も所持しているが、高齢と病により記憶が混乱している。最後まで共産主義の信奉者であり、忠実な黨員であった氏は、なかなか本当の話を教えてくれなかったが、ガンに罹られたのちは随分話しをされた。

2004年-5年の間には、バーンポーの老人養護施設で10回以上に亘り、タイ共産党の政治局員ダムリ・ルアンスタム氏（ดำรงห์ เรื่องสุวรรณ, 吳維實, 潮州人）にインタビューした。ダムリ氏の居場所を教えてくれたのは、チュラーロンコーン大学文学部准教授スターチャイ・ジムプラサート氏（สุทธชัย ยี่มประเสริฐ, 1956-2017）である。私はダムリ氏とのインタビューテープを大量に所蔵しているが、未だ十分に利用してはいない。スターチャイ氏は学生時代に、南タイのジャングルでタイ共産党に入党した活動家で、タイ共産党の歴史を書くことに情熱を持っていたので、私は時々情報交換を行った。

2009年9月には、タイ共産党の最後の総書記トン・チェームシー氏（ธง แจ่มศรี, 1921-2019, タイ生のベトナム人）をナコンパトムの自宅に訪ねインタビューを実施した。

2009年には、ロシア専門家関東学院大学講師島田顕さんをお願いして、モスクワのルガスピ（RGASPI, ロシア国立社会政治史文書館）でシャム共産党関係の文書を収集の上、ロシア語から日本語に翻訳して頂いた。

以上、長年のアーカイブ及び図書館での収集史料、インタビュー資料、それに島田さんの収集史料などを利用して、「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チャ（Nuon Chea）のバンコク時代

(1942年-1950年)』『アジア太平洋討究』11号(2008年10月),「タイにおける共産主義運動の初期時代(1930-1936): シャム共産党内におけるベトナム人幹部の役割を中心として」(『アジア太平洋討究』13号, 2009年10月), 村嶋英治・鄭成『中国に帰ったタイ華僑共産黨員: 欧陽恵氏のバンコク, 延安, 大連, 吉林, 北京での経験』(早稲田大学アジア太平洋研究センター リサーチシリーズ 2012年12月15日)などを刊行した。

「タイにおける共産主義運動の初期時代(1930-1936)」は, 私の博士ゼミの修了者 Kosit Tiptiempong 氏(東京外国語大学准教授)によって, タイ語訳され2012年に กำเนิดพรรคคอมมิวนิสต์สยาม, *The Birth of the Siam Communist Party (1930-1936)* のタイトルでマティチョン社より, 刊行された。本書について, 前出のハーバード燕京研究所客員研究員のマヒドン大学講師チュラーラック・ブルームパンヤーが同研究所の New Frontiers in Asian Scholarship のサイトで, 2020年に次のように紹介している。

For this book, *Kamnoed Pak Kommist Siam*, Murashima gives the reader outstanding research with the diversity of first-hand evidence. Documents in multiple languages are used to describe and analyze the beginning of Siam or Thailand's communist party (SCP) between 1930 to 1936. Murashima's presentation tells a tale of political instability in Southeast Asia that was affected by forces outside the region.

The book shows that Vietnamese and Chinese communists played a crucial role in the founding of the SCP. In the initial stage, the benefit of having diverse nationalities in the party's membership was the connection and creation of a transnational communist sphere in the region. However, a refusal to build relationships with members who were local Siamese of Chinese descent resulted in damage to the party. While Vietnamese members were more willing to work and create relationships with domestic Siamese, however, by supporting the wrong people without careful consideration, the SCP faced severe problems. Murashima's work implies that the main issue for the SCP in the beginning stages was the lack of collective memory among Southeast Asian ethnic groups. Both Chinese and Vietnamese, even though they were born in Siam territory, were directly influenced by colonialism and imperialism from the West and the Siam central government. Although the Comintern was a transnational movement, in reality, decolonization in Southeast Asia had different results which affected people's sentiments. Under Siam's semi-colonialism, the central government colonized and assimilated minority ethnic groups in the country. While the Vietnamese and Chinese suffered from the process of independence and the revolution movement, the Siamese enjoyed the nation-state building project by following the Western model and becoming part of the modern international community "more peacefully." Therefore, *The Birth of the Siam Communist Party* hints at the fissures in the political dimensions of the region, which indicates the consequences after the Cold War era.

A small flaw of *The Birth of the Siam Communist Party* is the lack of information about ordinary overseas Chinese in SCP. Numerous Chinese became SCP members as the anti-Japanese movement continued. Many pieces of evidence point out that the overseas Chinese from Siam had an

essential role in propagating communist doctrine in the southern part of China. This link between a crucial historical stage that is rarely discussed in academic work might make the book more interesting. However, given the fruitful information and the complexity of the evidence, it's understandable that the writer had to limit the scope of his study, and as a result information about ordinary Chinese is beyond the content of this book.

Nevertheless, *Kamnoed Pak Kommist Siam* is deserving of praise as an outstanding book in Thai studies. With information from multiple languages, Murashima leaves the future historian to re-consider the history of Thailand in the Cold War era and the role of Vietnamese and Chinese diasporas in Thailand as transnational groups which vastly impacted Thai political history.

明治期日タイ関係研究（2010年～）

2007年9月に2年間の在タイ研究から帰国後、「日本の古本屋」サイトで日タイ関係に関する古書の本格的収集を開始した。以来10数年、相当の収集を行った。しかし、『暹羅王国』（図南商会、1897年）や山崎喜八郎『図南策実歴譚』（1899年）のように長期間検索しても入手できていないものもある。

2008年5月3日、私の57歳の誕生日に、私はバンコクの国立公文書館で史料を読んでいたが、私の生まれ育った生家の母屋が全焼した。誰も負傷者が出なかったことは不幸中の幸いであった。

タイ国立公文書館で収集したマイクロフィルムで、大きなものが二つある。一つは、私が博士課程で主指導教員を務めたカノクワンさん（タマサート大学ランパーン分校助教授）に頼んで、2011-12年に収集した *Bangkok Times* 187 リール。Siam Society 所蔵の原紙全てをマイクロ化したものだが、紙面が黒変色したと思われる部分は判読困難である。同協会はデジタル撮影して公開する予定だとクリス・ペーカー氏より10年近く前に聞いたが実現していない。もう一つは2014年時に収集したチュラーロンコーン王（五世王）時代初期の上奏文書綴り130リールである。2012年に国立公文書館に、大部のソムモット親王日記（1883年から30年以上）のコピーを依頼し、料金を先払いしたにも拘わらず、出来上がった後にキャンセルされてしまい引き渡されず、しかも先払い分は既に国庫に入金したので返金できないから、何か他のもので相殺してくれと言われた結果、代わりに入手したものである。国立公文書館の窓口の職員は大変親切で、長年親しみをもっている人達なのだが、公文書館の幹部の中には外国人に対して急に資料をキャンセルするなど理解し難いことをする人もいた。

キャンセルされたソムモット親王日記は、長らく国王秘書官長として五世王に仕えた、五世王の異母弟の日記であり、五世王期の研究には最重要の価値がある史料とすることができる。幸い私は、2013年10月に既にコピーを持っていた人のものをコピーでき、アジア太平洋研究科の授業でもタイ人学生に読ませた。なお、公文書館でソムモット親王日記の代わりに私が得た上奏文綴りは、未だ30数巻分しかインデックスが作られておらず、何が入っているのか不明だが五世王の前半期の外交内政に関する最重要史料に違いない。タイ人でもこれを読み尽くした人は誰もいないのである。私が指導するタイ人博士学生に、これを読み尽くせば凄い博論が書けると勧めたが、彼は僅か最初の10リールほどを読んだだけであった。根性のある、タイ人研究者は本当に少ない。もし10年間タイ国立公文書館に籠もって研究するような好学者のタイ人がいれば、凄い宝物を発見できるはずなのだが。

タイ国立公文書館の調査は、2016年8月初めから9月16日までの調査を最後に一先ず終了した。その2年ほど前から公文書館で閲覧中、時々居眠りするようになった。それ以前は、近くのコンビニでリポビタンDを買って飲むと眠気は吹っ飛び、集中して16時まで仕事ができしたが、リポビタンDを飲んでも楽々と居眠りできるようになった。嘗て先輩の日本人研究者たちがロンドンの公文書館やバンコクの公文書館で居眠りされているところを見て、何という時間の無駄だろうと思ったが、自分もその年齢に達したのである。

以後はバンコクの公文書館には2019年まで毎年1週間足らずしか訪問していない。

2010年代の私の大きなテーマは、明治期の在タイ日本人の研究である。タイ国日本人会の月報『クルンテープ』の編集者レヌカーさんに、何か書いてくれと頼まれて、明治期の在タイ日本人を「バンコクの日本人」のタイトルで、同報に2010年8月号から2018年8月号まで合計96回（途中1回は合併号）、計602頁（早稲田大学リポジトリからdownload可）を書くようになったことが転機となった。

取り上げた日本人を調べるために、例えば稲垣満次郎については、2010年12月に生地の平戸を訪問し、2011年2月1日には名古屋の日泰寺を訪ねた。宮崎滔天の生家を熊本県荒尾市を訪ねたのもその頃である。

国立国会図書館や早大が所蔵する明治期の中央及び地方新聞をマイクロフィルムで読み、外交史料館では、アジア歴史資料センターサイト上には公開されていない、明治大正期の移民関係の文書などを閲覧した。2012-13年には、外交史料館所蔵の、旅券下付表のマイクロフィルム（115リール）を読み、1880年代から1945年まで暹羅・タイを渡航先とした日本人を取り出した。これはマイクロを読みながらパソコンに入力したもので、完了するまで、マイクロリーダーの前に合計丸一年間座っていた。この中から宗教関係で訪タイした人を取りだして、『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者、1888-1945』第1章に解説を付している。

2010年以後の時期もバンコクの公文書館でも資料調査を実施しており、その中には「バンコクの日本人」執筆に役立つものもある。例えば、日本人移民に多数の犠牲者を出したコーラート鉄道の建設関係のファイルなど。また、公文書館所蔵の古い地図で日本人移民に多数の死者を出したコーラートのブカヌン金鉱山の位置を確認し、2013年5月5日にナレスワン大学の高橋勝幸助教授（私の博士ゼミの修了者）とともに訪問した。

2015年2月6日に中部大学国際関係学部青木澄夫教授に「東南アジアの日本人社会の形成と変遷」シンポジウムに招かれた際、青木先生がヤフオクで資料を収集されていることを聞き、早速私も開始し4年間ほど続けた。

私が、日本の古本屋サイトやヤフオクで、古本や雑誌を購入せざるを得ない最大の理由は、日本の国会図書館も大規模な大学図書館も図書・雑誌は欠本、欠号だけであるからである。日本の公共図書館の収集システムに欠陥があるためか、あるいは収集に人生をかける司書がいないためか、日本人の文化レベルを疑われても仕方がないほどの惨状が長年続いていることは残念だ。

2016年11月にはネット検索の結果、岩本千綱のお孫さんを見つけ出し、岩本千綱の墓参を果すとともに、貴重な遺稿、遺品を見せて頂いた（「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ（シヤム）前の経歴と移民事業を中心に（中）」『アジア太平洋討究』29号、2017年3月）。

2017年秋には成田山霊光館所蔵柏原文太郎文書を読み、1910年代の日タイ経済関係と在日華僑の

役割について新知識を得た。

2016年には前述のように『堀井龍司憲兵中佐日記』を編集し、2017年3月に出版し、2018年9月からは『天田六郎氏遺稿』を編集し、2019年3月に出版した。2018年7月の雲南省騰越調査では、岩本千綱と関係があった刀安仁に関する資料を得たが、未だ執筆に着手できていない。

退職が近くなった2018年からは早稲田大学レポジトリの定めた手続に従い、出版社等の承認を得て、私の1975年以後の著作を同レポジトリに掲載することを開始し、2021年半ばまでに、ほぼ完了した。2021年6月にはリサーチマップにも自著のUploadができることに気付き、実施した。

2019年以後、私が殆どの時間を投じているのは『南北仏教の出会い』の執筆である。これは、もう少し早く完了できる積もりでいたが、次第に分量が増大し、本文16章、708頁に達した。

アジア太平洋研究科博士後期課程内規の作成

私の関与した、アジア太平洋研究科行政面のことについて2点書いておきたい。

私の理解では、学歴主義と学位主義は異なる。

学歴主義は、出身大学や学部の社会的評価の優劣を重視し、学位主義は出身大学名よりも取得した修士号、博士号を重視するものである。

私の学歴には問題はないと思うし、法学部の演習では大学院生と一緒にだったので、大学院の授業や学位に特別な魅力は感じていなかった。日本では、大学の教員として、大学、大学院で研究指導を担当する資格があるかどうかの審査では、学位の有無はそれほど重要視されず、研究業績と経歴が最重要である。特に、新設大学院の場合は文科省の設置審が資格審査を行う。同審議会が認定した修士課程の研究指導の資格は、修士〇合、博士後期課程のそれは博士〇合と称される。私はアジア太平洋研究科の修士課程の新設に当たって設置審に1998年に修士〇合を、2000年の博士後期課程の新設に当たって設置審に博士〇合を認定された。これで私は博士号を取得する必要性が全くなかった。

大学院アジア太平洋研究科に、期待するほどには日本人学生が集まらないのは、日本社会が学位主義社会ではないことの一証左であろう。

ところが、日本以外のアジアやアメリカは学位主義の社会である。タイでは学術とは無関係な商人たちが大学に高額寄付をして、代わりに名誉博士号を得、それで名前の前にDr.を付して呼ばれることを無上の名誉だと思っている。アジア諸国から国費で留学生を招いて、博士号も出さずに帰国させることは、これらの社会の価値観を無視しているだけではなく、折角の国費留学生が帰国後それぞれの社会で指導的地位を得るために大きな障害となる。これはわざわざ税金で招いた留学生の足を引っ張る矛盾した行為である。それに、抑も日本の博士号は、大学院設置基準（文部省令）第4条を率直に読めば、駆け出しの新米研究者に与える程度のものであるから、勿体ぶる必要は全くないのである。

私はアジア太平洋研究科国際関係専攻主任の職務上、アジア太平洋研究科の博士後期課程の内規を作成することを担当した。早大ほどの歴史がある大規模大学には、博士後期課程の規則の雛形など、既に十分整っているだろうと思ったが、全くの思い違いでどこにもなかった。当然それを理解している事務職員もいなかった。それに、アジア太平洋研究科の専任教員の中にも博士後期課程で指導した実績がある人は、山澤逸平先生（1937-2018）ぐらいしかいなかった。

私は東大の制度なども参照しながら、山澤先生のアドバイスを心得て博士後期課程の内規案を作成し

た。その際、心懸けたことは、学生が安心して博論に集中できるように、学位取得までの段階的な筋道を明示し、それを踏めば間違いなく学位に近付くことができるようにしたことである⁷。

お蔭で多数のアジアからの留学生が博士号を取得し、2010年前後には、アジア太平洋研究科の博士課程修了者数が早大の文系研究科のトップになったこともある。

なお、私は、博士論文の審査報告書の最後に、次の決まり文句を入れている。

口述試験の内容を踏まえ、論文に関して慎重かつ総合的に審査を行なった結果、博士課程の目的として、大学院設置基準（文部省令）第4条にいう、「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行」うために「必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識」を、十分に備えていることが、本論文により証明されたものと認め、全審査委員が一致して合格と判定した。

科研費

私が研究科長に在任した際、専任教員募集の応募要件として科研費獲得の項目を入れた。早大本部は早大をリサーチ大学に発展させることを公言しており、また、科研費獲得額は日本の大学評価における重要な指標として使われているので、早大本部は科研費の獲得増大を常々強調していた。

科研費審査は1990年代後半に比較的公平なPeer Review方式にかわった。審査では研究計画書が重視されている。大学院の主要な教育は学生の論文指導であり、学生に研究計画書を書かせることから始まる。科研費に何回応募しても獲得できない人は、説得力ある研究計画書を書く力量がない人と考えられるので、それであれば大学院での学生の研究指導には適性がないと考えたのである。

某学部の大学院設立に際し、研究科長の私は立場上設立委員の一人に任じられた。設立委員会の人事案件で、科研費を一回も獲得したことがない人を直ちに専任で採用しようという提案があった時、私は反対したことがある。科研費重視、まず任期付き採用という大学本部の基本方針に悖ると考えたからであるが、本部から来た一部教員の支持を得られず成就できなかった。

私は、研究科長・センター所長として、アジア太平洋研究科・センターで採用する講師、助教、助手には科研費への応募を義務付けた。

このような結果、国際経営が飛び出して行った後のアジア太平洋研究科・センターは、学内で科研費の応募数でも獲得数でも目立った成績を上げるようになった。

アジア太平洋研究科の私の授業例

私は大学院の授業でも、研究論文を書く方法を伝えることを重視した。例えば、私がアジア太平洋研究科で日本語、英語で実施した「東南アジアの政治社会と文化論」の授業のシラバスの主要部を抜萃すると次の通りである。

第1週に授業の概要を説明する。

第2週から、第14週の授業は、毎週、次のように実施する。

⁷『早稲田大学大学院アジア太平洋研究科創設10周年記念誌』2008年、67-68頁参照。

報告者は、東南アジア、東アジアあるいはアジア全般に関する学術論文（和英のいずれか）を選び、選んだ論文の著者（Google scholar, scopusなどで検索のこと）及び論文の背景（You tubeなどの使用も可）の説明などの後、下記の5項目に答える内容の報告を40分～50分で行う。他の受講者も、報告者の選んだ論文を事前に読み、下記5項目について簡単なレポート（A4, 2枚程度）を準備して授業に参加し、報告者の報告に対し、質疑応答、コメント、議論を行う。

5項目とは、

- 1, この研究論文の研究課題は何か、その課題は学術上どのような重要性があるのか。著者は、この論文が既存研究とどこが異なっており、どう新しいのか、何が研究上の貢献であると述べているか。
- 2, この論文の著者は、どのような分析枠組、理論を用いているか。それは既存のものか、あるいは著者が説明のために独自に考え出したものか。著者は自分の分析、議論を説得的にするため、論文の構造をどのように構成しているか。
- 3, この論文作成のため著者は、どのような方法で資料を収集したのか。著者が集めた資料だけで説得的な議論を行うことに成功しているか。欠けているものがあるか。

上記第1～第3項目は、良い論文であれば、論文の序章、結論部分から容易に取り出すことができます。まず、序章と結論を最初に読みましょう。また、報告者は、序章、結論部分に、第1～第3項目に該当することが書かれている論文を、できるだけ選んでください。

4, 論文の簡単な要約

5, コメント（あれば）

全受講者は、この5項目を、A42枚程度に書いて、その論文を使用した授業日の最後に提出する。但し、事情のある場合はメールもしくは次週以降提出可。

第15回（週）は、合計13回の論文精読の成果を踏まえて、どのように学術論文を書けばよいのか要約する。

（英文）

Assignments

For each class one student will choose a journal article (for example, from the Journal of South East Asia Studies) and present it to the class, which will be followed by a discussion. Students will have read the article and write a paper (A4, 2-pages) addressing the following points:

- 1.) The author's research question and the significance of question and/or topic
- 2.) The author's conceptual framework, does the author use any theory from the field and/or their own framework to answer the question? How is the paper organized?
- 3.) Author's research methods, what kind of methods/data collection does the author use? Is the author's research enough?
- 4.) Summary of the article
- 5.) Comments

アジア太平洋研究科修士課程で、私が研究指導を担当して修士論文を書いて修了した学生（未修了

村嶋ゼミ修士修了生年度別国籍別人数表

年度	日本	タイ	カンボジア	ラオス	ミャンマー	インドネシア	マレーシア	中国	台湾	韓国	欧米	計
1999	2	1					1		1			5
2000	3								1			4
2001	7						1					8
2002	8											8
2003	4		1									5
2004	2	1										3
2005	4	2		3								9
2006	2	2										4
2007												0
2008												0
2009		1										1
2010	1	1										2
2011	5					1						6
2012		2	1		1						1	5
2013	1	1	1			1		2	1		1	8
2014		5							1		1	7
2015	1	1	1					1	2			6
2016		1	1		2			1		1		6
2017		2	1				1	1	2			7
2018		1	1			1		3		1		7
2019		5	1					4	1			11
2020								5	2			7
2021		1						5	1	1		8
計	40	27	8	3	3	3	3	22	12	3	3	127

者、途中から他ゼミに移動した者は含まない、但し、途中から村嶋ゼミに転じて来た者は含む)の年度別、国籍別統計は以上の通りである。2007年及び2008年がゼロなのは、その前の2年間、私はサバティカルであったためである。2011年まで日本人が多いが、その後はタイ、中国、台湾の学生が中心となったことも判る。

2000年度から始まった博士後期課程では、最初から村嶋ゼミに入った学生は37人(タイ24、日本10、中国1、韓国1、カンボジア1)で、2022年3月迄に修了した者は23人(タイ15、日本5、中国1、韓国1、カンボジア1)である。博士修了者は、現在タイの7大学、日本の3大学、カンボジアの1大学で常勤の教職に就いている。博士論文の審査においては、アジア太平洋研究科の専任教員の外に、宮田敏之、遠藤元、重富真一、重富スパボン、坪井善明、根本敬、浅見靖仁、南原真、伊藤友美、加納寛、笹川秀夫、菅谷実、Thongchai Winichakul, Michael J. Montesano, Puangthong Pawakapan, Wasana Wongsurawat, Kosit Tiptiempong (順不同)の各先生に審査委員をお願いすることができた。

私は2018年11月には鼠径ヘルニアの手術を受け、2021年4月には白内障の手術を受けた。年齢相応の老け方であろう。来年のことどころか、明日のことを言っても鬼に笑われそうな年齢域に入っているのである。

今のところ、薬のお世話にはならず、歯も揃っている。パソコンが頭脳の代わりに記憶してくれ、手指の代わりに代筆してくれる間は、しばしタイ研究を続けたい。(2022年2月6日記)